

# 柏原市埋蔵文化財発掘調査概報

1984年度

1985年3月

柏原市教育委員会

## は し が き

わが町柏原は、大和川や生駒、二上山系に代表される豊かで緑濃い自然に恵まれ、古来より多くの人々の生活する舞台となってきました。自然の恩恵に浴しながら動物を狩り、木の実を集めて食料としていた1万年以上も前の時代から、自然に手を加え、その恐威を柔らげ、より有効に自然を利用しようとした大和川の付け替え工事にみられる近世、そして現代まで、柏原には興味深い人類史が展開しています。そうした私たちの祖先の足跡は玉手山、平尾山などの全国的に著名な古墳群、壁画で知られる高井田、安福寺の横穴墓群、国分寺、河内六寺等の古代寺院群などの市内に所在する数多くの遺跡からたどることができます。祖先から受けついだ生活様式や自然が失なわれつつある今日、遺跡や文化財を、それを育んだ豊かな自然との調和をはかりながら保護、保存し、後世の人々に伝えていくことが現代を生きる私たちのつとめでありましょう。

本書は昭和59年度に国庫補助事業として行なった土木工事に先立つ緊急発掘調査の記録と、そこで得られた貴重な埋蔵文化財の概要です。発掘調査に際しては関係各位や市民の方々の深い理解と協力を賜りました。記して感謝の意を表するものです。

本年度4月に、「柏原市歴史資料館」を教育センター一階に開館しました。ここでは昭和55年度以降の発掘調査によって得られた資料を中心に、市民の方々から寄贈いただいた資料を加え、郷土柏原の歴史をわかりやすく興味をもって見ていただけるよう展示しています。今後この「歴史資料館」を活動の中心に、より多くの方々に郷土の歴史の理解を深めていただけるよう努めてまいりたいと思います。

昭和60年3月

柏原市教育委員会

## 例 言

1. 本書は、柏原市教育委員会が、国庫補助事業（総額 9,000,000円、国補助率50%、府補助率25%、市負担率25%）として計画し、社会教育課文化財担当が実施した、柏原市内遺跡群緊急発掘調査概要報告書である。
2. 調査は、柏原市教育委員会社会教育課、竹下 賢、北野 重、花田勝広（59年3月退職）、安村俊史、田中久雄、桑野一幸を担当者とし、昭和59年4月1日に着手し、昭和60年3月31日をもって終了した。
3. 本書には、文化財保護法第57条の2に基づく、届け出があった168件のうち、昭和59年1月1日から12月31日までに着手した、土木工事等に伴う事前発掘調査の概要を記載している。
4. 調査の実施と調整にあたっては、以下の諸氏の協力をえた。

広岡 勉	大塚淳子	松田光代	笹井京子	石田成年	井宮好彦
上條裕典	佐藤 尚	藤沼敏則	丸本周生	清瀧健二	山本浩幸
秋田大介	江浦 洋	辻元登志夫	伊藤泰臣	今中太郎	福本一高
小野民裕	濱田延光	竹下彰子	福本理香	森下尚美	藤本直美
松村富子	中田ゆかり	種村政美	椋本幸枝	今西泰子	奥野 清
道狭基藏	井上岩次郎	森口喜信	谷口鉄治	麻 栄三郎	朝田行雄
川端長三郎	山田貞一	分才春信	西岡武重	玉野正一	山本芳一
村口ゆき子	飯村邦子	坂本道子	乃一敏恵	松成早苗	吉居豊子
横関勢津子	竹下真紀	（順不同、敬称略）			
5. 本書の監修は竹下 賢が担当した。
6. 本文中の各遺跡の調査位置図中、黒塗りの調査地区は国庫補助事業による発掘を、網点は原因者負担及び公共事業に伴う事前発掘調査の範囲を示すものである。本書で使用した方位は磁北、標高はT.P.である。
7. 青谷廃寺84-1次調査においては、奈良国立文化財研究所、山本忠尚、山中敏史両氏の指導を得た。
8. 本調査にあたっては、写真、実測図などを記録として残すと共に、カラースライドを作成した。広く利用されることを願うものである。また、出土した遺物は、写真、実測図と共に当市教育委員会、歴史資料館にて保管、展示等を行なっている。

# 目 次

は し が き

例 言

1984年度柏原市内遺跡群発掘調査一覧 (国庫補助事業)

1984年度柏原市内遺跡群立会調査一覧

## I. 柏原地区の調査

大泉遺跡

• 84-7次調査..... 1

太平寺遺跡

• 84-1, 2次調査..... 10

安堂遺跡

• 84-1次調査..... 13

平尾山古墳群 (太平寺支群)

• 84-1次調査..... 31

青谷廃寺

• 84-1次調査..... 33

## II. 国分地区の調査

田辺遺跡

• 84-3次調査..... 68

松岳山古墳群

• 84-2次調査 (茶臼塚古墳) ..... 73

## 1984年度 柏原市内遺跡群発掘調査一覧

(国庫補助事業)

### 柏原地区

遺跡名	所在地	面積㎡	申請者	用途	担当	調査期日	備考
大黒 84-7	大黒4丁目47-3	182.54	田中 耕作	個人住宅建設	北野	12-17~12-27	本書1ページ
太平寺 84-1	安堂町903-1	453.0	古村 正義	宅地造成	桑野	4-11~4-17	本書10ページ
太平寺 84-2	安堂町903-1	162.36	山中 恭一	個人住宅建設	桑野	4-11~4-17	本書10ページ
安堂 84-1	安堂町697-1	182.83	山本 政清	老人会館建設	安村	8-30~9-8	本書13ページ
高井田 横穴群 84-1	高井田622-1	560.0	畑本 公三	個人住宅建設	北野	8-22~8-23	2.5×3mのトレンチを設定。 約1mで地山。遺物、遺構なし。
青谷 庵寺 84-1	青谷164-1他	8250.0	安田 光憲	ゴルフ練習場 建設	竹下 出中 桑野	4-25~11-13	本書33ページ
平尾山 古墳群 84-1	大黒4丁目641-1	320.56	古村 正義	宅地造成	安村	10-23~10-26	本書31ページ

### 国分地区

田辺 84-3	国分本町7丁目1-20	813.0	山西 敏一	屋内運動場 建設	北野	9-27~10-1	本書68ページ
松岳山 古墳群 84-2	大字国分1655	10.0	裏山弥太郎	水櫃建設	安村	12-17~12-26	本書73ページ
河内国 分寺 84-1	国分東條町3871	423.64	中尾 輝彦	個人住宅建設	北野	2-27	1.5×4.5mのトレンチを設定。 10~30cmで地山。遺物、遺構なし。

この一覧表には昭和59年度の国庫補助事業として計画、実施した発掘調査のうち、昭和59年1月1日~12月31日の間に着手したものを掲載している。

本年度は国庫補助事業による発掘調査の件数が、昨年度と比較し減少している反面、次ページに示すように立会調査の件数が倍増している。これは昭和55年度以来の埋蔵文化財発掘調査の成果であり、市内各地域における遺跡の深度、遺存状況が詳しく把握されてきたためである。

調査位置については表中に示す当該ページを参照されたい。

## 1984年度 柏原市内遺跡群立会調査一覽

### 柏原地区

遺跡名	所在地	面積㎡	申請者	用途	担当	調査期日	備 考
船 橋	大正2丁目10-8	2250.1	近畿地方建設局 大船工事事務局	庁舎建設	安村	5・2	柏教文58,1-152。遺物・遺構なし。地表下4m盛土
◦	大正3丁目386-10, 11, 1の一部	439.29	ミヤコ住建	分譲住宅建設	◦	5・16	柏教文3-6。遺物・遺構なし。
◦	古町2丁目533-1	553.50	大坂 健一	個人住宅建設	北野	8・28	柏教文3-13。遺物・遺構なし。
本 郷	本郷2丁目904	305.39	筧 又次	個人住宅建設	桑野	10・30	柏教文3-7。遺物・遺構なし。地表下80cm盛土。
◦	本郷2丁目895	267.46	柏元 孝治	賃貸住宅建設	◦	11・22	柏教文3-35。遺物・遺構なし。地表下1m盛土。
◦	本郷2丁目893	514.04	柏元 孝治	◦	◦	◦	柏教文1-47。遺物・遺構なし。地表下1m盛土。東に傾斜。
山ノ井	山ノ井町613-6, 7	372.45	森田 幸一	個人住宅建設	安村	5・30	柏教文1-47。遺物・遺構なし。地表下1m旧水田面。
大 泉	法善寺4丁目10-25 1丁目14-6	390.0	関西電力大阪支店	地中配電用管路埋設	花田	1・15	柏教文58,1-178。遺物・遺構なし。地表下3m盛土。
大泉南	大泉4丁目239-7	118.93	山田 敏明	個人住宅建設	安村	4・14	柏教文1-41。遺物・遺構なし。地表下30cm盛土。
太平寺 安 堂	安堂町710先	5.2	関西電力羽曳野営業所	電柱新設	◦	6・25	柏教文3-8。一部で土師器片出土。地表下0.5-1mで地山。
◦	太平寺1丁目69-7	192.02	田中 雅昭	工場・倉庫・事務所建設	◦	7・7	柏教文3-15。遺物・遺構なし。
◦	太平寺1丁目69-4	228.87	藤井 正雄	◦	◦	◦	柏教文3-16。遺物・遺構なし。
◦	太平寺1丁目139-11	80.91	福永 周治	個人住宅建設	◦	9・11	柏教文3-20。遺物・遺構なし。地表下1m盛土。
◦	太平寺1丁目138-1	351.48	田中 孝子	倉庫建設	◦	9・21	柏教文3-24。遺物・遺構なし。地表下80cmで砂礫。大和川跡跡?
◦	太平寺1丁目145-11	310.94	小柳 紀道	◦	桑野	10・5	柏教文3-25。遺物・遺構なし。地表下1.5m砂礫。
◦	太平寺2丁目536-1	498.47	高井 大男	共同住宅建設	◦	10・6	柏教文3-25。遺物・遺構なし。地表下1.5m湿地。
高井田原寺 (真殿跡)	高井田458, 197-272	27.3	関西電力羽曳野営業所	電柱新設	田中	4・26	柏教文1-24。遺物・遺構なし。地表下2m前後で地山。
◦	高井田1310	215.0	日本国有鉄道天王寺駅跡部局	河川改修	安村	2・20	柏教文58,1-184。
◦	高井田462-1-459-3	455.0	市郷市君藤	◦	◦	3・1-3・31	柏教文58,1-185。
青谷院 寺	青谷229-1	539.66	平野安太郎	倉庫建設	桑野	11・9	柏教文3-34。遺物・遺構なし。地表下1.3m旧水田面。
平尾山 古墳群	高井田949, 950	2690.0	青山 博士	個人住宅建設	◦	12・27	柏教文58,1-151。遺物・遺構なし。地表下1.5m谷内の盛土。
<b>国分地区</b>							
玉手山	旭ヶ丘1丁目481-2,5	263.79	山分 義一	個人住宅建設	花田	2・6	柏教文58,1-144。遺物・遺構なし。地表下20cmで地山。
◦	旭ヶ丘2丁目315-178	98.0	三浦 啓至	◦	◦	1・20	柏教文58,1-170。遺物・遺構なし。
◦	玉手町145-135	91.09	富士工務店	◦	◦	1・6	柏教文58,1-181。遺物・遺構なし。地表下1mで地山。

玉手山	玉手町145-145	95.60	富士工務店	個人住宅建設	花田	1・6	柏教文58,1-181。遺物・遺構なし。地表下60cmで地山。
*	玉手町145-137	100.0	*	*	*	1・20	柏教文1-1。遺物・遺構なし。地表下1mで地山。
*	玉手町145-138	*	*	*	*	*	柏教文1-2。遺物・遺構なし。地表下90cmで地山。
*	玉手町145-140	*	*	*	*	*	柏教文1-3。遺物・遺構なし。地山下1mで地山。
*	玉手町145-143	*	*	*	*	*	柏教文1-4。遺物・遺構なし。地表下50cmで地山。
*	玉手町214-1	767.0	松井 博一	*	安村	3・12	柏教文1-10。遺物・遺構なし。表土下90cmで青灰色砂質シルト層。
*	旭ヶ丘2丁目871-23	288.0	岩井 マキ	*	*	3・5	柏教文1-15。遺物・遺構なし。地表下50cm盛土。
*	旭ヶ丘2丁目315-125	113.0	松本 善雄	*	*	3・28	柏教文1-19。遺物・遺構なし。表土下40cm盛土。
*	玉手町145-111,599-2,145-134	252.66	濱田 修一	*	*	5・9	柏教文1-40。遺物・遺構なし。地表下1.4m 盛土。
*	旭ヶ丘1丁目576-1	132.0	東田 有弘	*	*	6・15	柏教文1-27。遺物・遺構なし。
*	旭ヶ丘2丁目10-26	267.51	佐伯 敏之	*	*	6・26	柏教文3-4。遺物・遺構なし。表土下20cm地山。
*	円明871-31	292.4	足立 昌己	*	竹下	6・27	柏教文3-14。遺物・遺構なし。表土下 大灰層。
*	旭ヶ丘1丁目390-19	364.48	桑田 幸保	*	安村	7・20	柏教文3-17。遺物・遺構なし。表土下90cm-1.5mで地山。西に傾斜。
*	円明町217-3	2533.3	能瀬精工株式会社	事務所・工場会社	*	8・2	柏教文3-9。遺物・遺構なし。地表下1mで地山。
*	旭ヶ丘2丁目4916,4917-1	1300.0	大阪ガス株式会社	配管上屋建設	桑野	12・6	柏教文3-30。遺物・遺構なし。地表下1m 盛土。
玉手山古墳群	玉手町390	53.6	大崎 信有	墓建造成	*	11・8	柏教文3-37。遺物・遺構なし。地山(花崗岩)は西北に傾斜。
田 辺	国分本町2237-3	28.4	高尾 勝	個人住宅建設	安村	4・17	柏教文58,1-143。遺物・遺構なし。地山(黄白色砂質土)。
*	国分市場1丁目518-2	189.22 146.31	呉 啓裕	*	*	3・15	柏教文1-25。遺物・遺構なし。
*	国分本町6丁目1443-2	146.31	浅野 豊治	*	花田	2・17	柏教文58,1-127。遺物・遺構なし。地表下60cm地山(黄褐色)。
*	国分本町7丁目967-2	297.66	稲山 実	*	桑野	4・2	柏教文1-33。遺物・遺構なし。地表下70cm盛土。以下黄灰色粘質土。
*	国分本町6丁目14-10	140.01	西本 一郎	*	安村	7・3	柏教文3-2。遺物・遺構なし。地表下30cm地山。東に傾斜。
原 山	旭ヶ丘3丁目12-7	181.75	大阪ガス東部専管事業所	ガス管埋設	*	9-11~10-1	柏教文3-11。遺物・遺構なし。表土下1.5m 盛土。
河内国分尼寺跡	国分市場2丁目2556-1	855.0	乾 博武	倉庫建設	*	5・31	柏教文1-50。遺物・遺構なし。隣接の頃から1.5m 高く盛土。
*	国分市場2丁目2551	469.0	橋浦 清隆	店舗・事業所建設	花田	1・23	柏教文1-5。遺物・遺構なし。
松雲山古墳群	国分市場1丁目6-20,21	150.0	柏原市水道局	上水道管布設	桑野	10-23~10-24	柏教文3-18。遺物・遺構なし。地表下1.5m 砂、礫盛土。



# おお がた 大 県 遺 跡

## 84-7 次調査

- ・調査地区所在地 柏原市大県4丁目47-3
- ・調査担当者 北野 重
- ・調査期間 1984年12月17日～12月27日
- ・調査面積 64㎡ / 182.54㎡

当調査区は、大県遺跡の中心地にあたり、大県廃寺（大里寺）や大県郡衙の比定地に近接する。位置は、生駒西麓の傾斜変換点付近で標高23m ライン上にあり、東高野街道（旧国道170号線）から鐔比古神社（式内社）に東直進する参道に北面している。鐔比古神社から200m 西側にあたる。調査は、個人住宅建設に伴う事前発掘調査で家屋建築位置にトレンチを設定し実施した。トレンチはくの字形に6×10cmの範囲で、深度0.2～1.3m まで掘削した。遺構面は中世と奈良時代の2面を検出し、それぞれの上層に遺物包含層が見られた。各時代別に遺構と遺物を略記していきたい。

## 中世の遺構

## ・集石遺構-1

調査区の南西隅より検出した遺構で、上層の遺物包含層除去後に検出した。10～25cm大の礫が雑多に並べられており、礫中に遺物の混入が見られた。遺物は、瓦が多く土器片も割合混入している。石の下層には何ら遺物及び遺構が検出されなかった。直ぐ北側には同時期の井戸があり、この井戸は石組みであってこの上部が何らかの原因で破損し排棄されたのかもしれない。

## ・井戸-2

集石遺構の直ぐ北側に検出した石組みの井戸である。10～40cm大の石を円形になるように積み上げたもので下方になるに従い拡がっている。内径80～90cm、下方では85～100cm位である。約1.3m まで掘り下げたが大小の石が多数埋没しており、以下は掘削出来なかった。埋土は茶灰色粘質土で、出土遺物は瓦が少量出土した。掘方は東側のみしか確認出来なかったが、石組みの外側に約40cmの広がりをもっており、ほぼ円形を呈している。

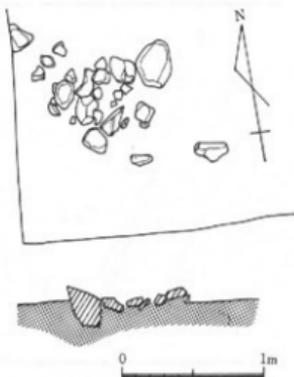


図-3 集石遺構-1

• 土塚-1

調査区中央部やや西寄りの場所から中央に大きな石を納置した楕円形の土塚を検出した。規模は、長辺1.4m、短辺1.3mを測る楕円形の土塚で深さ16cmを測る。石の大きさは径50cm厚さ30数cmを測り、花崗岩である。埋土

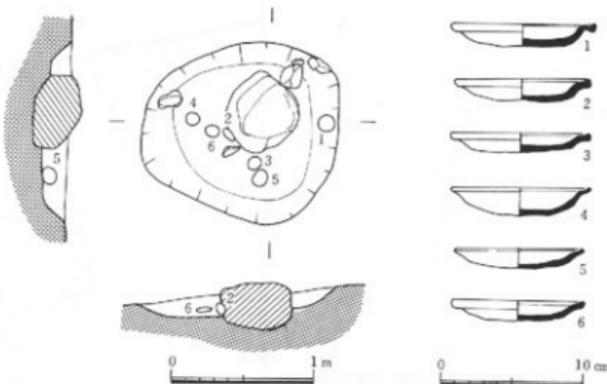


図-4 土塚-1と出土遺物

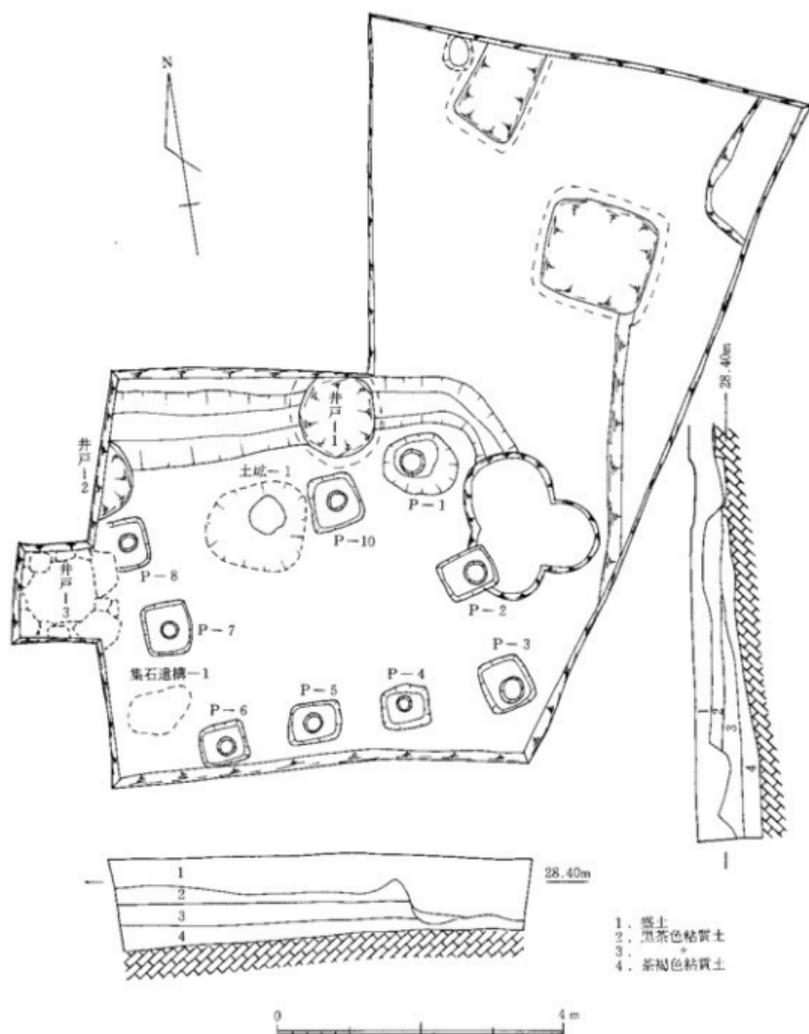
は炭を割合含む黒灰色粘質土である。炭は全体によく混ざった状態である。出土遺物は、土塚中央部に座した石の南側から検出された完形6個体の土師器小皿で、出土状態は正営位のもの、裏返しのもの、石から滑り落ち側倒しているもの等がある。その他にはほとんど遺物は出土しなかった。また、石が土塚の底部より下へ入り込んでいるが、これは石の自重によるものと思われる。

奈良時代の遺構

• 建物-1

P-No	規模	深さ	柱穴規模	掘方形状	土色	備考	
1	1.08×0.08	0.363	0.32	三角形	茶褐色粘質土	底部に根石	
2	0.60×(0.74)	0.377	0.29	方形	茶褐色粘質土		
3	0.76×0.66	0.331	0.31	方形	茶褐色粘質土		
4	0.60×0.66	0.169	0.21	方形	茶褐色粘質土		
5	0.60×0.72	0.250	0.26	方形	茶褐色粘質土		
6	0.58×0.60	0.300	0.24	方形	茶褐色粘質土		
7	0.76×0.68	0.265	0.20	方形	茶褐色粘質土		
8	0.70×(0.66)	0.295	0.29	方形	茶褐色粘質土		
9	—×—	—	—	(方形)	—		消滅
10	0.76×0.72	0.310	0.29	方形	茶褐色粘質土		
平均	0.72×0.70	0.296	0.268				

表-1 建物-1ピット比較表(単位はm)



図一五 遺構平面図（上層遺構は点線）

南西向きの傾斜地に位置する。ピットは10個を数え、それぞれ建物方向と同一方向の隅丸方形掘方に円形の柱穴を持つ。規模は、一辺60～80cm、柱穴径30cm前後のものが多く。出土遺物は乏しく土師器と須恵器の細片が出土したが時期を明確に出来ない。遺物包含層から出土したも

のから見れば奈良時代の遺構と考えられる。建物方向は磁北に対して5°西側に振る。

#### ・溝-1

建物-1の直ぐ北側に検出した直線的な溝で建物と平行している。建物の北東隅で円弧状に屈曲して90°方向を転換する。その直後に近世の攪乱があり、溝は削平されている。溝幅は0.57~1.15mあり、東側から西側へ下向しながら拡がる。深さは17~34cmを測る。埋土は、茶褐色粘質土で最下層には部分的に砂質土が認められた。溝の北側及び東側は、わずかな段を持ち立ちあがり、さらに緩い傾斜地が続く。上段部分は奈良時代の遺物包含層がほとんどなく、中近世の遺構によって削平されている可能性がある。

#### 近世の遺構

調査区の北側部分から、明治から昭和にかけての井戸や防空壕、芋穴等を検出した。今回の家屋建築以前の家屋に付随する施設であろう。

#### 出土遺物

今回の調査では、石器、土師器、須恵器、瓦、瓦器、鉄滓、鑷羽口、銅製品等各時代の多岐にわたる遺物が出土した。これらの遺物は、整理箱7箱を数え、奈良時代と中世に至る時期が中心である。遺物は土坑1から出土したものを除きほとんど遺構の上層に堆積した遺物包含層からのものである。

#### 中世の遺物

##### ・土坑1出土遺物

6枚の完形の土師器小皿が出土した。小皿は、口縁部を水平方向に折り曲げ端部を上方に折り返す形態のものである。その中には端部の折り返しが明瞭なものやや退化しかかったものがある。色調はいずれも乳灰色から灰茶色を呈し、胎土中金雲母とくさり礫が多く含まれており生駒西麓の粘土を使用したものである。砂粒はほとんど含まず精良である。口径は、8.9cm 1枚、9.0cm 1枚、9.2cm 1枚、9.6cm 2枚、9.8cm 1枚である。

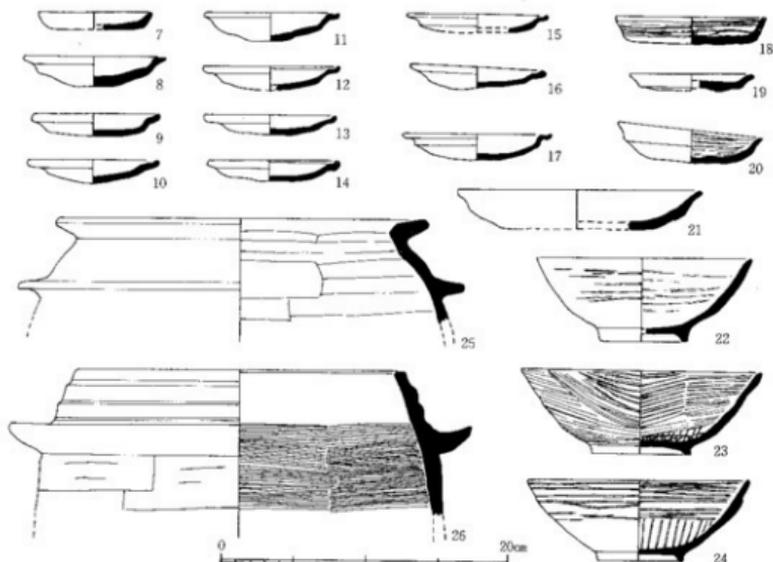
#### 遺物包含層遺物

##### ・土師器小皿

土師器小皿は、土坑1出土小皿と類似するものが多い。7は、平らな底部から外上方へ真直ぐ伸び端部を丸くそのまま終らせるものである。この1点のみがやや形態を異にする。胎土は他のものと同様生駒西麓産の胎土である。色調は、灰褐色から灰茶色を呈する。

##### ・土師器大皿

大皿は数量が少ない。口縁部は外面を強くヨコナデしている事から外反気味に立ちあがり端部を丸く終らせる。内面はヨコナデ調整をし、外面は軽く指押えしている。胎土は、金雲母とくさり礫を含み土師器小皿と同様の胎土である。色調は、灰茶色。口径16.8cm、器高2.7cm。焼成はやや甘く、仕上げは雑である。残存度は8分の1である。



図—6 中世の遺物

• 土師器碗

22は、土師器碗である。内外面共によく摩耗が進んでいる。外面は、ヘラ削り後ヘラミガキを施こし、内面にも割合密なヘラミガキを行う。高台はやや高い断面逆台形のしっかりしたものを付ける。胎土は、金雲母とくさり礫、微砂粒を含み、色調は、明茶灰色。口径14.6cm、器高5.9cm、底径5.3cmを測る。

• 黒色土器

黒色土器には小皿と碗がある。23は、内外面に炭素が吸着し、内面の口縁端部に浅い沈線がある。外面調整はヘラ削り後割合密な四分割のヘラミガキを行う。内底面は表面摩耗によりみにくいが、直線及びラセンの暗文を施す。内面も横方向のミガキを分割してかなり丁寧に施している。高台は外側へふんばり、断面四辺形である。胎土は金雲母と微砂粒が多く含まれる。口径16.8cm、器高は5.9cm、底径5.9cmである。18は、内外面に炭素が吸着し、平らな底面から口縁部は外上方へ伸びる。内外面にヘラミガキを施す。体部外面下方にヘラ削りも見られる。内底面は、対角線上に中心で交わる方向の直線暗文を施す。胎土は、金雲母と微砂粒を多く含んでいる。

• 瓦器

瓦器は小皿と碗がある。20は、内面のみヘラミガキがみられ、内底面は折り返し、ジグザグ

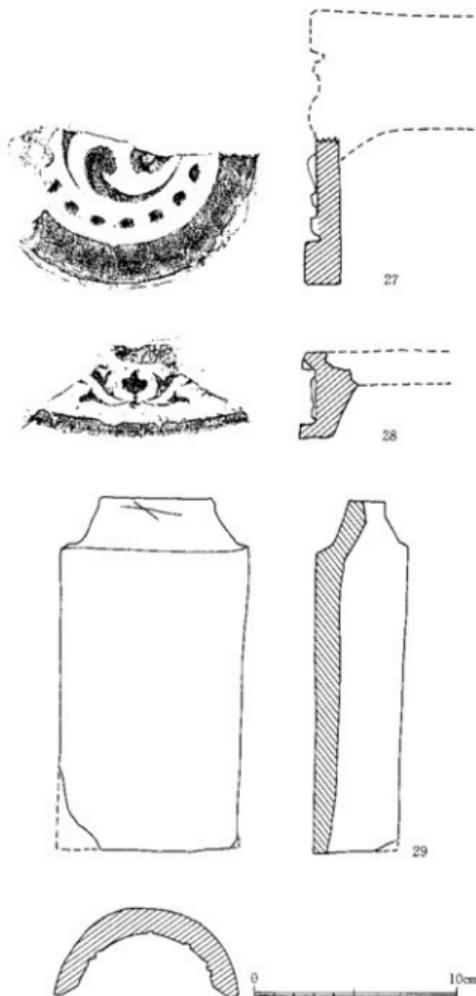
に施す。口縁部外面は強くヨコナデしやや外反する。端部は少し尖る。ヨコナデによってできた段から底部にかけて約1cmの幅の部分では、中心に向けて7分割した指ナデが見られる。色調は灰白色で胎土は精良である。口径9.5cm。24は、内面は密なヘラミガキを施し、外面は約半分位までやや簡素なヘラミガキを施す。胎土は精良で、仕上げはやや雑である。口径14.6cm、器高5.7cm、底径5.4cm。

・土師器羽釜

25は、口縁部が内弯した後大きく水平方向に近く折り返すもので、短かく水平に伸びた鈎とほぼ同じ長さである。内面はヘラ削り調整である。色調は、明茶灰色、二次焼成を受けた部分は黒色で煤が付着する。胎土は、金雲母とくさり礫と砂粒を多く含む。26は、口縁部が内面へわずかに内弯し、その外面に段があり、体部はほぼ直立気味に立ち、反り上がる鈎を付ける。外面は横方向のヘラ削りと内面にハケ目調整を行なう。色調は灰黄色、胎土は生駒西麓産のものである。

・瓦

瓦は石敷一及び遺物包含層中から整理箱1箱分出土した。巴文軒丸瓦と均整唐草文軒平瓦がある。丸瓦は玉縁のものが有り、凹面には布目痕があり、その中に細い棒状具を差し込んだ痕跡がある。製作工程の中で型から取り上げる時に便利ように使用したものではないかと考えられる。凸面は細くヘラ削りを施す。平瓦は細片が多く、タタキ痕は見られない。

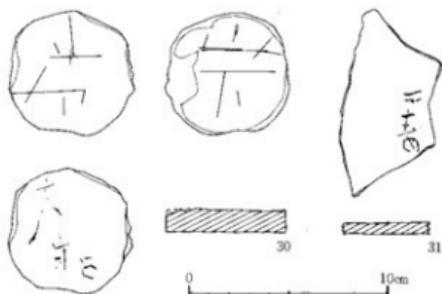


図一七 中世の瓦

## 大 泉 遺 跡

### ・墨書土器・瓦

墨書土器(31)は、土師器の平底土器内面底部中央に記されている。意味は不明。瓦には、平瓦を丸く削り取り一方をすり削った面と側面に記されている(30)。この墨書も判読が困難である。また、この瓦の両面には、ナイフ先によって「山下」と中央部に線刻している。文鎮又は練習用に使用したのかもしれない。



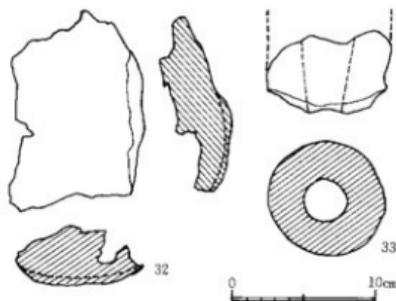
図一八 墨書土器・瓦

### ・青銅製品

楕円形の板状のもので、表面は梵鐘の撞座の部分の形状をしている。外区には複弁8葉の蓮華文が見られ、内区は外区よりわずかに突出し中央に5個の刺突痕がある。模様のある面の方にやや反りがある。長径8.2cm、短径5.7cm、厚さ0.8cmである。

### ・鉄滓・鞆羽口

鉄滓は、総重量2.1kg出土した。細かく壊れ、大きな破片で9×14cm、400gの楕形滓がある。表面は鮎状に黒光りするものが多く、断面は反対に気泡が非常に多い。炭の混入も顕著にみえる。底部は炉壁が付着している。炉底壁は青灰色に酸化されている。胎土は金雲母、砂粒を多く含む生駒西麓産の粘土を使用している。鞆羽口は、内外面円形で、先端は鮎状の金属が付着している。外径8.4cm、内径2.2～3.6cm。胎土は炉底壁と同じである。



図一九 鉄滓・羽口

## 奈良時代の遺物

### ・土師器

土師器は下層包含層から、杯、広口壺、小型手提高杯、高杯、甕等が出土した。各遺物とも金雲母を含む生駒西麓産の粘土を使用したものである。時期は、8世紀後半から9世紀前半のものであろう。

### ・須恵器

須恵器は、杯、壺、すり鉢等が出土した。時期的には土師器と同様の時期が与えられるものと考えられる。

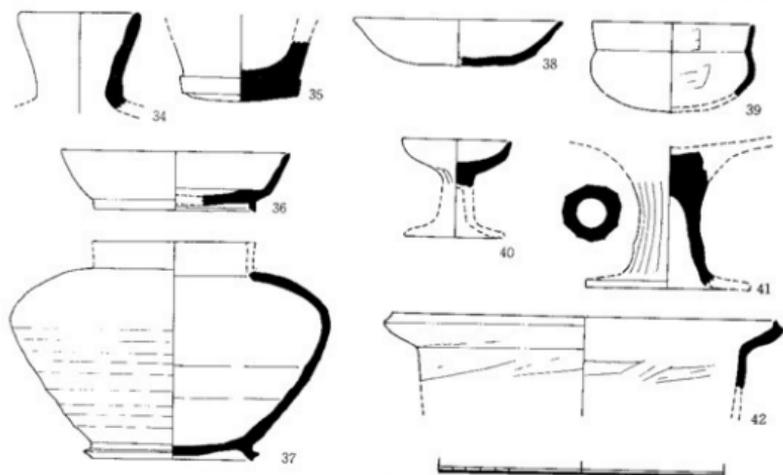


図-10 奈良時代の遺物

#### ・瓦

下層の遺物包含層から少量の瓦が出土した。軒丸瓦や軒平瓦はないが、丸瓦や平瓦が出土した。平瓦は、凸面に縄目叩きをし、凹面には布目痕が見られる。丸瓦は、縄目叩きをごく簡単にすり消している。胎土は、金雲母とくさり礫、白色砂粒を含む。仕上げは割合丁寧である。

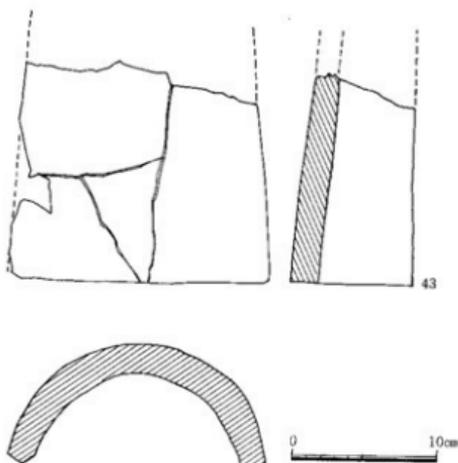


図-11 丸瓦

# 太平寺遺跡

## 84-1次、2次調査

- ・調査地区所在地 柏原市安堂町903-1
- ・調査担当者 桑野一幸
- ・調査期間 1984年4月11日～4月17日
- ・調査面積 34㎡ / 453㎡

ここでは届出のあった宅地造成および造成地北側における住宅建設に伴う発掘調査の概要を1、2次調査として報告する。

トレンチは調査対象地中央部から北にL字形のAトレンチ、南にBトレンチを設定した。これは造成工事により切土される部分を中心にしたためである(図-12 1)。

### (層序)

Bトレンチの層序を基本層序とする(図-12 2)。1層は表土、耕作土を一括した。2層は茶灰色砂質土層で固くしめる。3層は茶灰色土層、4層は明茶灰色土層、5層は黒灰色土層、6層は暗茶灰色土層、7層は暗灰色粘質土層。8層はAトレンチ土壇の堆積土で黄灰色土層。6層下部から7層掘削時に湧水があった。4～7層はBトレンチ北壁で観察すると南北方向で南にやや低く傾斜する。遺物包含層は2～6、8層。またAトレンチ4、5層では花崗岩の大きな自然石が相当量存在した。

### (遺構) (図-12 3)

Aトレンチで土壇、溝が検出された。土壇は不成枘円形を呈し、深さ40cm。3層堆積後に掘り込まれ、8層、2層を土壇内堆積土とする。須恵器、土師器等の細片が含まれていた。

溝は地山面から掘り込まれており、4層を溝内堆積土とする。東西方向に延びており、西に低く、後述する谷状地形の肩部に取り付いている。遺物量は多いがいずれも細片で、200点あまりの須恵器、土師器、円筒埴輪片、鉄滓等が出土した。

Aトレンチ南側は3段程の小さな平坦面をもちながら次第に南に低く傾斜する谷状の地形を呈している。Aトレンチの南方に8m離れて設定したBトレンチでは、約2.5m程掘削したが地山に達していないことからすると、かなり幅の広い谷状の地形が存在するものかもしれない。その南側の肩部は市道部分あたりだろうか。この谷状地形には3～6層の遺物包含層が、その下位に無遺物層の7層が堆積している。

### (遺物)

約1200点の遺物が出土している。いずれも細片のため図示しうるものはない。以下では各層



と遺物の関係を示す。

1層は耕作土であるが須恵器甕、土師器甕、高杯、羽釜、円筒埴輪片、鞆羽口等が出土した。

2層は須恵器蓋杯、甕、土師器杯、甕、羽釜、円筒埴輪、製塩土器片、平瓦、鉄滓等が出土した。

3層は須恵器蓋杯、甕、土師器高杯、甕、円筒埴輪片等が出土したが遺物量は少ない。

4層は遺物の出土量が一番多く約350点出土した。須恵器蓋杯、皿、甕、壺、土師器杯、甕、埴、羽釜、円筒埴輪片、平瓦（綾杉印き）、鉄滓等がみられる。須恵器杯は立ちあがりの極端に短かく内傾するものが多い。鉄滓の出土数量は全体の大半を占め、しかもAトレンチに集中して出土している。

5層も遺物の出土量は多く約300点が出土した。須恵器蓋杯、高杯、壺、甕、土師器杯、高杯、鉢、甕、埴、羽釜、移動式の籠、形象・円筒埴輪片、鞆羽口等が認められる。須恵器杯には立ちあがりの短かく内傾するもの（底部はヘラ切り未調整）、高台の付くもの、高杯には杯部下半に波線文が描かれるものなどがある。5層では埴輪片の出土数が多く、45点で全体の大半を占めしかもBトレンチに集中している。4層と5層とでは埴輪と鉄滓の出土数量、位置の在り方に大きな違いがある。

6層は遺物はわずかしか出土せず、土師器甕、円筒埴輪片がみられた。

埴輪は1点の蓋形埴輪を除き総て円筒埴輪で総数56点。色調は淡茶褐色を呈し、いずれも無黒斑で胎土には長石、石英粒が目立つ。調整工具痕の残る1点を除き焼成は不良。タガは低くかまぼこ状を呈す。ほとんど表面は磨耗しているが1点のみ外面5本/cmのタテハケ、内面ナデ調整がみられる。

鉄滓は径2～3cmの塊状のものと、平面形が長径10cm程の楕円形を呈する碗状のものとがある。総数52点で前者が多い。総重量は2490g。

今回の調査地は建物址や櫓列、古墓等を検出した太平寺・安堂遺跡83—4次調査地から西にわずか20m程離れた地点で、その関連遺構の存在が注意されたが、こうした遺構は検出されなかった。Aトレンチ南半からBトレンチにかけて見出された谷状地形は、7層以下の自然堆積によって徐々に埋没していったものと思われる。しかしその上の3～6層については、(遺物)の項でみたように特定の時期を設定しうるものではなく、それぞれ6世紀後半～8世紀の遺物を混在させるものであると考えられ、また、4、5層間の多量の花崗岩塊も人為的に投棄されたものともみることができることなどからして、人為的に土砂が運び込まれ、かなり短期間で埋没させられたのではないかとみられる。この谷状地形は本来は自然の谷であったと思われるが、斜面部に不自然な数段の平坦面が残されていることからみて、ある時期に谷内の造成が行なわれたものかもしれない。また北東方向から流入する溝が取りついていたことも考えると、83—4次調査地の諸遺構と何らかの関係をもつ可能性もあろう。

# あん どう 安堂遺跡

## 84-1 次調査

- ・調査地区所在地 柏原市安堂町697-1
- ・調査担当者 安村俊史
- ・調査期間 1984年8月30日～9月7日
- ・調査面積 43㎡ / 182.83㎡

安堂町に老人会館が建設されることになり、柏原市教育委員会が緊急事前発掘調査を実施することになった。当該地は『柏原市史』によると、塔心礎が出土した地点に当たり、河内六寺の一寺である家原寺の塔跡と堆定されている。近辺には、家屋の床下に礎石が残っていると伝えられる家もあり、古くから古瓦の出土を見る。また周辺では、7～8世紀の集落、中世の集落も発見されており、東方の生駒山地西斜面には、太平寺古墳群を含む平尾山古墳群が存在する。調査地周辺は、現在では住宅に囲まれ、寺院跡に関連するものは見当たらない。

発掘調査は、敷地内西方に南北方向のトレンチを設定し、着手した。伝塔心礎出土地点が、敷地南西端に位置するので、西方に塔基壇が遺存している可能性が考えられたためである。発掘調査の進行に伴い、調査地の土層は1m以上の盛土下にシルト、粘土等が層を成し、現在でも湧水がみられる非常に湿潤な地であることが判明してきた。層内には飛鳥時代後期から白鳳期にかけての屋瓦が多数含まれているが、伴出する土器は近世のものが中心であった。

また、トレンチ中央部で東西方向の石垣状遺構が検出されたため、トレンチの一部を東側へ延長した。

調査の結果、調査地に基壇、もしくは寺院に関連する遺構は存在しないと判定した。調査着手前は、基壇が検出された場合、保存のために設計変更を求める予定であったが、上記のような結果であったため、老人会館の建設を認めた。また、工事に際しても立ち会ったが、何ら寺院に関連する遺構は、検出されなかった。



図-13 調査地位置図

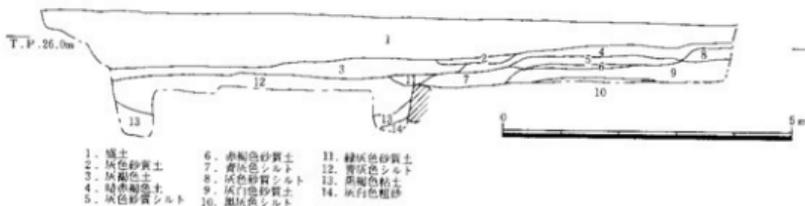


図-14 トレンチ西壁断面土層図

### 遺構

調査地の土層は、シルト層を中心に、粘土、砂質土が堆積しており、その状況から池状の地形を呈していたと判断される。トレンチ西壁土層は北半で右上がり、南端で左上がりとなり、南北方向の規模は調査対象地よりやや広く20m以上であったと推定される。東壁は、調査地北東隅での基礎工事に立ち会った際、同様の土層が続いていることを確認した。西側は不明であるが、調査地の西方約30mに、安堂池、もしくは亀池と伝えられる池が存在していたので、この池につながる可能性も考えられる。池底は確認できなかったが、ボーリング棒によって、掘削最深度より更に1m以上深いことを確認している。

この池は、ある時期に一部が埋められ、石で護岸をしている。この石列は、50~100cmの大きさの花崗岩を並べたものであり、一段のみである。南側に面を揃え、東西方向から東側で南へと弯曲する。石列は、やや縮まった黒灰色シルトをベースにするが、その後、再び池沼化したことが層位から知ることができる。石列検出部分の西端の花崗岩は、上面が円形に造り出さ

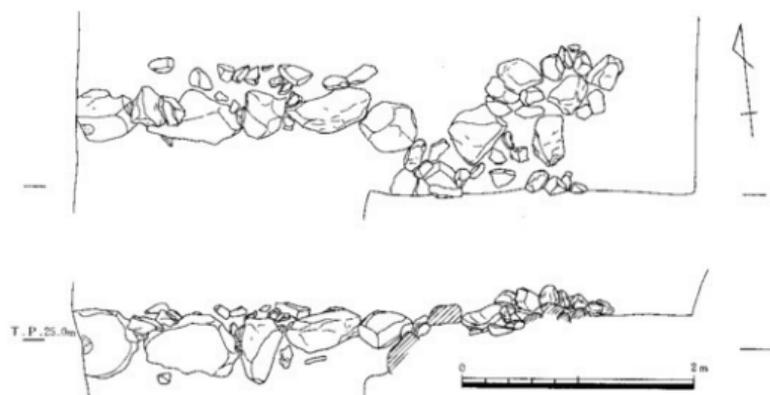


図-15 石列実測図

れた礎石を転用している。その東側の花崗岩も、非常に平滑な面を有し、他の石よりやや大きいため、礎石である可能性が考えられる。家原寺の塔に伴うものであろう。

石列が埋まり、再び池沼化した後、再度、埋め立て、整地が行われている。整地に際しては、多量の屋瓦、凝灰岩等が敷きつめられている。整地の時期は、染付け（図-23 9）などの出土により、近世後期と考えられる。

石列が築かれた時期は明確にできないが、石列のすぐ南側から終末頃と思える瓦器碗の小片が出土しており、15世紀頃に築かれたものではないかと推定される。

## 遺物

### ①屋瓦

#### a. 軒丸瓦

軒丸瓦は5種14点出土しているが、いずれも破片である。

I類は、単弁八弁蓮華文軒丸瓦。無子葉弁であり、弁中央は稜をなす。弁先端は、やや尖り気味になるが、全体的に、弁は大きく丸味をもつ。また、弁は厚く、弁中央での瓦当厚は、2.5cmを測る。中房は、直径3.5cm前後と推定されるが不明。外区は、幅0.6cm、高さ0.5cmであり、無文。外区外側は段をなしている。推定瓦当直径19.0cm。

(1)は、淡黄褐色を呈し、焼成良好。瓦当側面、裏面ナデ調整。1点のみ出土している。

II類も単弁八弁蓮華文軒丸瓦。無子葉弁で、弁は薄く、弁中央での瓦当厚は1.8cm前後である。弁先端は尖り、上方へややそり上がっている。中房は直径4.5cm。小さい蓮子は1+6+10+10に配られるが、明瞭に四重になるものではない。外区は無文であるが、(2)は幅1.3cmで、(1)と同様に、外区外側が段をなすものであり、(3)は幅1.4cmで、段をなさない。また、(2)の外区は、弁端より高いが、(3)の外区は弁端より低い。(2)と(3)は、中房蓮子の配列から、同范であることが確認できる。にもかかわらず、外区が異なることから内区と外区の范型が分離できるものであったことが想像される。他に1点ある内区の破片と、焼成、調整法等からII類に

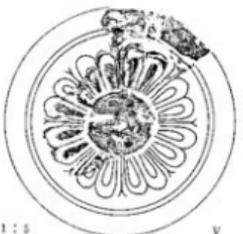
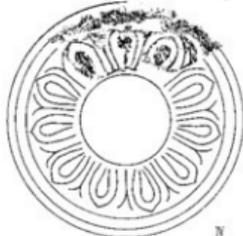
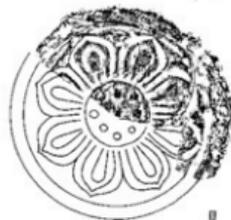
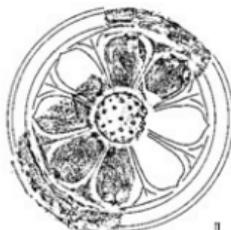
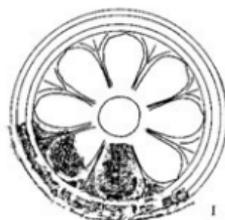
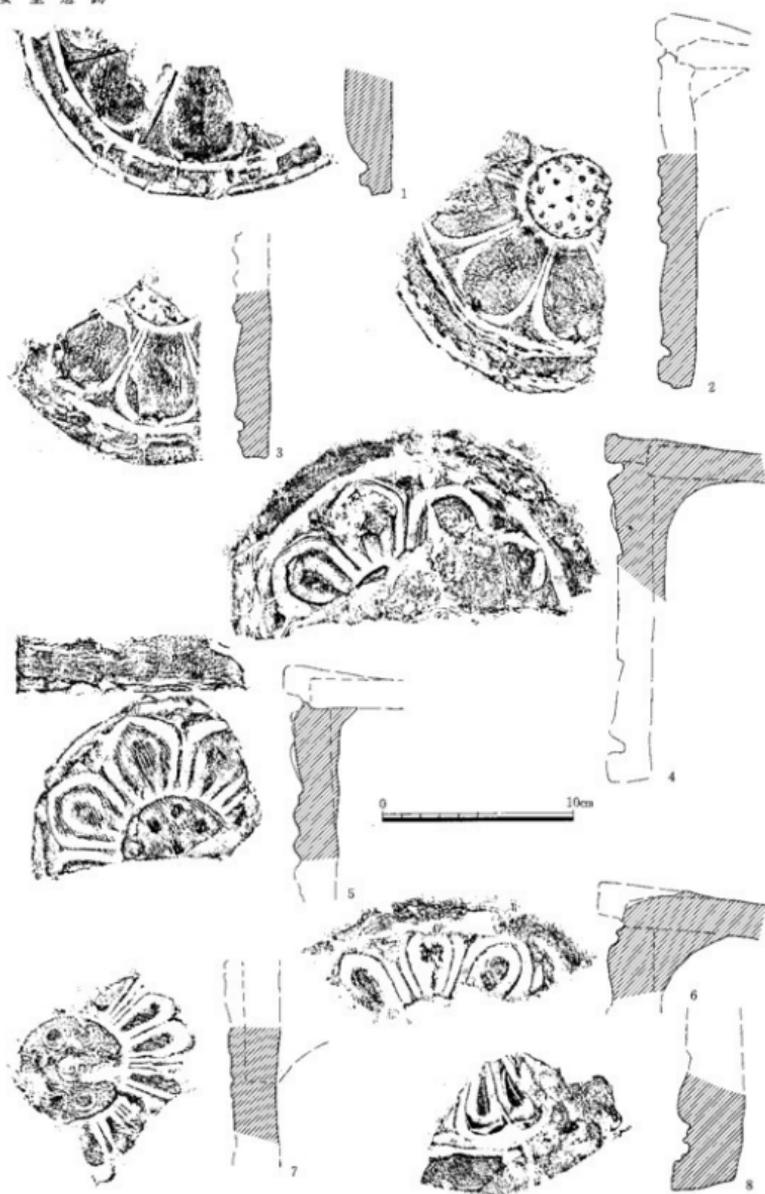


図-16 軒丸瓦分類図



图一七 軒丸瓦実測図・拓影

伴うと考えられる丸瓦部(9)も含めて検討すると、Ⅱ類の軒丸瓦は、内区と外区の境で粘土を接合し、接合部裏面を溝状に穿って丸瓦を挿入して製作したと判断される。接合部裏面の粘土の補充は、ごくわずかである。瓦当側面は、どちらもヘラケズリ後、ナデが施されている。しかしながら、段を有するものと、有しないものがあることは、製作当初から意識されていたものであろう。段を有するものは、Ⅰ類の製作者と関係があるとも考えられる。

瓦当直径は、(2)が19.8cm、(3)が外区の段の分だけ小さく19.0cmである。無子葉弁であるにもかかわらず、中房が大きく、中房に多数の蓮子が配されるⅡ類は、類例の乏しいものである。

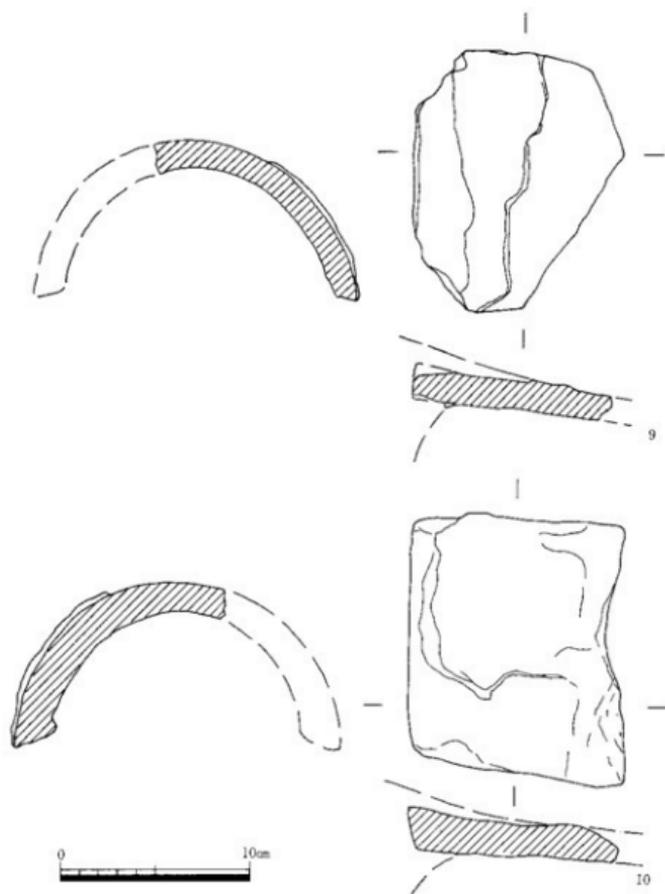
Ⅲ類も単弁八弁蓮華文軒丸瓦。単子葉弁であり、子葉は大きく、肉厚である。弁先端は剣状に尖り、弁中央での瓦当厚は2.1cm前後である。中房は、復元直径5.4cm、1+8の蓮子を配する。外区は無文であり、幅1.3cm、高さ1.8cm前後で、直立する。外区が、やや内側に肥厚する点特徴的である。やはり、Ⅱ類と同様に、内区と外区の范型が分離できるものであったと考えられる。丸瓦部との接合方法もⅡ類と同様であり、内区と外区は、その境で接合され、接合部裏面に丸瓦部が挿入される。その際に、丸瓦部を浅く挿入するもの(4)と、深く挿入するもの(5)がみられる。また、(5)には范型の木目の痕跡が明瞭に残っている。(5)は丸瓦部との接合部が剥離したものであり、上面には7本/cmの布目が残っている。他に、丸瓦部を少し残す瓦当片があり、その丸瓦凹面の布目も7本/cmで(5)に一致する。その小片も丸瓦部を深く挿入したものであり、(5)と共に、瓦当裏面の粘土の補充は少ない。しかし、(4)は粘土の補充が多く、丸瓦の布目は確認できない。丸瓦部挿入の深淺と、補充粘土の量は関連するものと考えられる。このように考えると、同じⅢ類でも製作手法によって、更に二分することができる。

瓦当直径は、18.6cm前後と復元される。色調は、淡灰色、ないし暗灰色を呈し、暗灰色のものは、いぶし焼きされていると思える。小片も含めると、6点出土しており、5種の中で、最も出土点数が多い。

Ⅳ類は、単弁十一弁蓮華文軒丸瓦である。(6)のみの出土であり、全体の約1/6しか残存していないが、弁開の角度が約33°であることから十一弁と復元される。弁は細弁で、先端で尖り、細い凸線で表現されるのみで、肉厚はない。しかし、子葉は大きく、丸味をおびている。細い間弁と共に、弁は子葉の輪郭線と意識されているようである。中房は不明であるが、直径7cm前後と推定され、かなり大きい。丸瓦部との接手法は、Ⅱ類、Ⅲ類(5)のように、丸瓦部を深く挿入する手法である。外区は剥離のため不明である。瓦当直径は20cm前後であろう。丸瓦部、および丸瓦部との接合による粘土補充部分は、ヘラケズリによって調整される。また、丸瓦部には、右まわりに巻きつけられた粘土板の継ぎ目が明瞭に残っている。灰色を呈し、他の軒丸瓦より、やや胎土が粗い。

V類は、複弁八弁蓮華文軒丸瓦。中房の直径は5.5cm、1+8の低い蓮子には圈線を伴う。外区は無文で、幅2cm前後と広く、直立する。外区内側は弱い段をなす。外区と内区の接合痕跡は認められないが、瓦当裏面に深い溝を穿って丸瓦部と接合する。色調、焼成等から丸瓦部(10)は、V類に伴うものではないかと推定される。淡灰色を呈するものと、淡灰褐色を呈するものがある。瓦当側面、裏面は、ヘラケズリ後、ナデによって調整する。瓦当の直径は21cm前後と復元される。

なお、軒丸瓦が14点出土しているにもかかわらず、軒平瓦は全く出土していない。



図一八 丸瓦部実測図

b. 平瓦

平瓦は、凸面の叩き目によって、9種類に分類できる。今回の調査では、平瓦は多数出土しているが、その中で、比較的良好な資料632点について、叩き目の分類、側面調整の有無を中心に観察した。

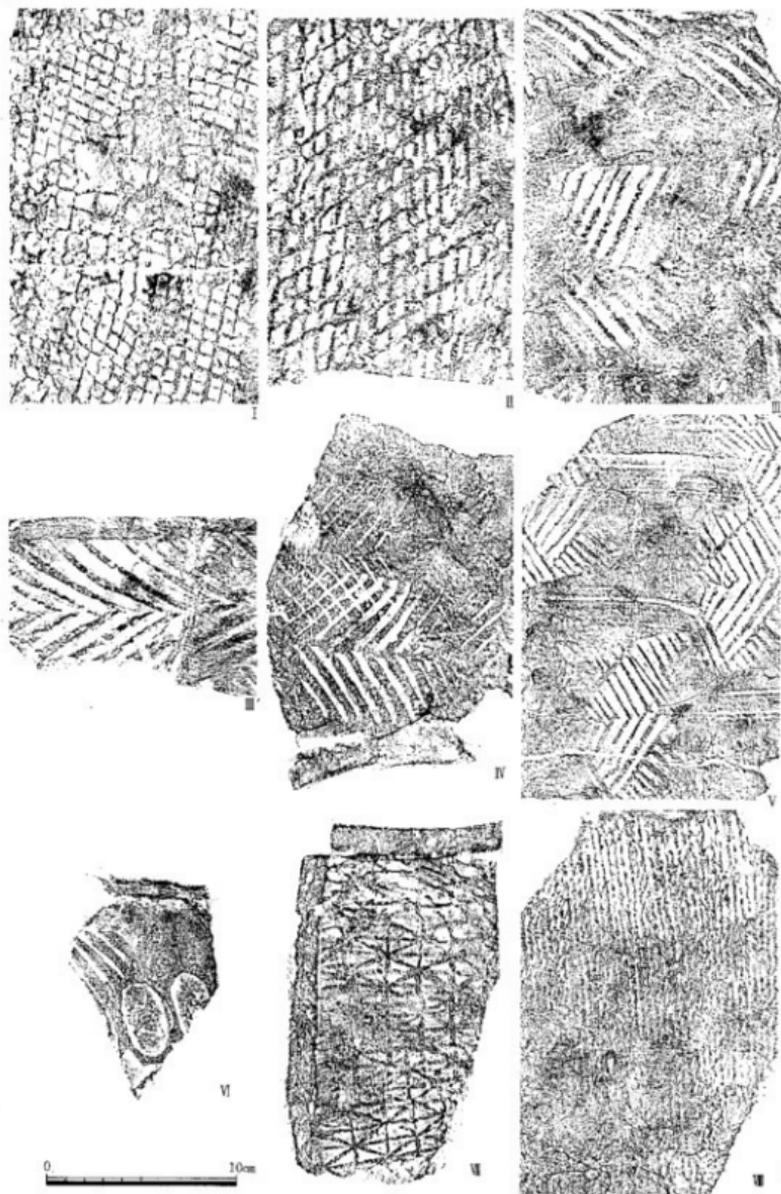
I類は格子叩きを施すもの。格子は、1辺0.7cm前後のもの、1.2cm前後のものがあり、1.2cm前後の格子叩きを施すものが多いが、拓影に示したように、両者を並用するものも見られるため、あえて区別はしていない。叩きは、平瓦側縁にほぼ直交するように施されるものが多いが、斜位に施されるもの、直交と斜位を並用するものもあり、規則性は認められない。叩きは全面に施され、原体の大きさは10cm×7cm程度と思われる。側面は未調整のものが13点あり、側面を残す資料の9.0%を占める。側面の調整法は、側面全体をヘラケズリするものと、分割破面のみをヘラケズリするもの、2回、3回とヘラケズリするものがある。その際に、側面の凹面側を斜めにヘラケズリする例もある。粘土板は、側面を斜めにカットしたものを、右まわりに巻きつけている例がある。総数320点で、50.6%と全体の約半数を占める。

II類は斜格子叩きを施すもの。やはり全面に施され、平瓦側面に直交するように施されるものと、斜位に施されるもの(11)がある。(11)は、長さ40.8cm、広端での幅30.2cmである。総数34点、5.4%。側面を残す資料20点には、すべてヘラケズリ調整が施されている。

III類は無軸綾杉の叩きを施すもの。凸面を丁寧にナデた後、スタンプ状の無軸綾杉叩きを施す。叩きの方向は、横位に施され、広端面近くで斜位になるものが多い。また、全体に斜位に施されるもの(12)もある。(12)は、長さ44.2cm、左まわりに巻きつけた粘土板の剥離痕が残る。III'類もIII類と同様であるが、綾杉のなす角度がIII類では110°であるのに対し、III'類では約60°である。叩き原体の大きさは、共に10×8cm程度である。総数226点、35.8%。その中で、III'類の占める比率は、5%程度である。側面未調整のもの6点、側面調整を施すもの120点あり、未調整のものは、4.8%である。I類とIII類で全体の90%近くを占めるが、側面未調整の比率が示すように、III類のほうが、概して調整は丁寧である。

IV類は有軸綾杉の叩きを施すもの。III類と同様に、凸面ナデ調整の後、スタンプ状に施される。手法的には、III類に含まれるものであるが、柏原市内の寺院では、無軸綾杉叩きのみ出土している寺院(片山庵寺など)と、有軸綾杉叩きのみ出土している寺院(五十村庵寺など)が知られており、両者の製作工人が異なっていたか、もしくは時期差を示していると考えられる。その点で、両者が伴出したことは、今後の検討課題である。出土点数は、III類よりはるかに少なく、13点、2.1%のみである。側面調整を施すもの6点、未調整のものは、みられない。胎土は、石英、長石を多く含み、III類と共通するが、灰色を呈し、III類よりも概して焼成良好、須恵質に近いものが多い。

V類は無軸綾杉の変形した叩きを施すもの。綾杉の一方は斜線を伴い、他方は枝部とほぼ直



図一19 平瓦叩き目分類図

交するように、支線が上下に見られる複雑な文様を構成する。このような左右非対称の叩き目は稀である。叩きは、凸面をヘラケズリからナデ調整の後、スタンプ状に横位に施される。叩き原体の大きさは9cm×7.5cm。総数は4点、0.6%のみであるが、いずれもクサリ礫を多く含み、淡赤褐色を呈する。側面調整を施すもの3点、未調整のものはみられない。

Ⅴ類は1点のみの出土であり、類として認識すべきものではないかもしれない。Ⅲ類と思われる叩きを伴い、2個の楕円形のくぼみがみられる。

Ⅵ類は、格子をなす長方形に、対角線が1本ずつ、交互にみられるものであり、イギリス国旗を思わせる。叩きは、側縁に直交し、全面に施される。総数9点、1.4%。側面未調整のものは出土していない。いずれも淡灰褐色を呈し、焼成は良好であるが、やや軟質である。

Ⅶ類は縄目叩きを有するもの。縄目は1cm当たり2.5～3本であり、縦方向に叩かれている。縄目のものには、約3cmの模骨痕を残し、明らかに桶巻作りと思えるものと、凹面が平滑で、側面も斜めに切り落とされている一枚作りと思えるものがあるが、判別困難なものが多い。また、凹面の布目も1cm当たり5本～6本と、細分することは困難である。出土総数も26点4.1%と少ないため、あえて細分していない。

I～Ⅶ類は、いずれも石英、長石を多く含むが、クサリ礫、雲母の多少によって、差異がみられる。Ⅴ類はクサリ礫を多く含み、Ⅲ類の一部とⅦ類は若干のクサリ礫と雲母を含む。他はクサリ礫、雲母をほとんど含まず、Ⅳ類では全く含まない。

また、叩きの方向、側面調整法、端面調整法、布目等によって、各類は更に細分可能である。しかし、製作遺跡に伴う資料でない限り、細分することに大きな意味を見出せない。それよりも、屋根に葺かれると見ることができない平瓦凸面に、種々の叩き目が見られることが重要である。平瓦凸面の叩きは、屋根に葺かれた際に摩擦を大きくする役目を果たすが、それだけならば、複雑な文様の叩きを施す必要はなかったはずである。叩き目の種類が豊富であるのは、柏原市域の特徴であり、以前にも、製作工人集団と関係があるのではないかと考えたことがある。(拙著「片山廃寺塔跡発掘調査概報」柏原市教育委員会・1983)今回は、観察総数の50.6%を占めるⅠ類と、35.8%を占めるⅢ類について、少し考察を加えてみる。

縄目瓦を除くI～Ⅶ類において、I・Ⅱ・Ⅵ類は、叩きが平瓦凸面全体に施される。それに対して、Ⅲ～Ⅴ類は、凸面をナデ調整した後、部分的にスタンプ状に施される。後者の場合、桶棹に巻きつけた粘土板に、部分的に叩きを施しただけで、粘土が縮まったとは思えない。叩き以前に、丁寧なヘラケズリやナデを施していることから推定すると、おそらく、何らかの叩きを全面に施し、粘土を締めした後、ヘラケズリ、ナデによってその叩き目を消し、再度、スタンプ状に叩きを施したのではないだろうか。243個体を観察した限りでは、そのような痕跡を明らかにすることはできなかった。しかし、Ⅳ類の拓影に示した個体は、有軸綾杉の叩きをナデ消した後、再び有軸綾杉の叩き目を施している。この資料は、製作手法の一端を示している

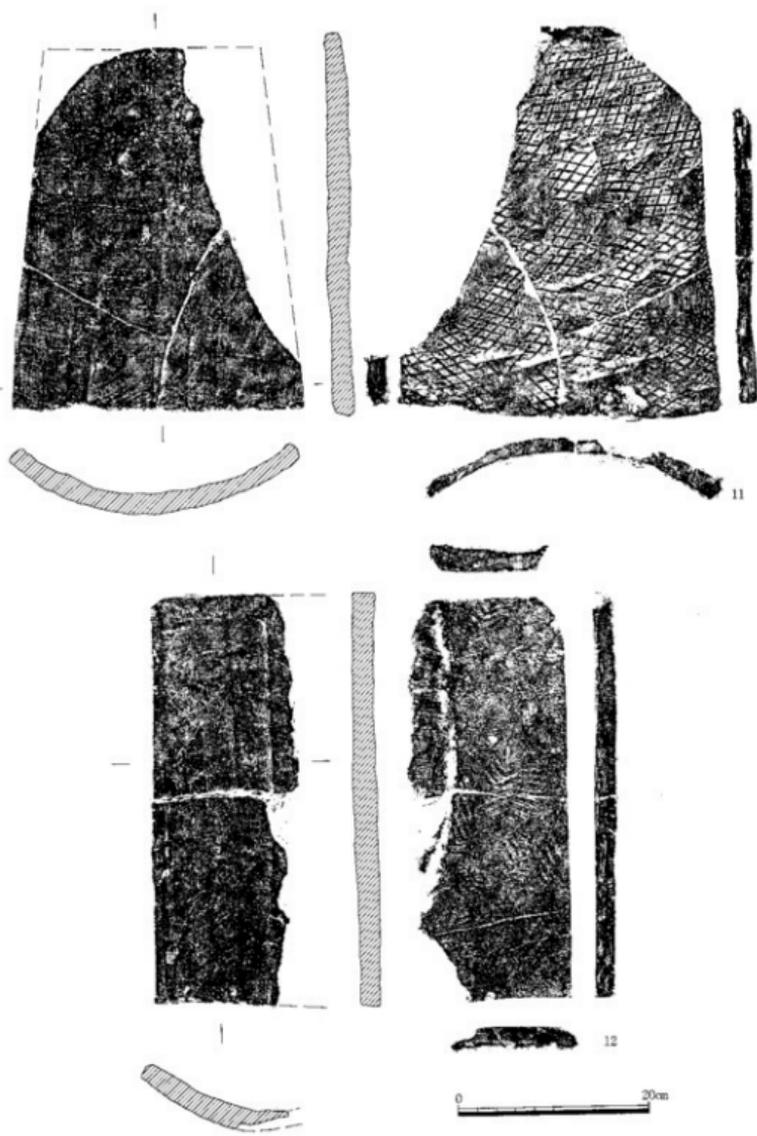


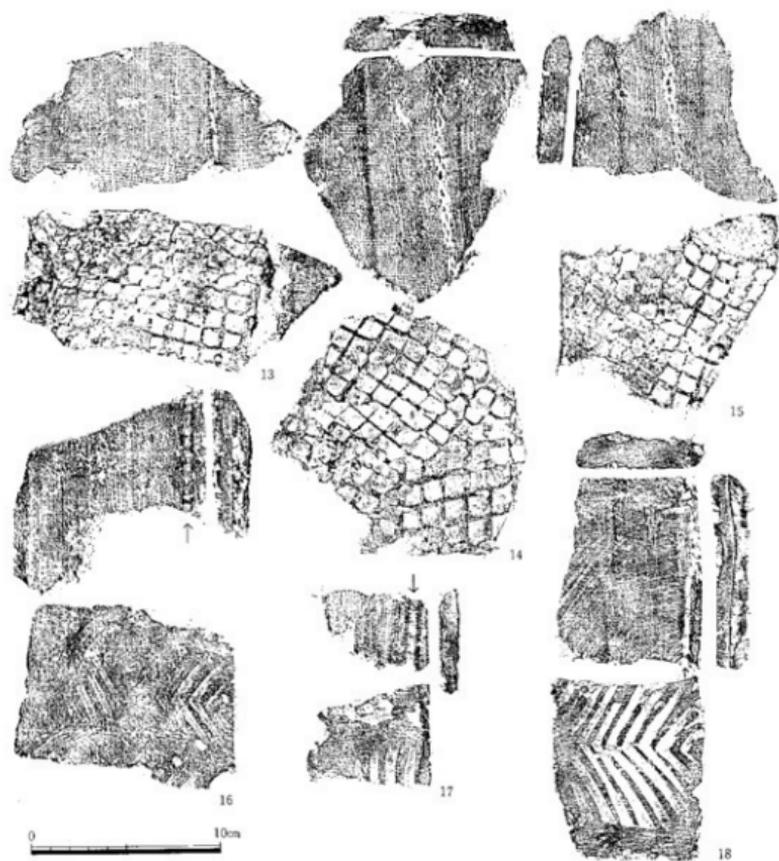
圖-20 平瓦実測圖・拓影

のではないだろうか。このように、叩きを全面に施す手法と、ナデ調整の後、スタンプ状に施す手法は、製作工程における大きな差とみなすことができる。つまり、平瓦製作工程において二系統の手法が存在したことを示している。そこで、前者をA系統、後者をB系統とする。

柏原市域においては、一枚作りの平瓦は、縄目叩きを有するものに限られる。バラエティーに富んでいた叩き目は、縄目に統一されていくのである。その中で、桶巻作りから一枚作りへ移行する頃に盛行したと見られる縄目叩きを鋸歯状に施す平瓦がある。(片山庵寺Ⅹ類) この平瓦は、市内ほぼ全域から出土するが、山下寺から出土した平瓦は、縦方向の縄目をナデ消した後、鋸歯状に叩いている。(1982年度調査) この平瓦は、一枚作りのものであり、その手法は、B系統のものと考えられる。同時期には、全面に縦方向の縄目叩きを施すのが一般的であるにもかかわらず、ナデ調整の後に鋸歯状に縄目叩きを施す手法がみられるのは、叩き目が縄目に統一された後も、B系統の手法に固執したために考案された手法であると推定される。

今回の調査資料では、Ⅰ類がA系統、Ⅲ類がB系統の代表例であり、これらの平瓦が、家原寺のどの堂塔に伴うものか不明であるが、その堂塔の創建に伴うものと考えられる。これらの資料の中には、分割界線を残すものがある。分割界線は燃紐痕跡と棒痕跡がみられ、前者は18点、後者は5点と少量であるが、燃紐痕跡はⅠ類に限られ、棒痕跡はⅢ類に限られる。なお、他の類で分割界線を残すものは見られない。(瀧本正志「平瓦桶巻作りにおける一考察」『考古学雑誌』等69巻第2号・1983)

燃紐痕跡について観察すると、幅は0.3cm前後であり、瀧本氏が呈示している燃紐は、すべて右燃りであるが、今回出土した18点は、すべて左燃りである。燃紐には、燃りの強いもの(21・22)と、燃りの弱いもの(13~15)がみられる。燃りの強いものには燃紐が弧を描いているもの(21・22)もある。いずれも端面まで燃紐痕跡は続いている。(14・22) この燃紐痕跡が、分割の際に指標となったであろうことは、(21) などから推定される。(21) は、側面に分割破面を残し、調整が施されていない。そのために、燃紐痕跡が残ったと考えられる。側面調整を施すものには、側面の凹面側も、同時にヘラケズリ、ナデを施す例が多く、燃紐痕跡が分割の際の指標であったならば、その痕跡を残す可能性は乏しいと考えられる。また、模骨痕が明瞭であるものは、やはり、模骨板の中央に、長軸に沿って燃紐痕跡が残る。(13) は、燃紐痕跡部分で、粘土板を接合している例である。なお、燃りの強いもの9点は、淡灰褐色を呈し、やや軟質であるが、燃りの弱いもの9点は、黄橙色を呈し、堅緻なものが多い。このような燃紐の差は、瓦製作の際の基本道具である桶杵が異なることを示していると考えられ、異なる桶杵を使用した場合、焼成が異なる、すなわち、焼成瓦葺が異なるか、焼成時期が異なることを示していると考えられる。もちろん、桶杵が2個しかなかったとは考えないが、同一技術に基づきながらも差を示す2種類の平瓦は、製作時期の差を示すのであろうか、それとも、工人集団内における更に小さな工人単位とでも呼ぶべき製作者達の差を示すのであろうか、検討課題である。



図一21 平瓦分割界線拓影

棒痕跡は、幅0.5cm、深さ0.2cm程度で、断面がU字形をなすもの(16)3点、幅0.6cm、深さ0.3cmで断面がV字形をなすもの(17)1点、幅0.3cm、深さ0.3cmの鋭い断面形を呈するもの、(18)1点がある。いずれも、側縁に平行し、痕跡に布目がみられるので、棒痕跡と判断できる。これらは、いずれも側縁近くに残されており、燃紐痕跡の場合よりも、一層、分割指標として意識されていたものと思われる。燃紐痕跡を残す資料がⅠ類の中で5.6%であるのに対して、棒痕跡を残す資料がⅢ類の中で1.8%と少ないことは、前述したように、Ⅰ類とⅢ類における、製作手法の丁寧さに結びつくものであろう。

以上のように、A系統のI類とB系統のII類は、異なった分割界線を使用していると推定され、叩き手法と共に考えると、製作技術がかなり異なることが判明した。また、A系統は平行線を中心とする文様構成をとるのに対し、B系統は綾杉を中心とする文様構成を示し、両者が意識的に使い分けられていたと考えることもできる。B系統の終末と考えた、縄目叩きを鋸歯状に施す片山廃寺X類の平瓦も、綾杉文を意識して鋸歯状に叩いたかと相像される。

叩き手法としては、A系統のほうが古いと考えられるが、柏原市域での新古関係は不明であり、おそらく、柏原市域で活発に寺院が建立される飛鳥時代後期頃には、既に両系統が存在していたのではないだろうか。その後、縄目叩きが採用され、一枚作り技法が取り入れられるまで、両系統は並存する。おそらく、この二系統は、二つの工人集団が存在していたことを示すものであろう。もちろん、平瓦製作場所が二箇所あったとは限らない。平瓦製作技術を共有し、伝習する工人集団、もしくは工人集団のグループが、大きく二系統に大別されていたということである。柏原市域の寺院では、両系統の平瓦が、すべての寺院で共存しており、一方の系統と寺院との深い結びつきは認められない。

しかし、遺物としての平瓦の性格から、現在の資料では、両系統が共存すると断言することは困難であり、A系統からB系統へ変化した可能性も残っており、今後、検証を重ねていきたい。

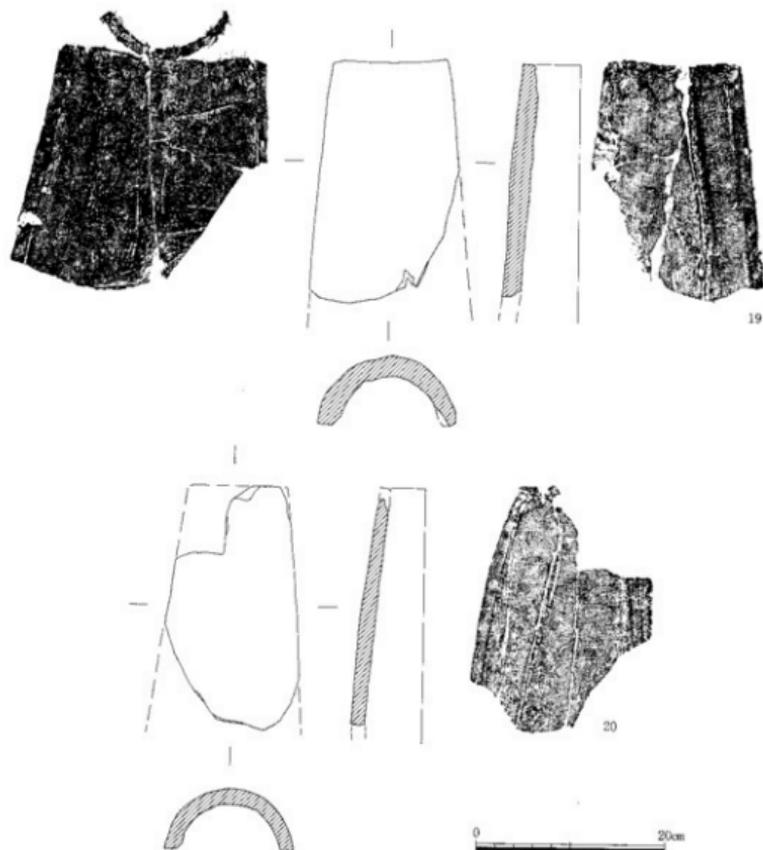
#### c. 丸瓦

丸瓦は行基式のものが大部分を占め、玉縁のつくものも少量見られる。丸瓦は、凸面のナデ調整が丁寧であるため、叩き目を残すものが少ない。そのため、叩き目によって分類することは不可能であり、平瓦のように、破片を資料とすることはできない。(19)は、縦方向の縄目叩きをわずかに残す資料であるが、叩き目の痕跡を残す丸瓦十数点の叩き目は、すべて縄目に限られる。これは、縄目叩きが採用された頃、丸瓦凸面のナデ調整が粗雑になったためか、平瓦と異なり、丸瓦では縄目叩きが古くから採用されていたためか不明である。(19)の縄目叩き原体は、縦に長いものを使用しており、幅3cm前後で、凸面を8回以上叩いていたと観察される。丸瓦の場合、凸面の弯曲が強いため、平瓦で見たような10cm四方程度の原体で叩くより、縦に長い原体で叩いた方が、効果的であり、仕上がりの曲線もなめらかになったであろうと想像される。そのため、丸瓦においては、縄目叩きが古くから採用されていたとも考えられるのである。

また、(19・20)は、共に凹面に布の重ね目部分が見られる。重ね目では、枠形に巻きつけられた布の外側端部が幅0.8~1cm、深さ0.2~0.3cmの溝状をなす。この溝は、(19)のように曲線となることもあり、布の端部を数回折重ねたために生じたものと推定される。

丸瓦は、残存状態が悪く、その全長を知り得るものは全くみられない。そのため、平瓦との関係等を考察することはできなかった。

(安村)

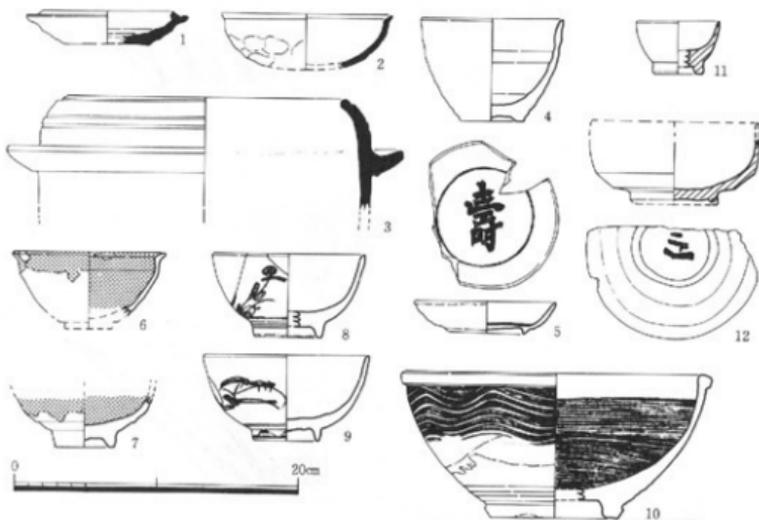


図一22 丸瓦実測図

②土器

(1)は須恵器の杯身。たちあがりは低く内傾し、受部端上面よりわずかに上方にみられる。外面底部回転ヘラ切り未調整。全体的に器壁が厚く、復元口径は9.2cm。(2)は土師器の杯。口縁部は外反し、外面に軽いユビオサエをとどめる。外面口縁より内面にかけてヨコナデする。(1)と(2)は共に7世紀前半に含まれるものである。また小片の為に図化しえなかったが、弥生中期の壺の口縁部1点、15世紀代の終末期に含まれると思われる瓦器碗の破片が2点出土している。(3)～(15)は、近世の遺物である。(3)は瓦質の羽釜。口縁部は内弯し、端部は丸く収める。外面に浅い三条の沈線をめぐらし、肩部に上向きにのびる鐫を貼り付ける。内面

ヨコナデ。(4)は碗。淡褐色の素地に、乳灰褐色の釉を施す。高台内にトキンがみられる。復元口径10cm、器高7.2cm。(5)は皿。内面見込みに「壽」の文字をもつ。文字は外縁を濃い藍色の呉須でわくどりし、内側を淡い藍色の呉須でうめている。体外面内外面共に無地。全体に施釉がみられるが、外面口縁部に釉がたれた状態になっている。高台に離れ砂が付着している。緻密な素地に青味をおびた半透質の釉を施している。復元口径10cm、器高2.2cmを測る。中国製か？(6)は天目茶碗。口縁端部は強く外反する。内面全体、外面は口縁付近のみの施釉である。外面施釉以外の部分は化粧がけを施す。釉は暗茶褐色、胎土は灰褐色で砂粒をあまり含まず緻密である。(7)は碗の高台付近のみの残存。削り出し高台。高台内にトキンを持つ。露胎部分に鉄サビを塗っていると思われる。暗灰緑色の釉。唐津焼。(8)は染付碗。外面に淡い藍色の呉須で草花を描いている。内面見込みに輪トチ痕有り。高台畳付は赤色を呈する。復元口径10.6cm、器高5.8cm。(9)も染付碗。「くらわんか茶碗」とよばれるものである。内面見込みに輪トチ痕有り。高台畳付露胎。青味をおびた釉に、ごく淡い藍色の染付がみられる。復元口径11.7cm、器高5.9cmを測る。(10)は鉢。刷毛目唐津。暗茶褐色を呈し、外面体部上半より口縁にかけて大きな刷毛が認められる。高台付近にケズリの痕を残す。外面体部の一部、高台内を除いて全面施釉。復元口径21.7cm、器高10.3cmを測る。(11)と(12)はいずれも木製品。(11)は木地のままである。口縁端部非常に薄く、高台にむかって厚くなる。猪口か？復元口径6.7cm、器高4.7cm。(12)は全面に暗赤色のうるしを塗った椀。うるしは薄く塗られている。高台

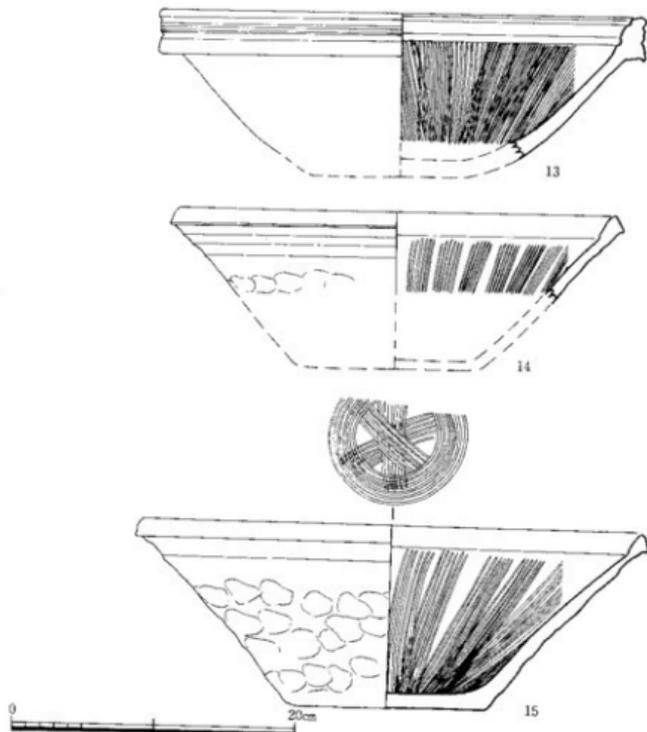


図—23 土器実測図

内に墨書がみられる。「三」か？高台脇を強く削っており、体部はまっすぐ立ち上がり気味になり、もう少しで口縁部に至るものと思われる。(13)～(15)は播鉢。(13)は、拡張した口縁部をもち三条の凹線をめぐらせている。内面にも段をもつ。一束9本の卸目を連続的にすき間なくつける。暗赤褐色を呈し、1mm内外の砂粒を含む。非常に堅緻な焼き上がりである。復元口径34cm。(14)と(15)は同じ形態を呈するもの。底部より口縁にかけて扇形に開く体部をもつ。内面は口縁部との境に括れをつける。口縁部は縁端を斜めに切っている。卸目は、(14)も(15)も同じく一束6本であるが、(15)の方が一単位の幅が広い。内面全体に放射状に卸目を施す。

(15)は見込みにも卸目をつけている。(14)も(15)も外面体部に、成形の際のエビオサエを明瞭に残す。いずれも茶色をおびた明赤褐色を呈し、胎土はやや粗く白色砂粒を多く含む。復元口径(14)は30.6cm、(15)は35.6cm、器高は(15)で12.9cmを測る。(14)、(15)は、共に信楽焼か？

(松田)



図—24 播鉢実測図

## ③凝灰岩

凝灰岩は、破片ばかり10点以上出土しているが、加工面を残すものは、図に示した1点のみである。

図の凝灰岩は、平面長方形を呈すると考えられ、現存長は、長辺が24.8cm、短辺が17.4cm、高さが13cmである。底面は加工され平滑面をなし、長側面は、底面から6cm垂直に立ち上がり、その部分から約45°の傾斜面をなす。短側面は、底面から6.2cm以上まで垂直に立ち上がる。おそらく、短側

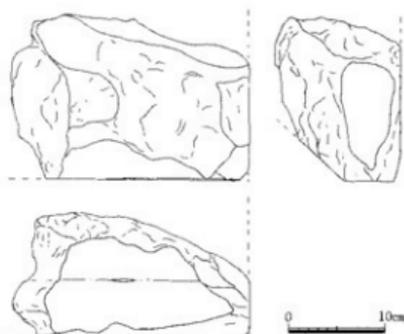


図-25 凝灰岩実測図

面は、傾斜面をなさない。このように、長側面のみ垂直面から傾斜面をなし、短側面が垂直面をなし、凝灰岩製であることを考えると、凝灰岩壇上積基壇の地覆石と推定される。傾斜面は、高さ15cm前後で、水平面に移行するものと推定される。

凝灰岩は、すべて同質であり、奥田尚氏の鑑定によると二上山牡丹洞付近で採石されたものである。

## ④礎石

石列の最も西側に存した礎石は、老人会館建物の基礎下に埋もれてしまうため、取り上げることにした。石材は、生駒山地で普遍的に見られる花崗岩製であり、長径94cm、短径72cmの楕円形状を呈する。礎石の一部は、打ち欠かれている。この打ち欠かれた部分が石列の上面となっており、石列に転用された際に、石列上面のレベルを揃えるために打ち欠かれたと考えられる。

礎石は、直径約60cm、高さ3cmの円形の造り出し部分が見られ、表面は非常に丁寧に仕上げられている。そして、中央よりやや一方に寄って、直径20cm程度の不整形の打ち欠きが見られる。この打ち欠きは、柱を据えるためのものかと想像されるが、深さは3cm程度であり、打ち欠いたままで磨かれていない。また、中央に位置しない点も不自然である。おそらく、石工によって切り出され、整形さ

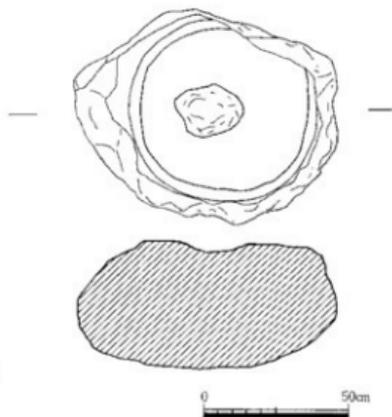


図-26 礎石実測図

れた時点では、この円形の打ち欠きは存しなかったであろう。柱を据える際に、その安定を計るため急いで掘られたものか、もしくは後世、石列として使用される以前に、何らかの目的で転用された際に掘られたものであろう。

### まとめ

今回の調査地は、家原寺の塔跡と推定されていた地であるが、調査の結果、近世後期に埋められた池跡であることが判明した。池の築造がいつ頃まで遡るものなのか不明であるが、この地に塔が存在したとは考え難い。塔跡と推定する根拠は、大正年間に塔心礎が出土したことである。おそらく、その塔心礎は、今回の調査で検出した石列に伴うか、あるいは、この石列に平行して南側に存したものかもしれない石列に伴うものと推定される。つまり、後世に移動されたものである。

しかし、塔心礎を始めとする礎石や凝灰岩が大きく移動しているとは考え難く、調査地の近辺に家原寺の伽藍が存在したことは間違いないであろう。今回の調査では、トレンチ北半から集中して屋瓦や凝灰岩が出土しており、南半での出土量は少ない。この点を重視すると、おそらく、調査地の北側に家原寺の堂塔の一つが存在したと考えられる。そして、塔心礎の出土から、その建物が塔であった可能性が強いと推定される。残念ながら、調査地の北側・東側は、数年前に造成され、1m以上の擁壁が築かれており、今後、調査されることはないであろう。しかも、地覆石と思える凝灰岩が出土していることなどを考えると、基壇もかなり削平されていることであろう。

出土した軒丸瓦は、大部分が初見のものであり、その時期は、飛鳥時代後期から白鳳時代中期頃にかけてのものとして推定される。しかし、軒平瓦は出土していない。柏原市域の寺院では、飛鳥・白鳳期の軒平瓦が、軒丸瓦に比べて非常に少なく、軒平瓦を伴うことが少なかったのではないかと想像される。

寺院に伴うと推定される土器は、須恵器杯身(1)と、土師器杯(2)があり、7世紀第二四半紀頃と考えられる。他にも、同時期の土器が数点あるが、それ以後は、中世末まで遺物を見ない。遺構に伴うものではないが、これらの土器が、建物の建立時期を示していると推定される。

また、平瓦を検討することによって、屋瓦製作工人集団の実像に、一歩近づくことができたと考えている。柏原市域の古代寺院は、約16箇所と推定され、それらを建立した勢力を把握するうえでも、屋瓦の生産体制を明らかにしていく必要があると考える。

(安村)

ひら お やま  
平尾山古墳群

## 84-1 次調査

- ・調査地区所在地 柏原市大泉4丁目641-1
- ・調査担当者 安村俊史
- ・調査期間 10月23日～10月26日
- ・調査面積 58㎡ / 320.56㎡

調査地は、柏原市大泉から信貴山へと通じる通称関電道路の入口部に当たり、生駒山地西裾のぶどう畑である。今回の調査は、小規模な宅地造成に伴うものであり、重機等は造業者の提供を受け、作業員等の人件費は国庫補助金を使用した。

所在地は、『柏原市埋蔵文化財地図』(1984)によると、平尾山古墳群内に当たるが、今回の調査では、古墳、もしくは古墳に関連する遺構・遺物は全く発見されておらず、大泉南遺跡の一部として把握すべき地である。

包含層は、耕土・床土下で灰褐色粘質土と淡褐色粘質土が確認され、中世の土師器小皿・瓦器碗の小片を含むが、大部分は7～8世紀の土師器・須恵器である。遺構は、地山上面で柱穴18、溝1が確認された。地山は、花崗岩の風化した淡黄褐色砂質土であり、縞状に黄褐色ないし赤褐色のシルト質の土がみられる。地山は、北東部で最も高くTP36.6m、南西部で最も低くTP35.6mである。

柱穴は、掘立柱建物に伴うものと考えられるが、調査範囲が狭小であり、地山の削平も著しいため、建物規模を復元することはできなかった。柱穴は、直径20～40cmの円形のもの、1辺50～100cmの方形のものがみられる。また、南西隅の柱穴は、1辺120cmの方形であり、深さは80cmを残す。他の柱穴に比して非常に大きいのが、底面の形状から柱穴と推定される。

溝は、幅40～70cm、深さ20cmであり、遺物は出土していない。おそらく、かなり削平されているのであろう。溝から北側に柱穴がほとんどみられないことから、住居地を画する



図-27 調査地位置図

溝であったと考えられる。

柱穴からは、ほとんど遺物が出土していないが、包含層内の遺物を参考にとすると、柱穴の時期は7世紀前葉から8世紀中葉頃と考えられる。良好な遺物は少ないが、須恵器の杯身に立ち上がり有するものはなく、杯蓋内面のかえりが口縁端部より下方にのびるものが最も古い時期を示し、実測図に示した須恵器が最も新しい時期を示している。掘立柱建物、柱穴の重複関係から3時期以上あったと推定される。

遺物は、土師器・須恵器が大部分であるが、良好なものは少ない。(1~3)は、須恵器杯蓋。扁平なつまみを有し、器高2.8cm前後である。口縁端部は、やや肥厚し、下方へ屈曲する。外面上半回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。(4)は壺の底部。薄い高台は、八の字形に広がる。

(5)は、甕の口縁部。口径27.2cm。端部は肥厚し、上面は平坦面をなす。外面は板状工具によるナデ上げ。内面は、ナデ、指頭押圧による調整。

大泉遺跡から太平寺・安堂遺跡にかけて、生駒山地西裾部の斜面に、かなり多くの7世紀前後の集落が広がっていたことが確認されつつある。沖積地に展開する7世紀以前の集落と対照的であり、古代寺院の創建に関連する事象であると考えられる。

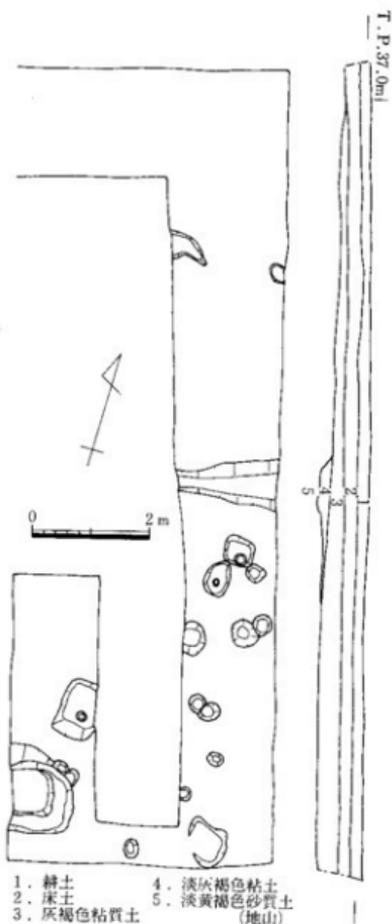


図-28 調査地遺構図

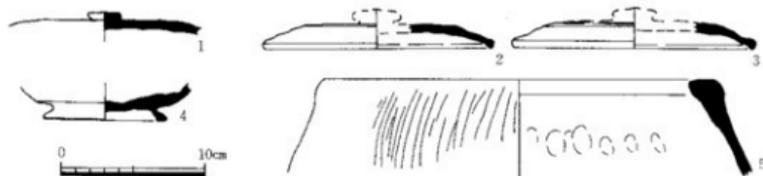
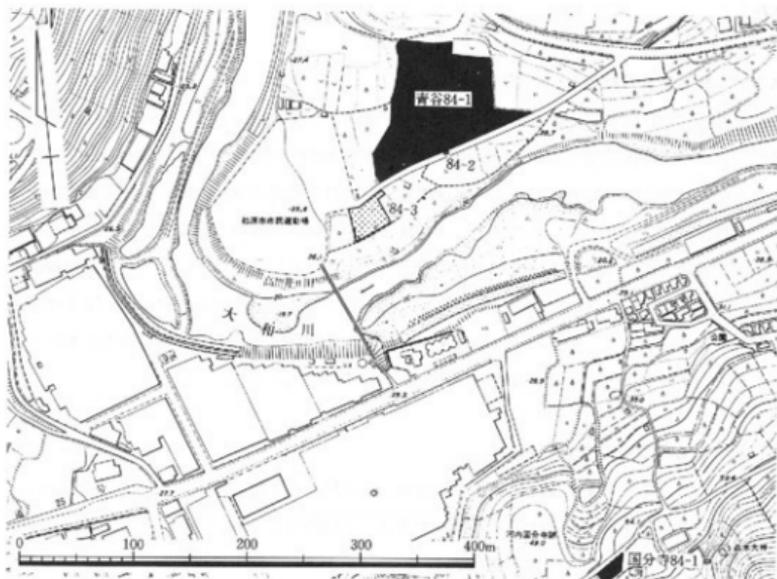


図-29 土器実測図

あお 谷 たに  
青 谷 廃 寺

図一30 青谷廃寺調査地位位置図（河内国分寺跡調査地を含む）

## 84-1 次調査

- ・調査地区所在地 柏原市大字青谷162番地他
- ・調査担当者 竹下 賢・桑野一幸・田中久雄
- ・調査期間 1984年4月25日～11月9日
- ・調査面積 1500㎡ / 8000㎡

## 第1節 発掘調査に到る経過

当該地は、古くから奈良時代の瓦や埴が散布することから古代寺院と推定されていたが、発掘調査はおこなわれたことがなく遺構の存在については、何ら知られていなかった。

今回、土地所有者から、ゴルフ練習場建設に伴い文化財保護法に基づく届出があり1984年4月25日～5月5日の間、本市桑野一幸を担当とし事前調査を行なった。その結果、現地表面下、50～70cmで建物の雨落溝や石敷の渡り廊下と推定される遺構を検出した。溝の側壁には埴を使

用し、底石には、凝灰岩の切石が敷かれていた。また溝内には、多量の奈良時代の瓦が堆積していることが確認された。本市教育委員会では、この貴重な遺跡の保存について、土地所有者と協議を行ない遺跡の保存を前提として、遺跡の性格及び広がりを確認するために発掘調査を実施した。

## 第2節 発掘調査の概要

発掘調査は、1984年6月21日～9月7日の間、本市竹下賢を担当とし、1984年9月10日～11月9日の間、奈良国立文化財研究所山中敏史・山本忠尚両氏の指導のもとに、本市田中久雄を担当して実施した。調査は、全て人力掘削により、特に遺構の検出、掘り下げは慎重に行なった。地区割設定（図-31）は建物1の西南隅に基点を置き、建物1南北主軸線を基準線とし、3m方眼を組んだ。遺構の実測及び遺物の取上げは全てこれに基づいて行なった。基準線は、磁北より北で東に約6°ふれており、ほぼ真北に近いものである。今回の調査では、国土座標との関係を出すに至っていないので、今後関係を出し次第報告する。また、当調査の基本レベルは、T.P.28.5mであり、本報告掲載区中のレベルはすべてこれに統一している。

## 第3節 調査地周辺の環境（図-30）

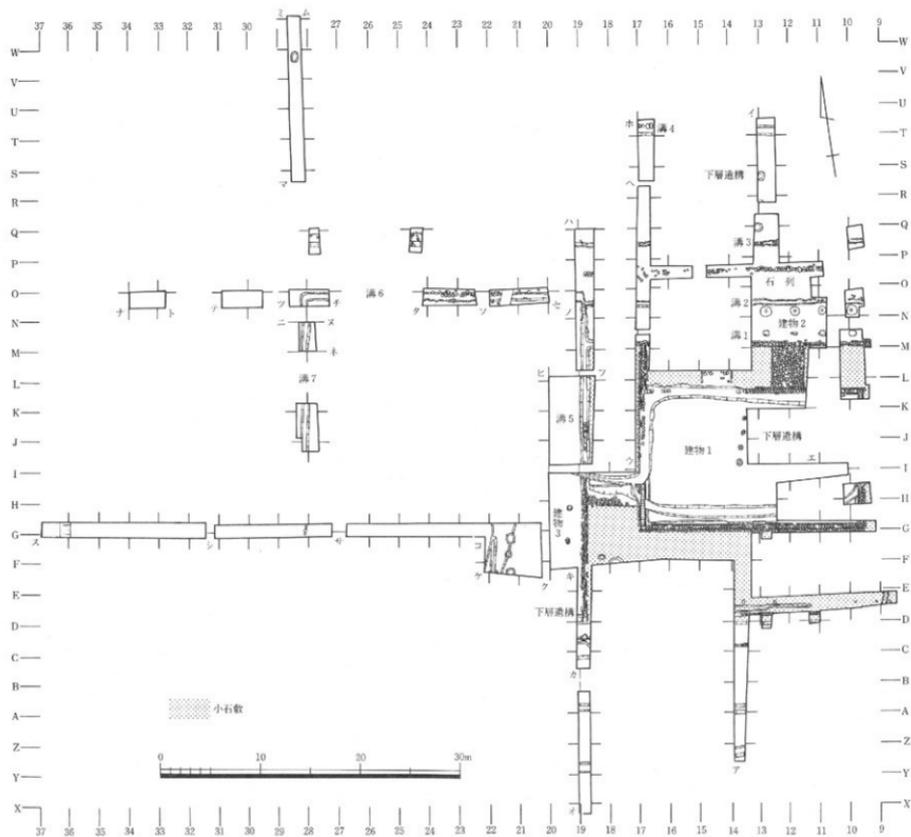
当調査地は、生駒山系の南端、大和川に舌状に張り出した下位段丘上に立地し、南北100m、東西100mほどの平坦地を有する。調査地北方は、中位段丘となり、約12mの高低差を有する南北に走る崖で限られている。当調査地は、以前は水田として利用されており、水田を区画するための石垣や盲暗渠等が、東西・南北に走っており、北と西には、約1mほど高い水田が存在している。この水田の区画は、調査の結果、地下の遺構と一致する部分も見られた。

調査地北方の中位段丘面は同じように広い平坦面をもつ。ここからも瓦が採集されることからみて、この中位段丘上にも遺跡の範囲が広がる可能性がある。調査地南方には、大和川をさき対岸に河内国分寺が位置している。

調査地の面する大和川は、古来より河内国と大和国をつなぐ重要な交通路として活用されてきたことはいうまでもない。また、龍田道もこの付近を通過していたと考えられる。

## 第4節 層序（図-31、32）

当調査地の基本層序は、水田として利用されていた関係から、ほぼ耕土・床土・茶褐色土・遺構面となっている。水田による削平は、部分的には、遺構を破壊していたが、大部分は遺構上面でとどまり、遺構の遺存状況は良好であった。遺物は、雨落溝内から出土するものが多いが、遺構面上層にも含まれている。主要建物北辺には凝灰岩のぬき取り溝が存在し、この溝底には粘土が堆積していた。これは水田関係の溝と解し、本報告では取り上げないことにする。



图一三1 調査区全体平面図

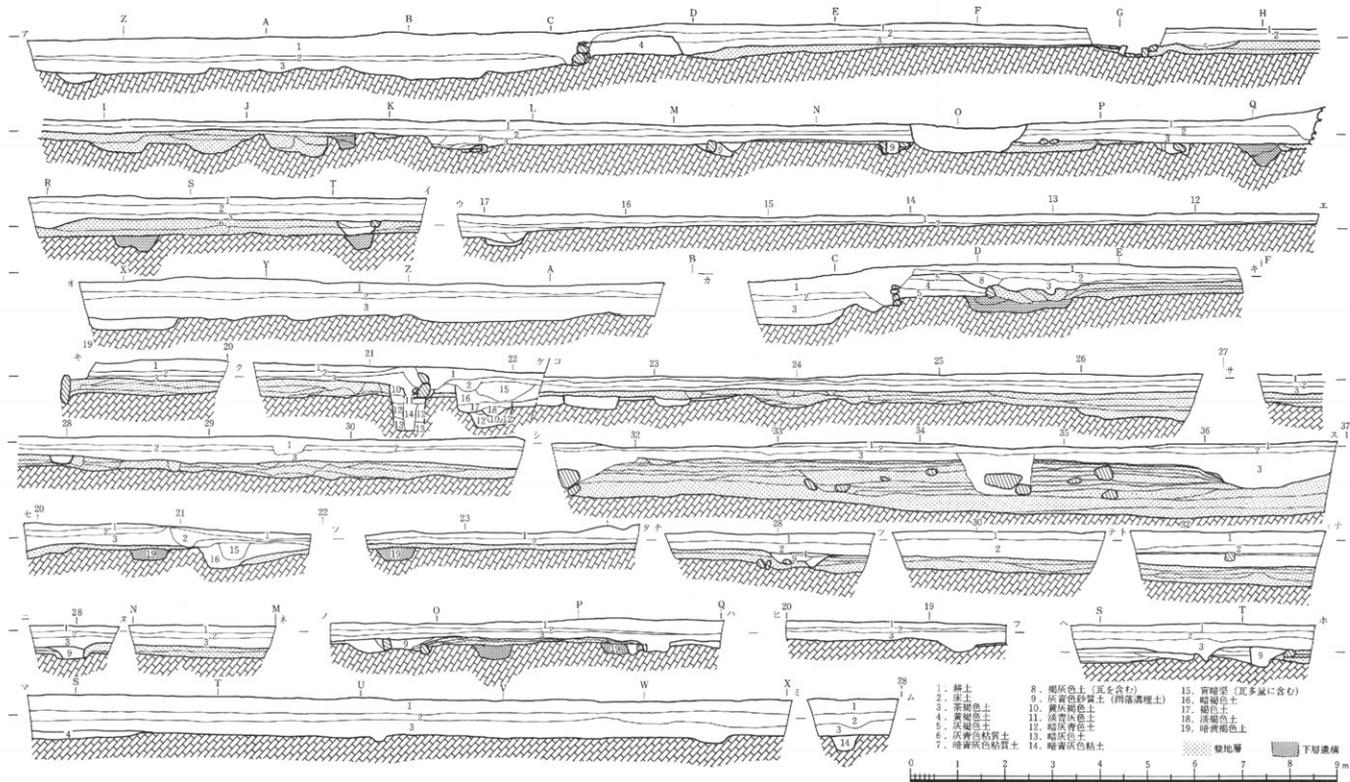


图-32 調査区土層断面图 (位置は图-31参照)

主要建物周辺の遺構は基本ベースを地山面に置いているが、調査地西半では除々に地山が下がっているために大規模な整地がおこなわれている。この整地層の基本層序は、上層から約3cm厚の黄褐色土、10cm厚の暗灰褐色土、その下約30～90cmの灰褐色土や暗褐色土の互層となり地山に到る。この整地層内からは、瓦が出土せず、8世紀初頭に限定できる土器が出土することから、当遺跡の存続年代を知る一つの手がかりとなる。

## 第5節 遺構

調査の結果、先に述べた大規模な整地後に構築された遺構として建物3棟・渡り廊下3本・石列1・溝7条を検出した。またこの下層遺構として、ピット列・溝等を検出している。

### ・建物1 (図-33、34、図版-12)

雨落溝の側壁に埴を使用する建物で、埴外側で南北14m、東西22.5mを測り、埴内側地覆石外周で南北12.9m、東西20.9mを測る。長軸線を東西に持つ建物である。建物内部は削平を受けており高さは不明であるが、地覆石の存在から推定すると1m前後の切石積基壇を有していたと考えられる。基壇は掘込み事業等は一切なく、地山面を基底面としてその上に土を積んでいく方法を取っている。基壇内には、下層遺構のピット列(図版-15の1)以外に、建物の柱と考えられる痕跡がないことから、当建物が礎石を利用した建物であったと考えられる。柱間は、当建物に取りつく渡り廊下から復元するならば、5間×4間で桁行中央間 3.8m、次両脇間、両隅間が3.3m、梁行間各々2.2mの数値が得られる。基壇外周には、凝灰岩切石の地覆石が確認された。南辺中央に7個体(図-33)、北辺東よりに1個体、遺存するだけであるが、基壇外周に沿って凝灰岩の掘えつけ痕、あるいはぬき取り痕が確認できたことから、基壇外周全部に繞っていたと解される。遺存する切石の大きさには、若干の個体差が見られるが、ほぼ50cm×20cm×20cmの長方体をなす。外側上面の角は丸味をおびている。南辺中央西から6個体の上面には、約30cm間隔でほぞ穴(図版-15の2)が刻まれている。ほぞ穴の大きさは一定していないが、ほぼ10cm×5cm×2cmで浅いものである。おそらくこのほぞ穴にはめ石が立てられたものと考えられるが、ほぞ穴が刻まれていない地覆石もあるため、基壇復元には、今後の検討が必要である。また、渡り廊下等から考えて出入口と推定される部分は、削平が著しく階段等の施設を確認することができなかった。

建物周辺には、雨落溝が造られている。雨落溝両側壁には埴、底石には、西側の一部で凝灰岩、その他で河原石が使用されている。埴は、ほぼ30cm×10cm×15cmで焼成は良好、色調は赤褐色あるいは黒褐色を呈する。この埴が横長に並び基壇周辺を繞っている。各辺に1～2個体間隔を調整するために通常のものより短い埴が使用されている。外周埴の外側には、約30cm大の河原石を押さえとして用いている。埴溝間は約36cmで、底石として使用されている河原石は約30～40cm大のものである。石と石の間にはかなりのすき間があるが、そこには小石をつめて

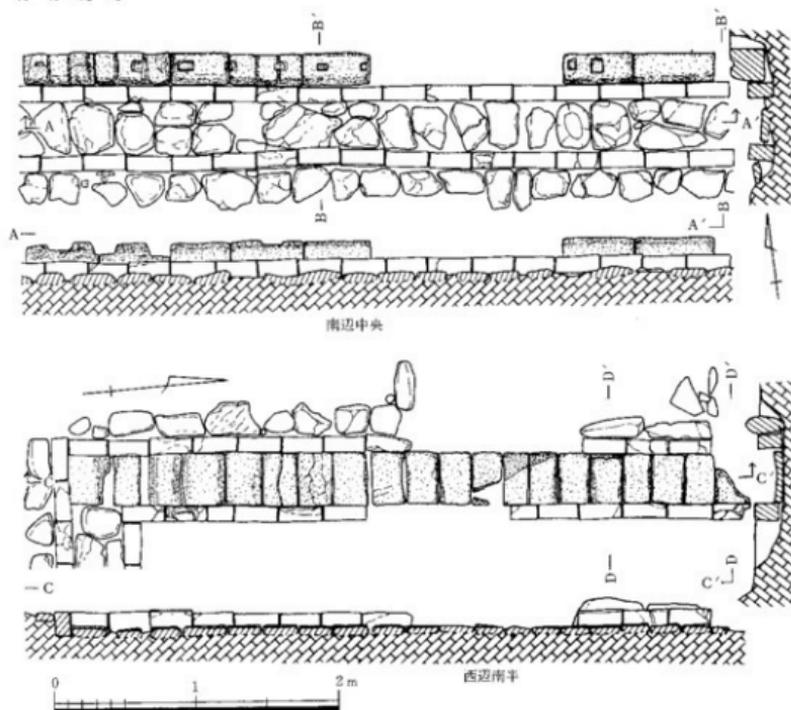


図-33 建物1 雨落溝細部

体裁を整えている。また西側雨落溝南半の底石（図-33、図版-15の3）には凝灰岩が使用されている。凝灰岩1枚の大きさは、幅は溝間と同じ36cm、長さ25~30cm、厚さ5cmで、20枚遺存している。凝灰岩の中には、底石として使用するためとは、考えられない加工痕を持つものがある。またこの部分の埴は、外側上面の方が、内側上面よりも低くなっており、この部分が何らかの改修を受けたと考えられる。この西側雨落溝は、建物北西隅で北側のものと合流しさらに北へと伸び、建物2の南側雨落溝と考えられる溝1と合流している。この延長した溝も、建物1の雨落溝同様、両側壁に埴、底石に河原石を使用したものであり、埴両外側には、これも同じく30cm前後の扁平な石が押さえとして使用されている。雨落溝内のレベルを見ると、南東隅が高く、西側溝と溝1の接合部との差は4cmである。溝内からは、多量の瓦が出土した。瓦の中には、軒瓦も多く見られ、あたかも軒先から落下したかのような出土状況であった。

この他に建物1に関する遺構として建物南部に東西に伸びる溝が検出されたが、この溝は第4節で述べた水田に関する溝と建物西辺で合流していることから同様の機能を持ったものであろう。なお両溝ともに時期は不明である。

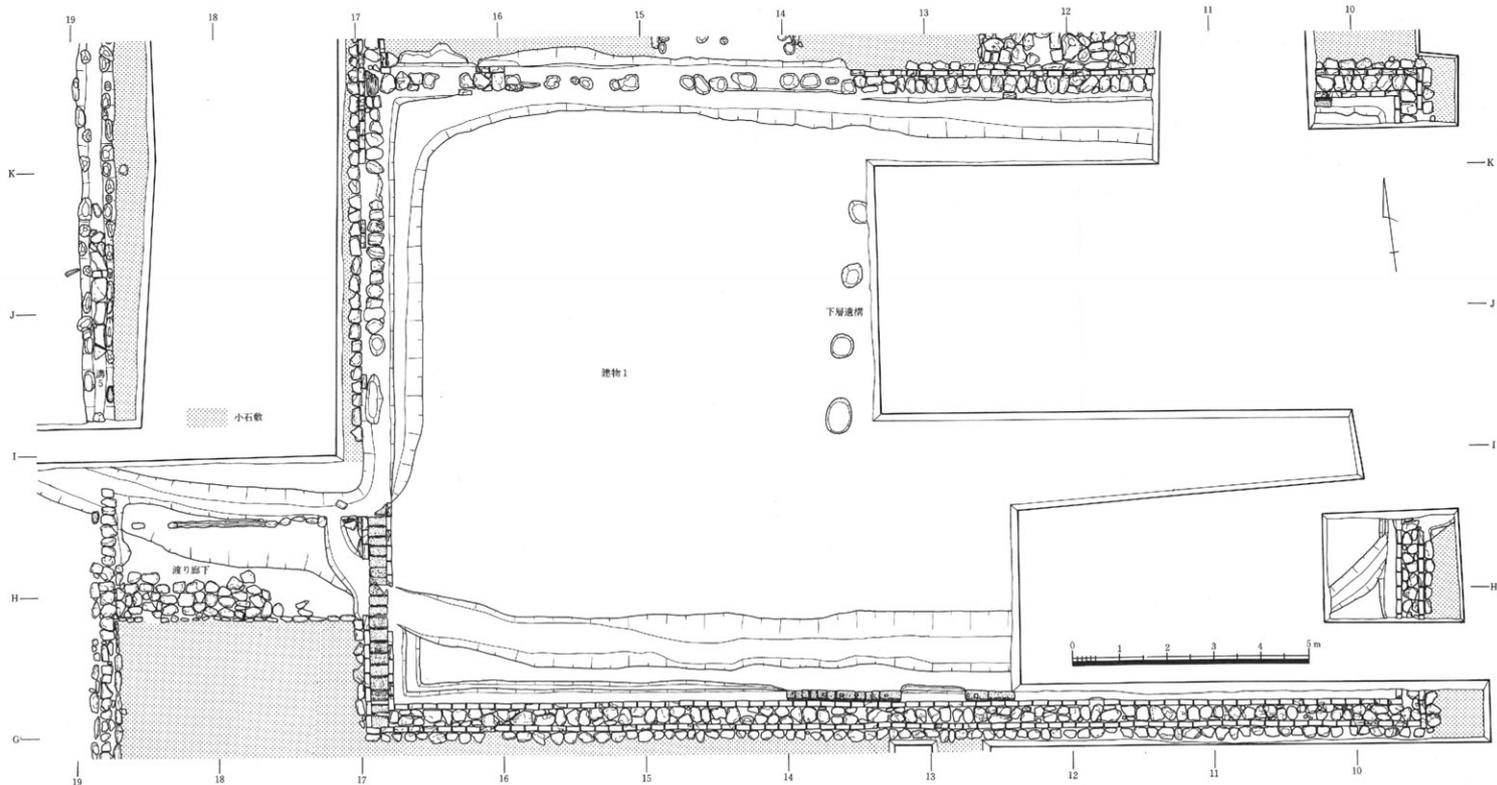


図-34 建物1とその周辺

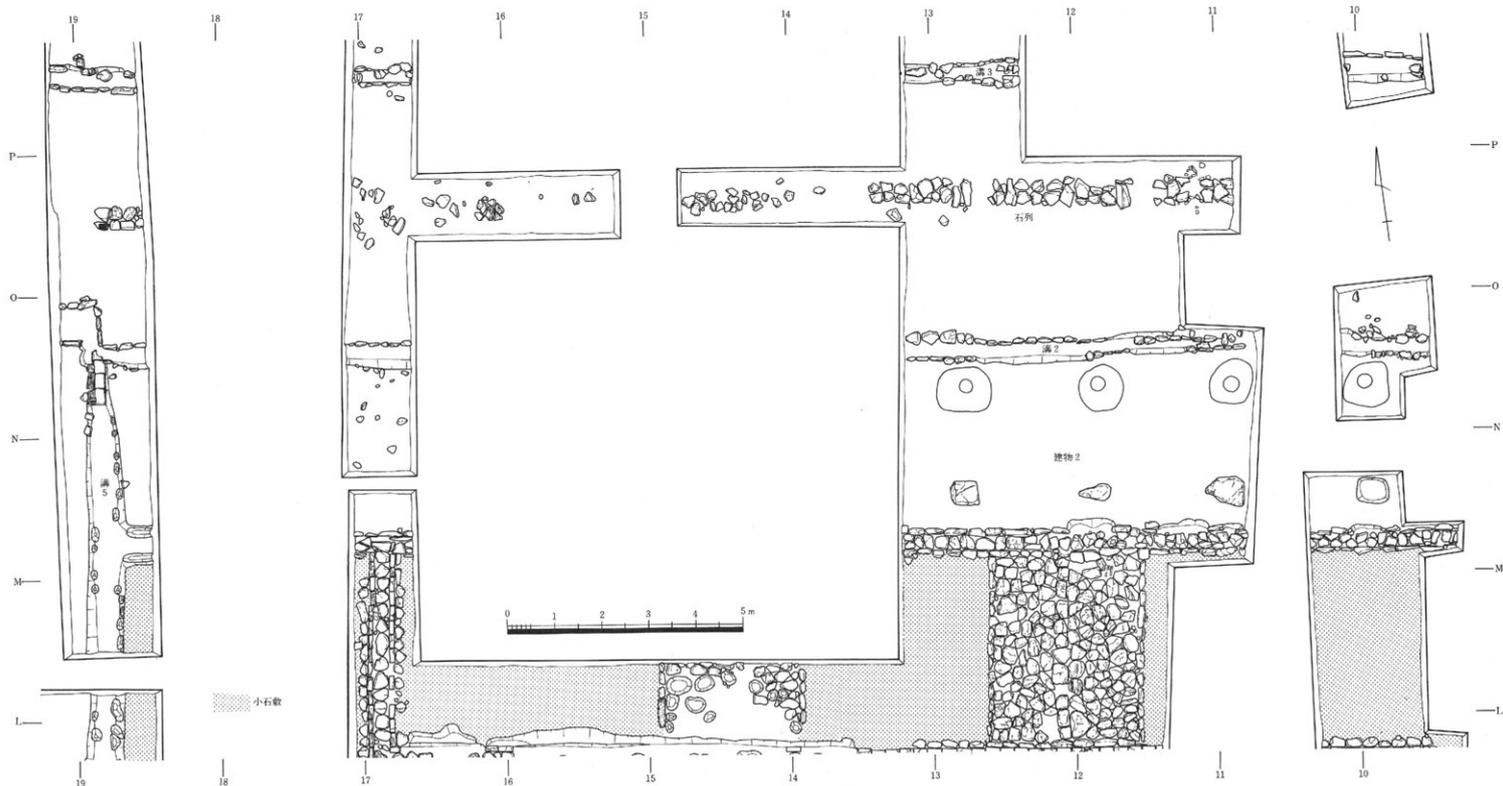


図-35 渡り廊下・建物2・石列・溝1・2・3・5

・渡り廊下及び小石敷面（図-34・35・36）

建物1の北辺と西辺には、河原石を使用した渡り廊下が存在する。北辺には西と東に、西辺には、南よりに合計3本である。その他の辺には石の使用法等からして、渡り廊下はなかったと考えられる。北辺西のもの（図版-15の4）は、石がかなり多く抜き取られているが両耳石は違っており、幅3.1mを測る。東の方（図-36、図版-13の1）は完存しており建物1と2との関係を明らかにすることができた。両耳石間は3.3mで、その中に30～50cm大の河原石を敷いている。中央にやや西よりに目地が通り、この幅が、建物2の柱間と一致する。このことは、建物2の柱間がすでに決定してから、渡り廊下が造られたことを示している。建物1と接する部分では、雨落溝外側溝に沿って東西に長い石を立てて使用し、溝上面よりも高くなるようにしている。従ってこの部分には、約5cmほどの段ができる。この段を利用して凝灰岩の板石が溝上を覆っている状況が一部で見られた。完全な形で遺っている部分はわずかであるが、溝内からは、凝灰岩の破片も顕著に見られた。西辺の渡り廊下（図版-13の2）は北半が削平されているが、中央が高まっていることや、建物1との取りつき関係は、北辺のものと同じである。しかし北辺のものに比べると両耳石間が2.2mと狭く、逆に北辺のものが長さ4.2mであったのに対し、5.2mと長くなっている。また建物2の柱間と一致する。

建物1と建物2の間4.2m、建物1と建物3の間5.2m、建物1の南9mの渡り廊下以外の空地には、全面に5～10cm大の小石が敷かれている。建物1の東側については、小石敷は存在するが範囲は不明である。この小石敷は以上に示した範囲に限られるもので、建物1が、その規模以外からも、重要視されていたことを示すものである。この小石敷面には、建物1の南7m地点に東西にピット列が並び、8m地点から南面するゆるやかな斜面を形成し9m地点で終わっている。この9m地点では、小石敷の下層に東西に伸びる暗渠状の石組を検出した。この他に溝状遺構が見られないことから、おそらくこの落ちと暗渠状の石組が排水の役割を果たしていたものと考えられる。さらにこの南2mの地点には、東西に長い石垣が組まれ、水田面が下げられているが、この石垣は、建物の主軸と一致し、また遺構の範囲ともほぼ一致することから、奈良時代当時の区画を水田に利用しているのではないかと考えられる。

・建物2（図-35・37、図版-13の3・4）

建物1の北4.2mの所に位置する東西に長い建物で、北は溝2、南は溝1、西は溝5によって区画されている。南北幅は両溝間で4.0m、東西長は東が不明であるが28m以上を測る。この敷地内に桁行9間以上、梁行1間の建物が存在する。柱間寸法は桁行2.8m、梁行2.2mである。この建物の構造は、南側桁行に礎石、北側桁行に掘立柱を有するもので、あまり例のないものであるが、性格は別として、平城宮第1次大極殿南門両脇の樓閣建築が知られている。南側礎石（図版-15の5）は3間分検出した。石材には花崗岩と安山岩を使用している。礎石

掘形は、礎石とほぼ同じ大きさのプランを呈し、深さは約50cmである。まわりには土を入れしっかりと固定している。掘形内埋土には遺物はふくまれていなかった。北側掘立柱（図版—15の6）は直径約1mの不整円形を呈する掘形で深さは約60cmである。中心に直径約30cmの柱を据えまわりを土で固めている。この埋土内には、多量の瓦や石が混入しており、瓦の中には、軒瓦も多く見られた。この軒瓦は、建物1の雨落溝から出土するものと同范である。このことから、この掘立柱は、建て替えによるものではないかと考えられる。柱の根は遺存しており、3間分検出したが、すべてヒノキである。

この建物の雨落溝と考えられる溝1・2は、両側石に河原石を使用しているが、溝1には底石として河原石を使用しているのに対し、溝2では、底石を有しないという差違が見られる。

この建物は、建物1を囲むようにして存在し、梁も1間しかないということから考えて、回廊と解することができる。

#### ・建物2北側石列（図—37、図版—13の5・6）

溝2の北側5.6mの所には、東西に溝3が走る。この溝は溝2と同じく両側石に河原石を使用するものである。この両溝間のほぼ中央に幅約60cmの石列が東西に伸びている。西端は、溝5を北へ伸ばした地点と一致し、東は不明であるが、24m以上であることがわかる。この石列は河原石や板石を横長や細長あるいは並列させたりしてほぼ60cmの幅をそろえており、所々では、埴の破片なども使用している。先にほぼ中央といったが、西端は、溝2・3の中央に位置するのに対し、西端から20m東では、中央より北寄りにふれている。このふれは、他の遺構では見られないものである。逆にこの位のふれは、遺構の性格上問題にならなかったのかもしれない。また、先に述べた両溝間は、全体が深さ40cmほど掘り込まれた後に整地されている。この整地層内には、瓦や埴の破片が多く混入している。はっきりした版築は見られないが、一部に、漆喰状のものが互層となっている部分が見られた。このように地山をわざわざ掘って、整地をおこなっていることから、この部分の建築物が非常にしっかりしたものであったことが考えられる。本報告では、この遺構を築地と考えているが、他に例を見ない遺構であり、今後の調査でその性格を明らかにする必要があるものである。なお、この遺構も、建物2の北側掘立柱同様、改修工事によって造られたものであろう。

#### ・溝5

建物1の西側5.2mの所には溝5が南北に走っている。この溝の南端は、先に小石敷の所で述べた様に建物1から南9mの地点を東西に伸ばした地点と一致する。北端は南端から32.7mの地点でここから西へと流路を変え溝6となる。溝6は溝5との交点から西へ28.4mの所で流路をまた南に向け溝7となる。これら3本の溝によって建物1の西側の地は区画されている。

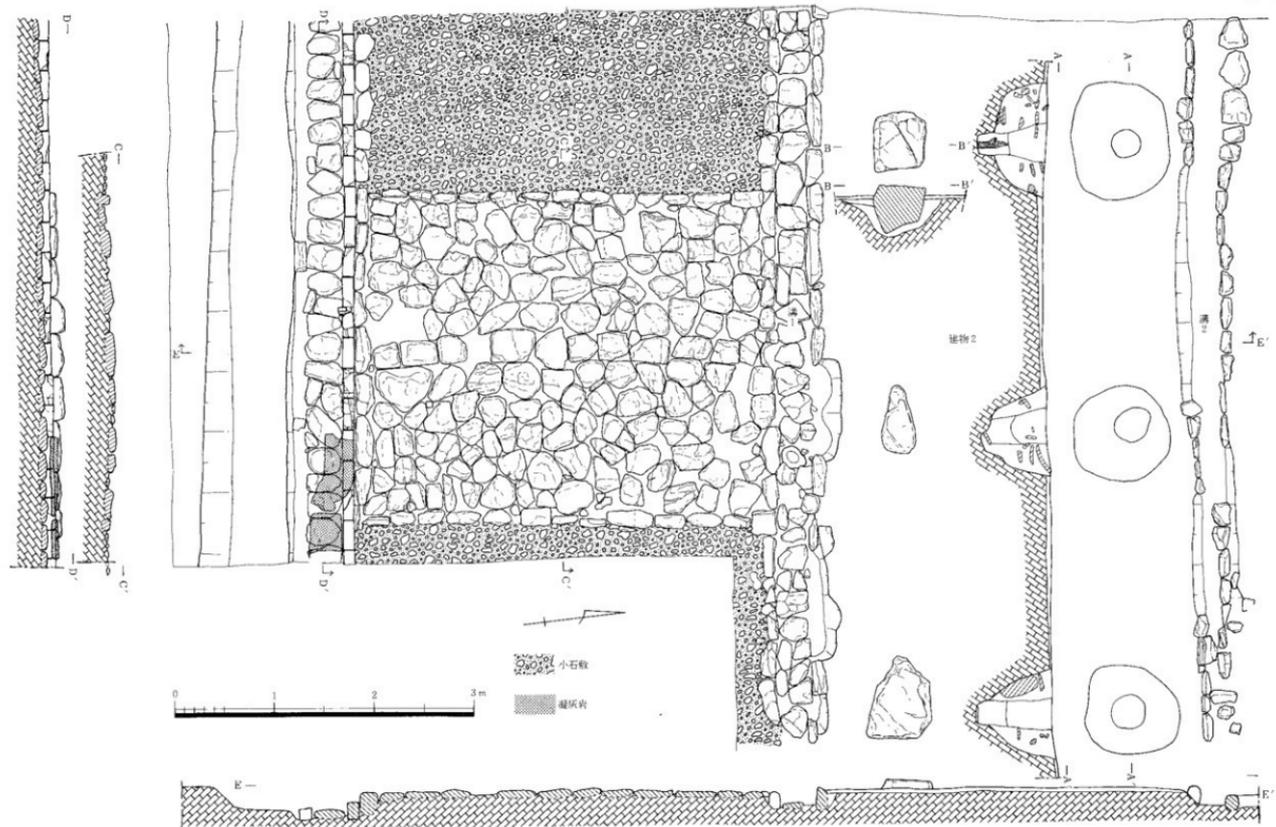


図-36 渡り廊下・建物 2・溝 1・2

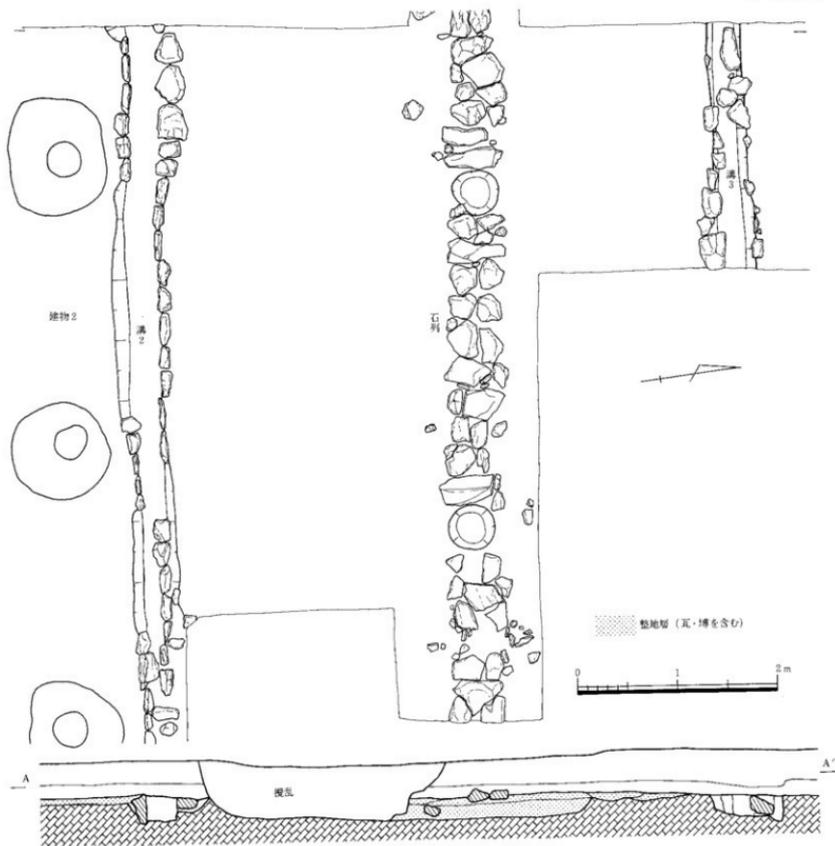
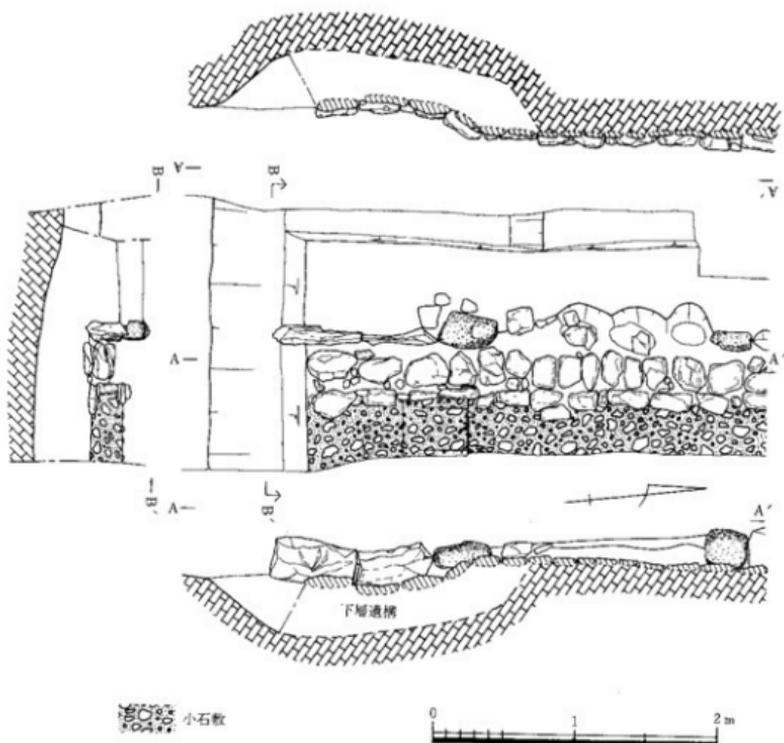


图-37 石列・溝 2.3



図一38 溝5南端

溝5は全長32.8mで、溝1と同じように側石と底石に主に河原石を使用している。西側側石は、東側のものより高くなっており、石の使用法も立てて使ったものが多い。また板石や花崗岩等を多く使用している。このような石の使用法は溝1においても見られた。南端（図一38、図版一4の1・15の7）は底石及び東側側石が小石敷面と同様に南向きに傾斜しているが、西側側石は、傾斜していない。雨水は南へと流れるのであるが、この部分にはさらに南へ伸びる排水施設が見られないことから、この落ち全体が排水施設になっていたのではないかと考えられる。この落ちは、東に伸びており建物1の南9m地点と一致していることも重要である。また、この南端部では、下層遺構として溝が存在していたことがわかった。時期は不明である。溝北半は、ほとんど石が抜き取られているが、北端から5mと1m南の地点に溝1・2が取りついており、特に溝2との取りつき部分から南1m間には、瓦を使用した暗渠と考えられる遺

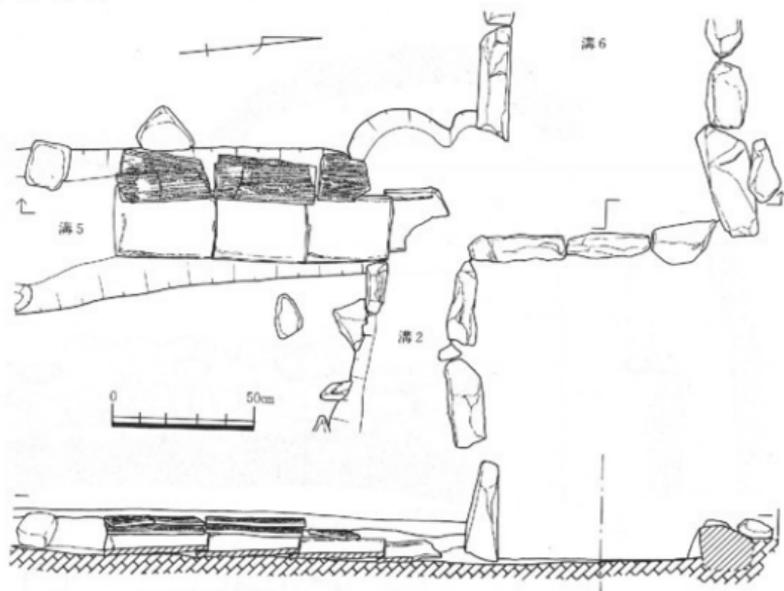


図-39 溝5北端 瓦暗渠

構（図-39、図版-14の5・15の8）を検出した。これは瓦を屋根に葺くのと同一ように、平瓦を溝内に凹面を上にして、狭端部を北側にしその広端部に次の瓦の狭端部を重ねるようにし完形を3枚、意図的に割られたもの1枚を並べている。その西側側縁部には、半截した瓦平を凸面を上にして2枚重ねて南北に並べている。東側側縁部にはその痕跡はなかった。この部分は先に回廊と推定した建物2との取りつき部分であることを考えると、おそらくこの瓦を積み重ねた上に何らかの覆いをしていたものと考えられる。また、この瓦の並べ方から雨水は北へと流れるようになっている。すなわち、溝5は南北に排水機能を持っていたと考えられる。

・建物3（図-40、図版-14の3・4）

建物3は、溝5・6・7によって囲まれた区画を東西に3等分したうちのいちばん東の区画内に存在するもので、桁行9間、梁行2間の南北に長い建物に復元される。桁行1間は3.3m、梁行1間は3.0mである。従って溝5は、この建物の東側雨落溝となる。溝5から西へ9mの所には、南北に水田の石垣と盲暗渠が通っている。この9m間には、溝状遺構が見られないこと、盲暗渠内に多量の瓦が使用されていることなどから、この盲暗渠の位置が、西側雨落溝であったと考えられる。この建物の構造は、建物2で見たのと類似しており、東側桁行に礎石、西側桁

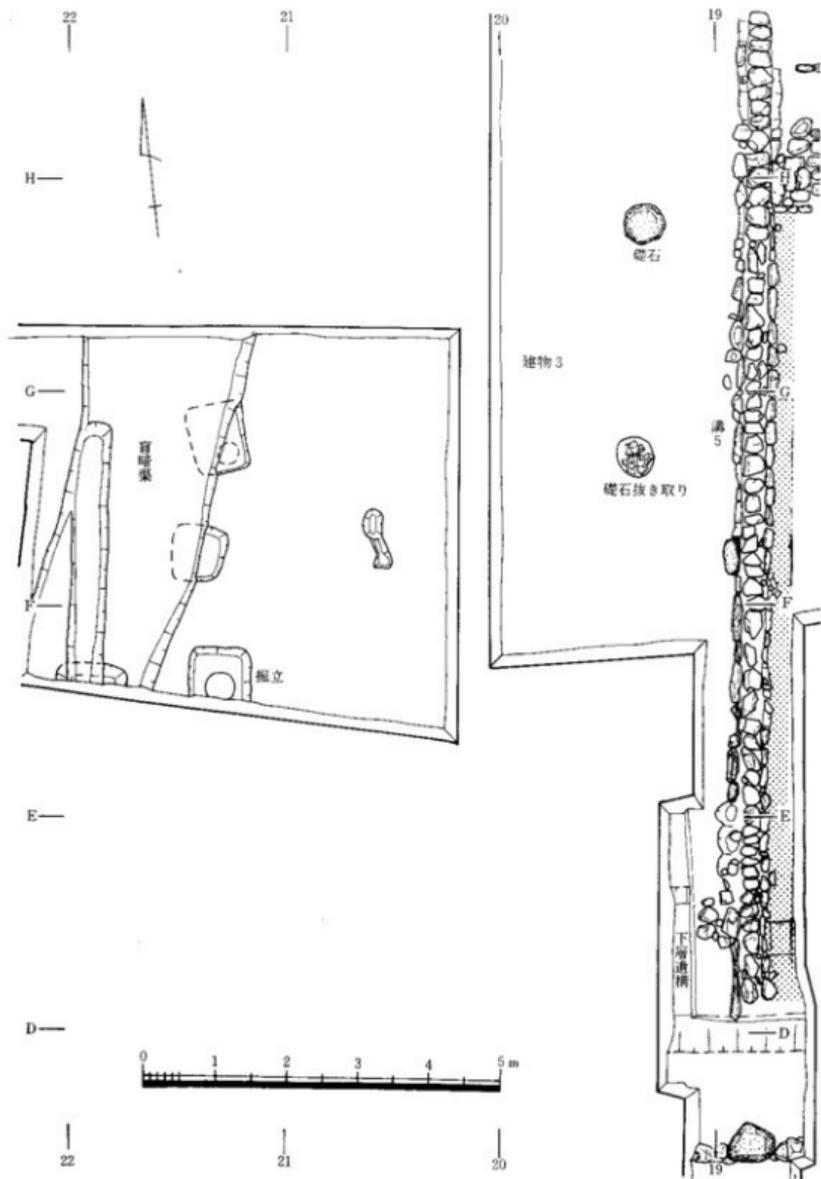
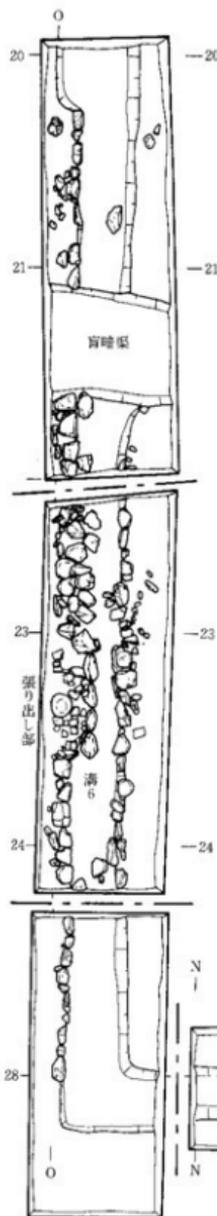


図-40 建物3・溝5



行に掘立柱を使用している。東側礎石は1個体しか遺存していないがこれより南 3.3mに礎石の抜き取り痕を検出した。礎石は、扁平な花崗岩を使用しており、掘形は、北方基壇上でも見出せなかったことから非常に浅いものと考えられる。西側掘立柱は1辺1mの方形プランを呈する掘形を有し深さは約1mである。東側桁行と対応するもの2つとその中間にやや小さめの掘形を検出した。この小さいものは、補助的なものであろう。掘形は全て基壇上面から掘られている。明確な柱痕は確認できなかったが、掘形の規模から考えると、建物2のものより太いものを使用されたと考えられる。また埋土内には、全く遺物が存在しなかった。梁行中央柱は、今回の調査では、明確なものを確認しておらず、今後の調査で明らかにする必要がある。

・溝6・7 (図-41、図版-14の5・6)

溝6は溝5の北端から西へ伸びるもので、全長28.4m 幅は70cmと他の溝に比べ広がっている。側石には河原石を使用している。北側側石に沿って溝底に浅い溝が走ることから、この溝が改修工事によって拡張されたことがうかがえる。また東端から13mの地点では北側側石が約35cm南に張り出している(図版-14の6)。この張り出し部には多量の瓦が裏込めとして使用されている。またこの部分の南側側石は2段積みになっている。これらのことからこの部分が改修工事により造られたものであると考えられる。溝の幅がせばめられていることから、何らかの出入口となっていたのであろう。

溝7は、溝6西端部から南へ伸びるもので全長24m以上、幅60cmの素掘り溝で、石の使用は見られなかった。

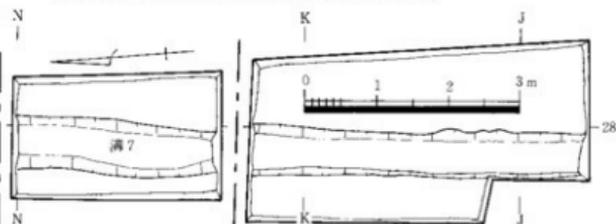


図-41 溝6・7

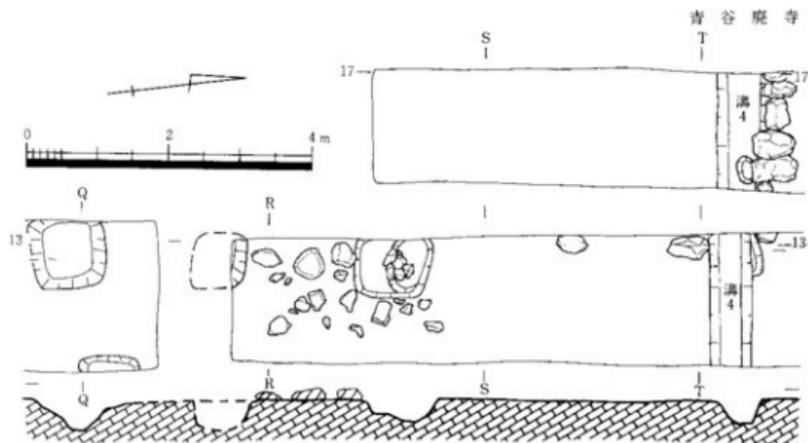


図-42 溝4・下層遺構

・溝4、及び下層遺構（図-42）

溝4は、溝3の北方11.5mの所にあり東西に伸びる。全長は不明であるが、14m以上、幅は50cmである。この溝の北方には、整地層が検出された、この整地層は、調査区西半に広がるものと同時期であるかは、不明であるが、この溝より北に建物の存在が考えられる。また地区割13のP-Uに開けたトレンチからは、溝3と4の間で南北方向に軸を持つ掘形を3つ検出した。この掘形は、1辺約1mの方形を呈し深さ約40cmを測る。掘形間の距離は2.4mである。この部分は水田の石垣により層位的に不明な点が多いのであるが、この掘形列の上面には、粘土がうすく堆積しておりこの粘土が整地の際に入れられたものと考えられることから、下層遺構と考えられる。この溝3・4の間は、今後の調査で明らかにしたい。

以上、遺構を概観してきた結果、当遺跡は建物配置からして、寺院跡とは考えられないものである。建物1を中心に北は建物2、西は建物3が取り囲んでいる。東は未調査のため不明であるが、建物1の東約5mの地点で水田面が約1.5mあがっておりこの部分に南北にのびる堤を形成している。この段を古いものと解するならば、建物1は、南北28m東西33mで北・西・東の3方を囲まれ、南に視野の開けた敷地の中に建てられている。この南とは、大和川をはさんで河内国分寺の位置する方向であることは、きわめて重要であろう。この敷地の西には、溝5・6・7によって囲まれた南北33m東西28mの敷地があり。この敷地内東側1/3を建物2がしめる。北は、建物2、石列のさらに北に建物が建つ可能性があるが今の所不明である。建物の規模や敷地内の構造から考えると、建物1が建つ空間が最も重要視されており、このまわりの空間は、それに付随する諸施設として理解することができ、一定の規格の下に存在している。

## 第6節 遺物

当調査地は、以前より、奈良時代の瓦や埴等の散布地として知られていた。今回調査の結果奈良時代の土器と伴に、多量の瓦を検出した。これらの遺物は当遺跡の時期・性格を考えるうえにおいて、貴重な資料である。

### ◎土器（図-43、図版-16）

当調査地において出土した土器は、瓦に比べると量的には微々たるもので、しかもそのほとんどが細片であった。しかしながら、これらの土器は、当遺跡の時期を知るための有力な手がかりとなるものである。土器を伴った遺構は、整地層の他は各建物雨落溝である。

#### ・整地層内土器

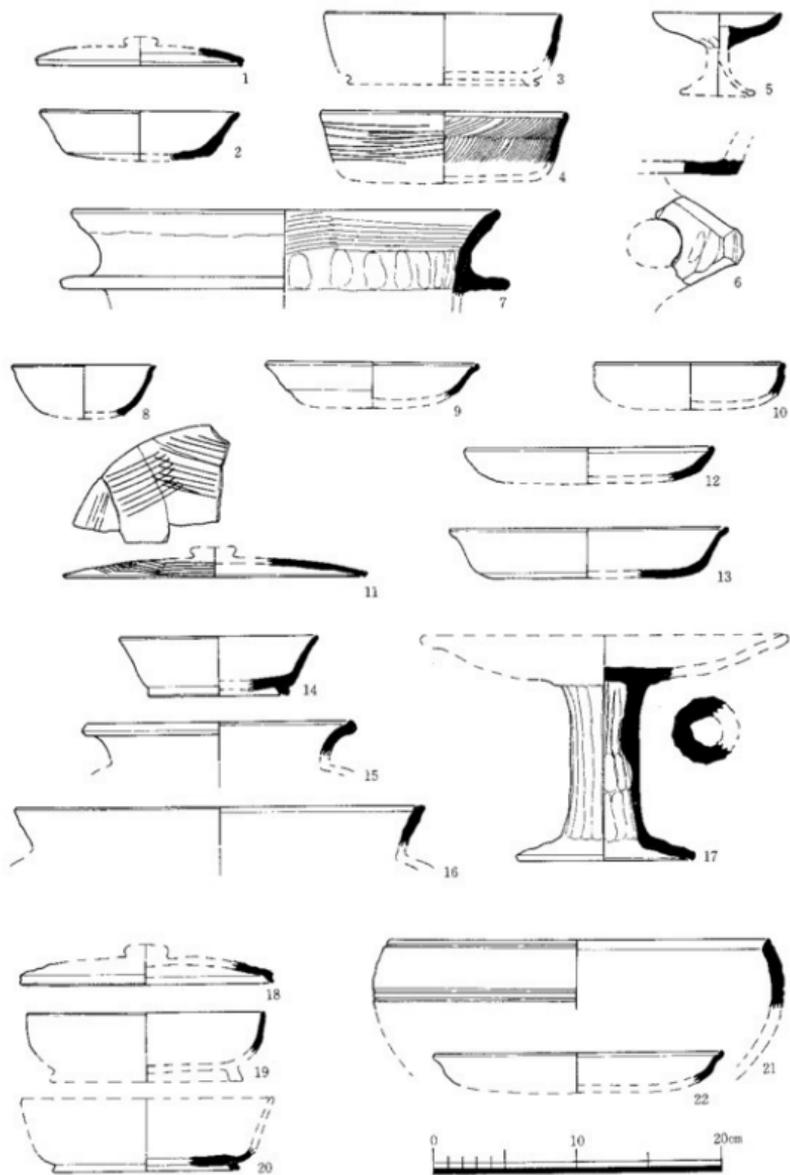
整地層内は先にも述べた様に大まかに3層に分けられるが、そのうちの下層に含まれるものである。整地層内からは、瓦の出土は見られなかった。

**須恵器** 杯蓋（1）は口径14.2cmで上面はヘラ削りの後ナデを、内面及び口縁部には横ナデを施す。蓋上面はゆるやかなふくらみを持つもので、口縁端部は短かく下方へ屈曲する。杯身（2）は口径13.8cm、器高3.4cmで底部外面はヘラ切りの後横ナデ、胴部内外面ともに横ナデ調整を施す。口縁部は若干ふくらみを持ち外方へひろがる。杯身（3）は口径16.4cmで口縁部内外面ともに横ナデ調整を施し、やや外反ぎみに立ちあがる。焼成はいずれも良好である。

**土師器** 杯身（4）は口径17.0cmで外面横方向のヘラ磨き、内面、斜方射+正方射の暗紋を施す。口縁部はゆるやかなS字状を呈し口縁端部は、内側に軽く巻き込んでいる。小型高杯（5）は口径9.0cmで内外面ともナデ調整を施す。脚部は破損している。甗（6）は底部のみであるが、中央と周辺3方にスカシが開けられている。羽釜（7）は口径29.8cmで口縁端部より4.8cm下方に鋳を有する。口縁部内面ハケ目、外面ナデ調整で、鋳は貼り付けによる。口縁部は体部よりゆるやかに外反し端部は丸くおさめる。胎土には長石・雲母・角閃石を含んでいる。以上の他に、鍋の把手も出土している。遺物の出土量はわずかであるがいずれも8世紀初頭に位置づけられるものである。このことから8世紀初頭に、この地で何らかの生活が営まれていたと考えられる。さらには整地層内に瓦を含まないことから、後に述べるように、8世紀初頭から中葉に到る時期に、整地がおこなわれたことがうかがえる。

#### ・建物1 雨落溝及び溝5内出土土器

**土師器** 杯蓋（11）は口径20.6cmで外面ヘラ磨き、内面ナデ調整を施す。口縁端部は下方にややふくらむ。杯身（8）は口径9.8cmで内外面ともに横ナデ調整で、胎部は底部より直立ぎみに立ちあがる。口縁部外面は強い横ナデが施されており「く」の字状に屈曲している。杯身（9）は口径17.0cmで内面と外面上半に横ナデ調整、外面下半にヘラ削りの後横ナデ調整を施す。体部下半は直線ぎみに外反し上半はゆるやかに外彎する。口縁端部は、内側に巻き込ん



图—43 出土土器(1~7-整地层内,8~13-建物1雨落溝,14~15-溝2·3間整地层内,16~17-溝3,18~22-溝7)

ている。杯身(10)は口径13cmで内外面とも横ナデ調整で、口縁部外面には強い横ナデを加え「く」の字状に屈曲させている。口縁端部は内側に巻き込んでいる。杯身(13)は口径19.2cm器高3.6cmで体部内外面とも横ナデ調整、底部内外面ともナデ調整を施す。体部は底部より外反して立ちあがり口縁部でさらに外彎する。口縁端部は内側に軽く巻き込む。皿(12)は口径17.0cmで内外面ともに横ナデ調整を施す。体部は底部よりゆるやかに内彎しながら立ちあがり口縁端部は内側に軽く巻き込む。これら雨落溝内の遺物は、8世紀の中葉から後葉に到るもので、瓦葺建物の存続年代を示すものと言える。また食器に限られ、煮沸用具等がないことからこれらの遺物の性格の一端がうかがえる。

#### ・築地整地層内遺物

**須恵器** 杯身(14)は口径13.8cmで外方に開くしっかりした貼付け高台を有する。底部はヘラ削り、体部内外面には横ナデを施す。体部は底部より内彎ぎみに立ちあがり中ほどからゆるやかに外彎する。甕(15)は口径18.2cmで口縁部のみである。内外面とも横ナデ調整で口縁部は外彎する。端部は丸みを持つ。これらの遺物の時期は8世紀の中葉に位置づけられるものである。これらの遺物は、築地と考えている溝2・3間の整地層内に多量の瓦や埴の破片とともに混入していたものであることからこの築地が8世紀中葉以後、瓦葺き以後に建てられたものであると考えられる。

#### ・溝3内遺物

**須恵器** 広口壺(16)は口径28cmで口縁部のみである。内外面ともに横ナデ調整を施す。口縁部は直線ぎみに外反する。口縁端部は内側に肥厚する。

**土師器** 高杯(17)は脚部径12.2cm 器高約18cmで、杯部は破損している。脚柱部は外面縦方向のヘラ削りにより15面の面取りを施す。内面は指押えである。脚柱部には横ナデ調整を施し外方に「ハ」の字状に広がる。口縁端部は下方に短かく屈曲する。これらの土師器は、築地北側の雨落溝と考えられる溝3内に堆積していたもので時期は8世期中葉から後葉に位置づけられる。

#### ・溝7内遺物

**須恵器** 杯蓋(18)は口径17.6cmで天井部はヘラ削りをおこない扁平に仕上げている。杯身(19・20)はともに細片であるが、口縁部は直立ぎみに立ちあがるもので、底部はヘラ切り未調整で、外方に短かく開く貼付高台を有する。鉄鉢(21)は口径26.4cmで胴部下半を欠損している。内外面とも横ナデ調整を施し、口縁部上端と体部に合わせて3条の沈線を施す。口縁端部は内傾する平坦な面を持つ。

**土師器** 杯身(22)は口径19.8cmで内外面とも横ナデ調整を施す。胎部はS字状に屈曲している。口縁端部は内側に巻き込む。これらの遺物は当遺跡の西の区画を限る溝7より出土したものであり、8世紀中葉から後葉に位置づけられるものである。

## ◎瓦 (図-44・45・46・47・48、図版-17・18、表2)

当調査地は、以前から瓦の散布地として知られており、表採遺物として平城宮系6225L型式(8)の瓦等が紹介されている。今回調査の結果、コンテナ150箱もの多量の瓦を検出した。瓦の種類は丸瓦・平瓦を主とし、軒丸瓦・軒平瓦も多く見られた。またこの他に隅切瓦・面戸瓦も出土している。瓦を伴った遺構は、各建物の雨落溝の他、建物2の掘立柱掘形内、建物3整地層内がある。これ以外に、後世の水田に伴う盲暗渠内からも多く出土している。これらの資料は、当遺跡の性格や存続年代を知るうえで貴重なものである。現在、瓦は整理中のため不十分な点もあるが、主なものを紹介しておく。

## ・軒丸瓦

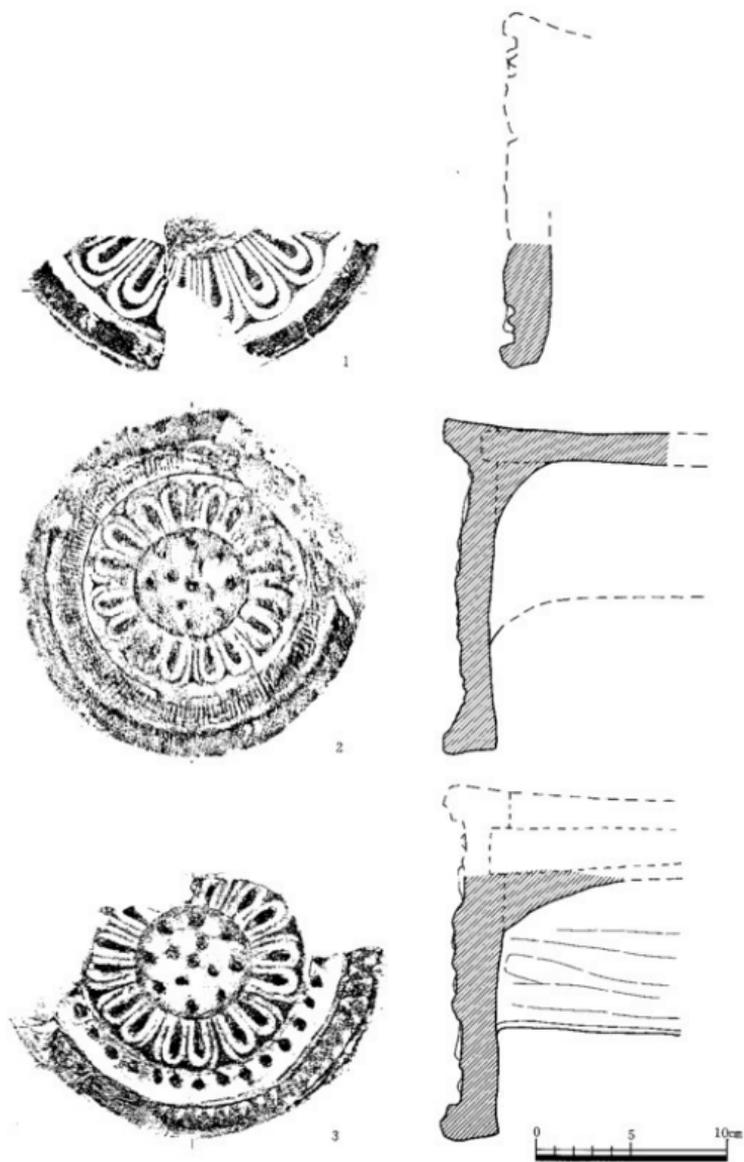
今回出土した軒丸瓦は5型式認められる。表採のもの合わせて6型式が知られる。河内国分寺の同范の複弁7葉蓮華紋軒丸瓦(5・6)が57点、その他はすべて1点ずつの出土である。

(1)は単弁(単子葉)16葉蓮華紋を有するもので間弁は楔形を呈しその先端は中房に到っている。弁中央はふくらみを持つ。外縁はややふくらみを持つ平坦縁で素紋である。瓦当厚は2.2cmと薄い。焼成は還元が不充分であり黄灰色を呈する。中房を欠損しているが、奈良県片岡王寺・大阪府河内国分寺等から出土しているものと同范である。

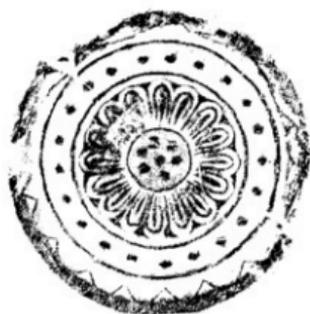
(2)は複弁(複子葉)8葉蓮華紋を有するもので、径5.9cmとやや大きめの中房内に1+4+8の蓮子を配し、その外側3.1cm間に蓮華紋を配する。弁は各々が細い凸線によって囲まれており、楔形を呈しその先端が細線となって中房に到る間弁によって8葉に分けられる。外区は傾斜縁となっており、内傾する面には雷紋が配されている。このことから紀寺系のものと考えられるが、紋様がかなり平面的で立体感にかけることから、紀寺より後出のものである。焼成はあまり良くなく、灰白色を呈する。胎土には1mm大の長石・石英等を多く含む。この瓦は、建物2掘立柱掘形内より出土している。

(3)は複弁(複子葉)8葉蓮華紋を有するもので、2弁を低い凸線で囲み8葉に分ける。間弁は楔形を呈しその先端は中房に到る。中房径は6cmと大きく1+4+8の蓮子を配する。外区は内縁に蓮珠を配し、三角縁の形態をとる外縁には、面違いの鋸歯紋を配する。瓦当と丸瓦の接合に際しては、丸瓦凸面先端を削りおとし、瓦当裏面上部の溝にきし込んでいる。接合線は凹弧を描く。焼成はあまり良くなく外面黒褐色を呈するが、内部は灰黄色である。この瓦は、平城宮系6272A型式と同范関係にある。

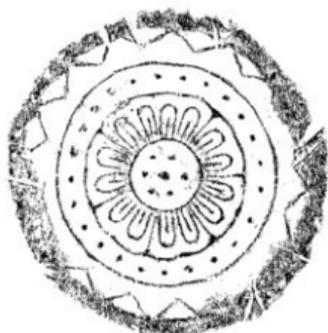
(4)は複弁(複子葉)8葉蓮華紋を有するもので、内区は、外縁と同じ高さまで盛り上がっている。中房は径3.5cmで1+6の蓮子を配する。各弁は、凸線で囲まれ2弁置きに中房にまで達する楔形の間弁が配置される。またこの一葉の弁間には、中房に達しない楔形の間弁が置かれる。外区は内縁に蓮珠21個を配し、傾斜縁をなす外縁には凸線による鋸歯紋が配される。瓦当厚は4.7cmと比較的厚い。焼成は良好で淡灰色を呈する。丸瓦外面にはヘラ削りがおこな



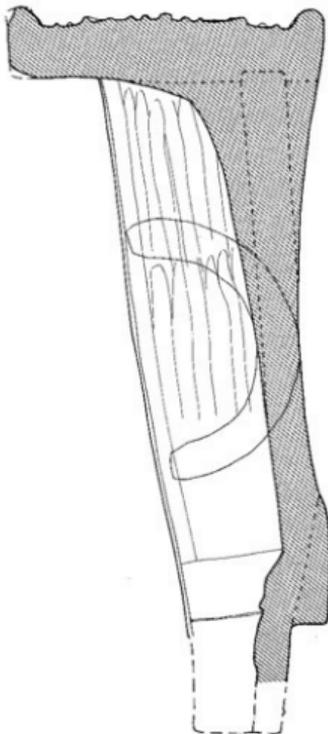
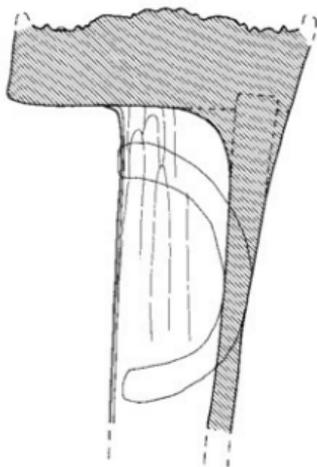
圖—44 出土軒丸瓦、拓本及断面图



4



5



图—45 出土軒丸瓦、拓本及び断面図

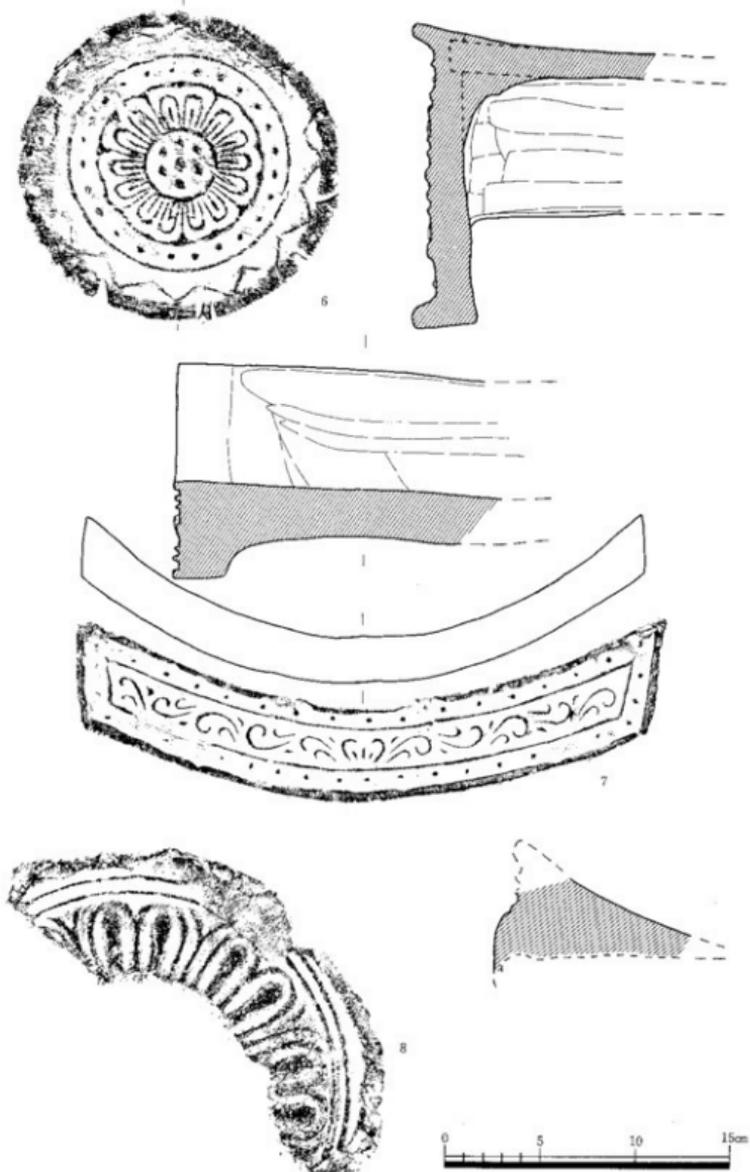
れている。この瓦は平城京系6303A型式（左京一条三坊出土）と同范のものである。また難波宮にも同范のものが存在する。

(5)・(6)は複弁（複子葉）7葉蓮華紋を有するもので、当遺跡を代表する主要な軒丸瓦である。細い凸線で表わされた子葉は、各々凸線で囲まれ、2弁を一組として中房に先端が達する楔形の間弁で分けられる。この瓦の特徴は、7葉であるということと、さらに間弁が一か所だけ中房に達しないことがあげられる。このことから、同范関係が非常にわかり易い。中房は圏線だけで表現されており、高まりは見られない。蓮子は1+6である外区内縁には蓮珠を24個配し、傾斜縁をなす外縁には凸線による鋸歯紋を表わす。瓦当と丸瓦の接合に際しては、丸瓦凸面や先端にキザミが見られるものが多い、瓦当裏面の溝は上端より2～3cm下がったところにあり、接合部には多くの粘土が使用されている。接合線は台形を呈する。これだけ多くの粘土を用いて接合しているにもかかわらず、接合部で剝離した資料が多く見られた。焼成は良くなく黒褐色や赤褐色を呈するものが多い。胎土には1～2mm大の長石・石英を多く含む。この瓦は、河内国分寺の他、羽曳野市丸山古墳や大阪市長原遺跡などでも同范のものが存在する。おそらく平城宮系6284C型式をモデルとして作られたものであろう。

この他に表採遺物として(8)の複弁（複子葉）8葉蓮華紋を配する瓦が知られている。この瓦は、直径26.4cmと他のものに比べてはるかに瓦当径が大きいのであるが、これに取りつく丸瓦は、特に大きいものではない。2弁を一組として太い凸線が囲み、Y字状の間弁がそれぞれを8葉に分ける。外区内縁には2重圏線、傾斜縁をなす外縁には外向する凸面鋸歯紋が配される。焼成は良好で灰色を呈する。この瓦は、平城宮系6225Lと同范関係にあり、平城宮では東朝集殿跡から8個出土しており、この瓦が鬼瓦と同様な機能をそなえているものと推定されている。今回の調査では、この瓦の出土は見なかった。

#### ・軒平瓦

(7)は、均整唐草紋を配したもので中心飾りは上方に開く3本の短線とそれを囲むハート状の花紋からなっており、左右に唐草紋の単位を5回繰り返す。1つの単位は3本の凸線からなっており、中央のものが長く片端を巻き込み、巻き込んだ方にあるものは、中央のものより短いと同じ方向に巻き込み、もう一方のものは、三角状の点となっている。外区には蓮珠を配す。範の彫りは(5)(6)の軒丸瓦同様深いのが、ともに立体感がなく平面的である。顎の形態は曲線顎である。凹面瓦当付近は横方向、側縁付近は縦方向にヘラ削りを施す。凸面は瓦当部分は横方向にヘラ削り後ナデを平瓦部分は縦方向にヘラ削りをおこなう。焼成は良好で、黒褐色や灰白色を呈する。この瓦は平城宮6721C型式をモデルにしたものと考えられる。当調査では軒平瓦はこの型式のもの37点しか認められず、他の型式のものは出土していない。おそらくこの軒平瓦と(5)(6)の軒丸瓦が対になって製作されたもので、他の軒丸瓦は他の地からの転用と考えられるが、平瓦が転用されなかったことに疑問が残る。



图—46 出土軒丸瓦・軒平瓦、拓本及び断面图

図版 番号	直径	内 区				外 区				瓦当厚	備考		
		弁 区		中 房		幅 内		形 態					
		選弁の形式	弁幅	径	蓮子数	外	内	紋 外	紋 内			高き	
①		選弁(単子葉弁) (16枚)	4.3	(7.2)	(1+8)	1.2		傾斜線	素紋		0.8	2.2	片岡 王寺
②	18.0	複弁(複子葉弁) 8葉	3.1	5.9	1+4+8	3.2		傾斜線	素紋		1.4	2.5	紀寺系
③	(19.0)	複弁(複子葉弁) 8葉	2.5	6	1+4+8	3.5 1.8	1.7	三角形	面違い 鋸歯紋	珠紋 (32?)	0.5	2.3	6272A
④	15.6	複弁(複子葉弁) 8葉	2.8	3.5	1+6	2.9 1.2	1.7	傾斜線	線鋸歯 紋	珠紋 21	0.5	4.7	6303A
⑤	16.3	複弁(複子葉弁) 7葉	2.5	3.8	1+6	3.5 2.3	1.2	傾斜線	線鋸歯 紋	珠紋 24	1.3	2.7	河内 国分寺
⑥	15.8	複弁(複子葉弁) 7葉	2.5	3.8	1+6	3.7 2.5	1.2	傾斜線	線鋸歯 紋	珠紋 24	1.0	2.5	○
⑧	(26.4)	複弁(複子葉弁) 8葉	6.8	(9.6)	1+8	2.4 1.6	0.8	傾斜線	面鋸歯 紋	雲龍紋	0.6	(4.4)	6225L

図版 番号	瓦 当 面										備 考						
	上 張巾	弧 深	下 張巾	厚 さ	内 区厚さ	内 区文様	上 外厚さ	上 外文様	下 外厚さ	下 外文様		脇 幅	脇 区文様	文 様深さ	額 の形態		
⑦	29.2	6.4	29.4	5.0	2.2	唐草文様	1.3	珠文	15	1.7	珠文	16	0.9	珠文	4	0.3	曲線型

表-2 出土軒瓦計測表

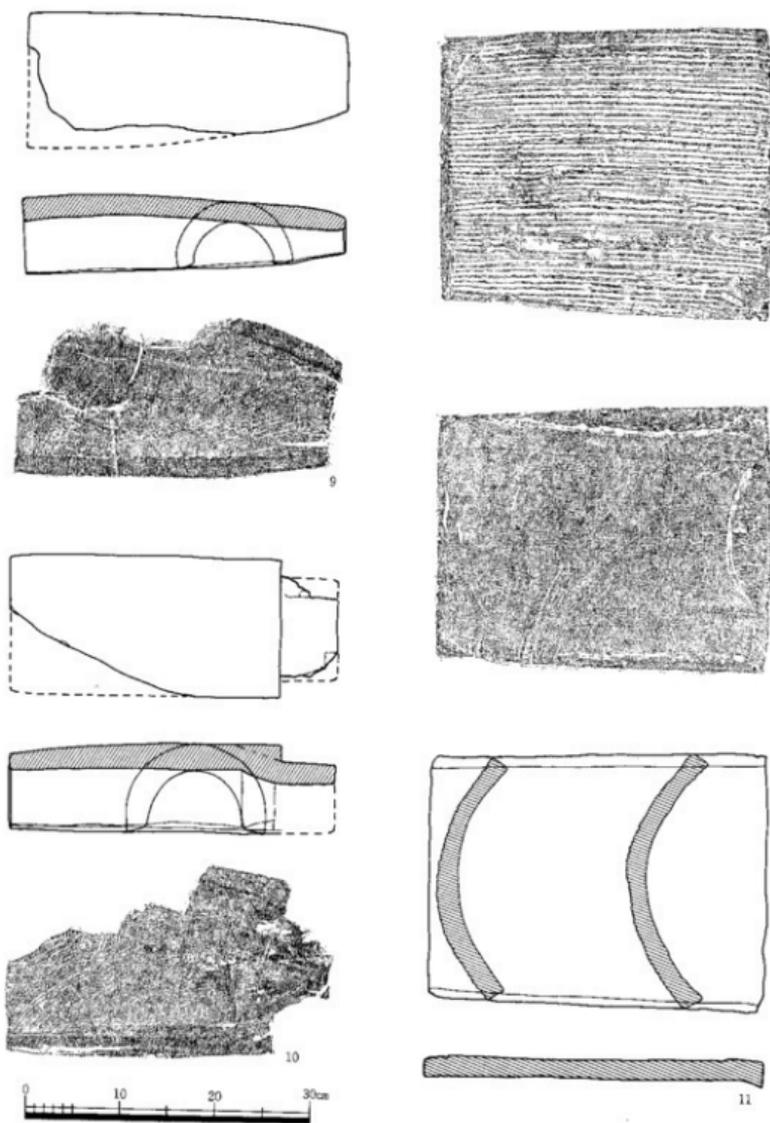
### ・丸瓦

当調査で出土した丸瓦のほとんどは、玉縁付きのものであるが、1点だけ行基式の瓦が出土している。

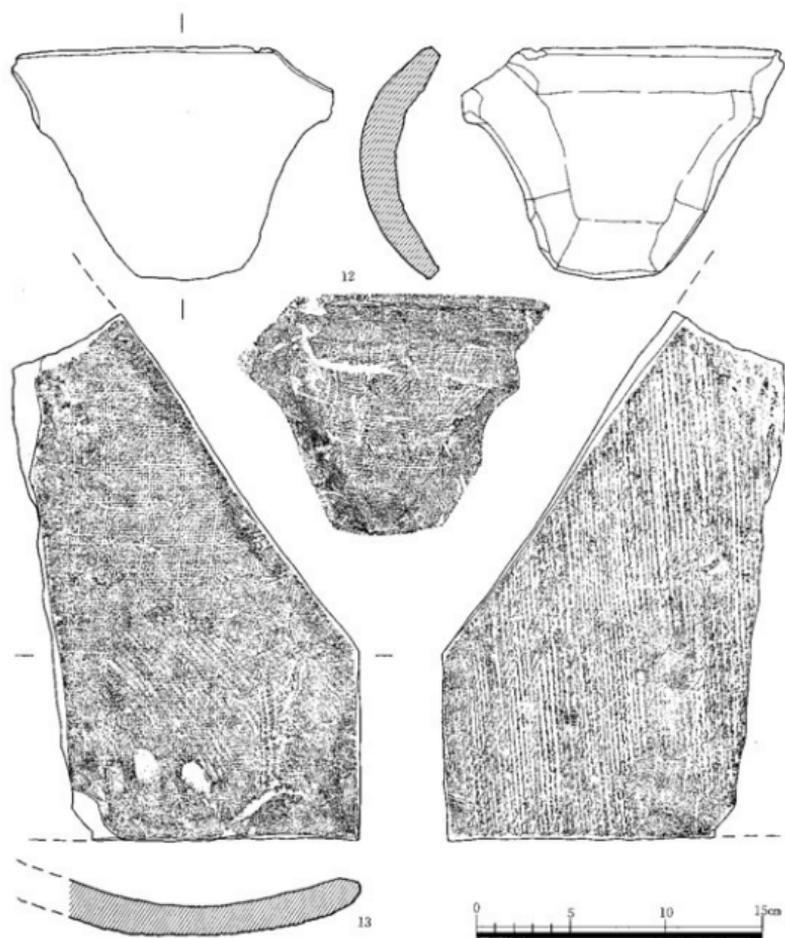
(9) は、行基式丸瓦で、全長33.0cm側縁間最大幅14.0cm最小幅8.3cmを測る。凸面はナデ調整、内面には粘土板糸切り痕、布目痕が認められる。焼成はあまりよくなく、淡灰色を呈する。この丸瓦は、(2) の紀寺系のもとの焼成、胎土が類似しており、同一の地から持ってきた可能性がある。(10) は、当調査において大多数を占める玉縁付の丸瓦である。全長17.0cm側縁部間最大幅7.5cm玉縁部幅5.5cmを測る。凸面はナデ調整、内面には、粘土板糸切り痕、布目痕が認められる。この玉縁付丸瓦は、玉縁部の形態の差により数種類に分けられるこの形態の差は、丸瓦の型の差に起因するものであり、これらを分析することは、工人集団解明の有力な手段となるものである。この結果は整理が終了次第報告したい。

### ・平瓦

当調査地出土の平瓦はほとんど凸面に縄目叩きを施すものである。(11) は溝5北端の瓦暗渠に使用されていた完形の資料である。全長17.7cm 狭端部幅12.5cm 広端部幅13.5cmを測る。凹面には、粘土板糸切り痕、布目痕が認められる。布の端が三方に見られることから一枚作りと考えられる。凸面は、縦に一直線に通る縄目叩き(2本/cm)を施している。平瓦も未整理であるが叩きの種類によって数種類に分類することが可能である。



図一47 出土丸・平瓦、拓本及び断面図



図—48 出土道具瓦

・隅切瓦・面戸瓦

当調査では、丸瓦・平瓦の他に道具瓦も若干出土している。(12)の隅切瓦は凹面狭端部を下にした場合右側縁部と広端部を結ぶ線が焼成前に切られている。この瓦の存在から、建物の屋根の形態が寄棟か入母屋であったことがうかがえる。(13)は面戸瓦で、焼成前に成形されている。このような瓦は、今のところ5例確認している。詳細は整理後の報告に譲る。

## 第7節 まとめ

最後にまとめとして当遺跡の年代及び性格を検討し若干の考察をおこなう。

当遺跡の年代を知る有力な手がかりとしては、土器と瓦があげられる。奈良時代の土器・瓦の年代は平城京の発掘調査で、紀年銘の記された木簡との一括資料により、その存続年代の一点が判明しており、本報告においてもこの年代をもとに考える。まず土器から見ていくと、調査区西半に広がる大規模な整地層内から出土したものは平城編年Ⅰ期に相当するもので8世紀初頭に位置づけられる。この整地層内からは、瓦が全く出土していないことから8世紀初頭以後、瓦葺き建物出現以前に整地がおこなわれたことがわかる。次に建物1雨落溝・溝3・5・7から多量の瓦とともに出土した土器は、平城編年Ⅲ～Ⅴ期に相当するもので8世紀中葉から後葉に位置づけられる。このことから、瓦葺き建物が8世紀中葉に建てられ、9世紀には、放棄されたと考えられる。また築地整地層内からはⅢ期に相当する土器が、瓦や埴土とともに出土していることから、整地が瓦葺き後、間もない時期に行なわれたと考えられる。次に瓦の製作年代から、瓦葺き建物の年代を考える。当遺跡で出土した軒瓦のほとんどは、複弁7葉蓮華紋軒丸瓦と均整唐草紋軒平瓦である。これらは非常に多いことからセットとして創建時に使用されたものと考えられる。この瓦の製作年代は、平城編年Ⅲ期に相当するもので天平十七(745)年から天平勝宝年間(756)に求められる。この年代は、雨落溝や築地整地層内から出土した土器の上限年代とも一致する。この他に7世紀末から8世紀初頭に製作年代が求められる軒丸瓦が数点出土しているが、これらは、1点ずつであることから、転用品と考えられる。以上、土器及び瓦の製作年代から当地では、8世紀初頭に何らかの生活が営まれていたこと、8世紀初頭から中葉にかけての時期に大規模な整地がおこなわれ、8世紀中葉に瓦葺き建物が建てられ、何度かの改修を受けたが、9世紀には放棄されたことが読み取れる。

次に遺跡の性格であるが、当遺跡が奈良時代全期を通じて存続していたこと。寺院跡とは考えられないこと。龍田道がこの付近を通っていたと考えられること等を考慮して、『続日本紀』を補くならば、奈良時代、柏原の地には天皇行幸の際の宿泊施設である行宮が存在していたことがわかる。「智識寺南行宮」と「竹原井行宮」である。この2つの行宮に関しては、文献史学の立場から塚口義信氏が、異名異宮説を主張され、「竹原井行宮」は高井田あるいは青谷の地にあったと推論している。当遺跡は、まさにその青谷の地にあるのである。今回の調査では、遺跡の名称等を示すような資料が出土していないため、「竹原井行宮」とは断言できないが、時期、規模、立地等の諸々の点から可能性は高いと考えられる。今後、発掘調査の成果を基礎にして、仮説と検証を繰り返して、さらに当遺跡の性格を解明していく必要がある。(田中久雄)

註1：奈良国立文化財研究所「平城宮発掘調査報告Ⅳ」『奈良国立文化財研究所報告第26冊』1976年 等

2：国史大系編集会「続日本紀」上・下 吉川弘文館 1983年

3：塚口義信「竹原井行宮と智識寺南行宮に関する二、三の考察」『古代史の研究』第4号 関西大学古代史研究会 1982年

## Ⅱ 国分地区の調査

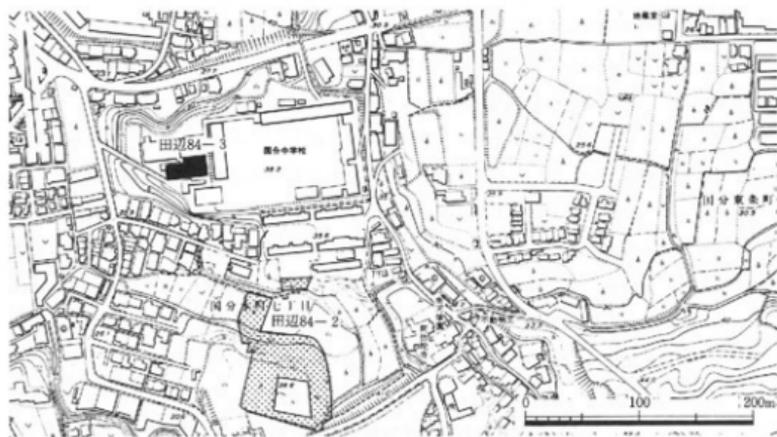


図-49 田辺遺跡調査地位位置図

# た な べ 田 辺 遺 跡

### 84-3 次調査

- 調査地区所在地 柏原市国分本町7丁目1-20
- 調査担当者 北野 重
- 調査期間 1984年9月27日～10月1日
- 調査面積 6.0㎡ / 14,605㎡

当調査区は、南北方向に伸びる平坦な丘陵上に位置し、その西端にあたる。丘陵北端には、松岳山古墳群が存在する。国分中学校の屋内運動場建設に際して立会調査を実施したところ、遺物が出土した為、急拠申請者（柏原市）、業者（岡本建築設計、松田組）と協議し、発掘調査を実施した。

調査は、3.0×2.0mの範囲で実施した。基本層序は、0.5～0.9mの盛土下に20～40cmの耕作土がある。耕作土の下層に50～70cmの遺物包含層を確認した。

遺構は、南北方向の溝を検出した。溝は、南側に下向き、八の字状に拡がっている。溝埋土

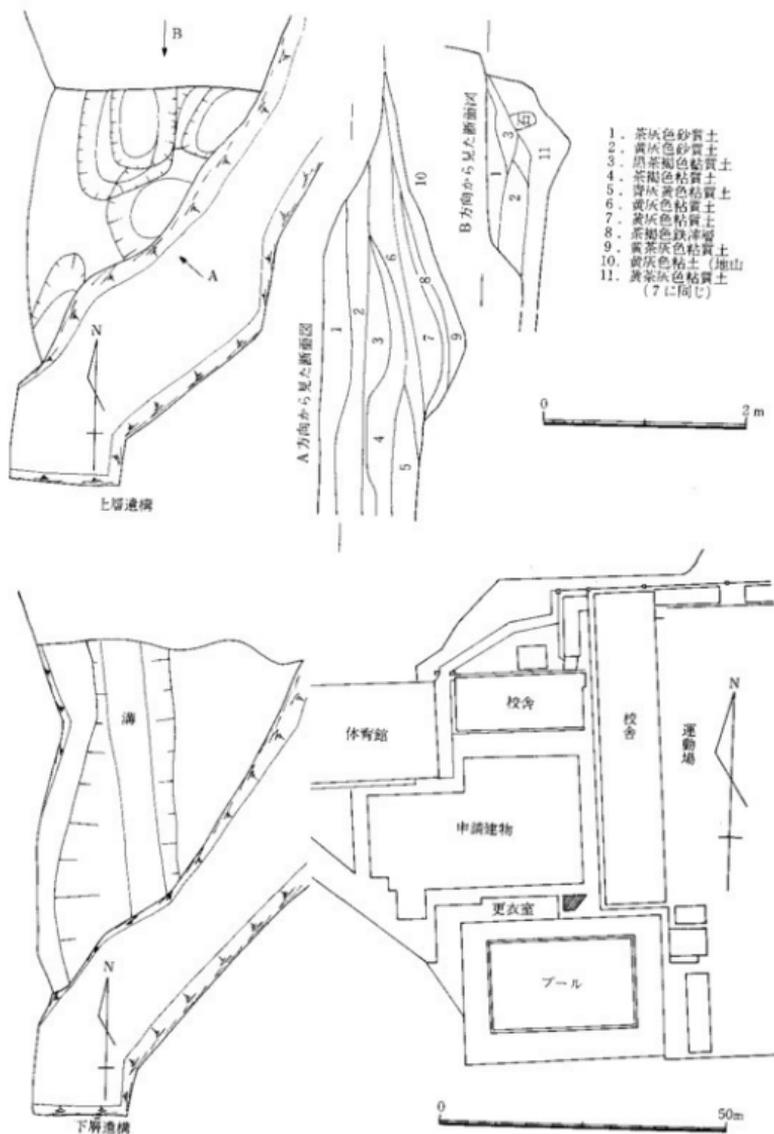


図-50 平面図・付近地図

は、黒茶褐色粘質土を黄灰色粘質土がある。前者は、炭や灰、鉄滓、熔壁等を多く含み、後者は、土器類を多く含むが炭や灰はほとんど含まない。

### 出土遺物

出土遺物は、須恵器、土師器、轆羽口、鉄滓、埴輪等がコンテナ14箱出土した。その内、鉄滓が12箱である。

#### 須恵器 (図-52)

杯蓋身、すり鉢、甕、高杯がある。杯蓋は宝珠つまみが付くものと付かないものがある。杯身の中には底部を回転ヘラ切りしたもの(5)がある。杯の外面にヘラ記号もみられた。(3)は「一」、(4)は「X」、(6)は「VI」が記してある。

#### 土師器 (図-52)

杯、甕、壺、鉢、鍋、羽釜、甑、移動式のかまど等がある。杯は、内面に暗文を施こし、外面を磨きするものが多い。羽釜とかまどの胎土のみが生駒西麓産の胎土で、砂粒と金雲母を多量に含み、茶褐色を呈する。

#### 轆羽口 (図-51)

轆羽口は、製鉄や鍛冶関係の火力を増加させる為の送風装置である。破片を含め、相当量出土した。炉の内部に突出する先端部分の遺存が良好であるのに対して、炉の外側にある他端は遺存するものがなく全部欠損している。両端が同一太さの形態のもので、「八」の字に一端が広がるものは認められない。外側はほとんど丸く作られているが、一部八角形又は縦方向に板で叩いた痕跡のあるもの(1・3)も見られる。多角形状のものは、製作時の単なる違いによるものか、鍛冶炉の構造変化あるいは轆羽口自体の性能や製作に何らかの進歩を示すものか今後の検討を要する。

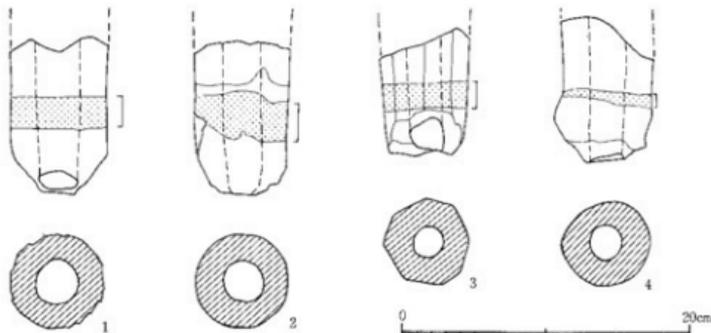
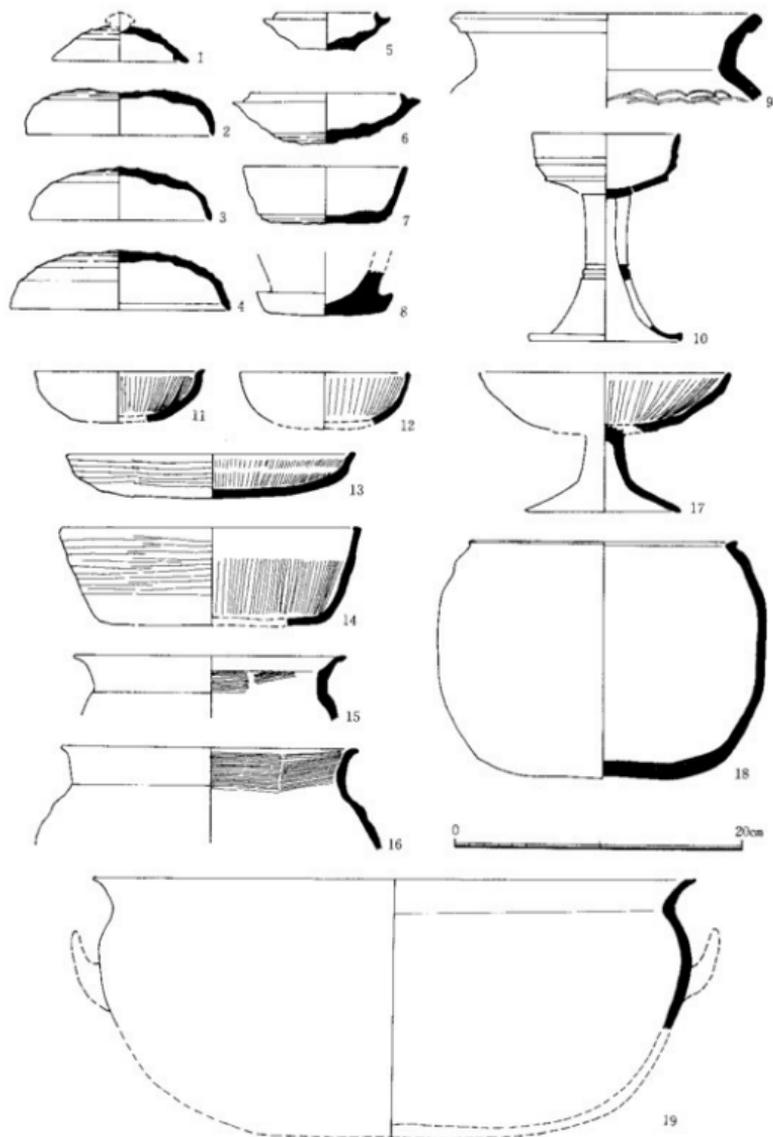


図-51 轆羽口



圖—52 出土遺物 1~10須惠器、11~19土師器

No	現存長	体外外径	体内内径	先端長	壁の厚さ	胎 土	色 調	その他
1	11.2	6.6	3.0	4.5	2.2	砂粒が多い	赤褐色	外面タタキを施す
2	9.0	5.9	2.2	3.4	1.9	〃	〃	八角形
3	10.3	6.1	2.2~2.4	3.9	1.1	〃	〃	外面丸い
4	10.8	6.5	2.9	3.8	2.7	〃	〃	〃
5	8.9	6.8	2.4	2.4	1.6~2.2	〃	〃	〃
6	10.4	7.5	2.2~2.6	3.7	2.3	〃	〃	〃

表一三 鑪羽口比較表

体外外径と内径の大ききの比較をすれば、それぞれ近似するものの、微細にみると比例する事はなく、各個体に相異なる。上表の先端長としたのは、鑪羽口を鍛冶炉の中に装置する折、炉の内側に突出している部分の長さを示す。鍛冶稼働の結果として、この部分に溶融した金属が付着する事から明瞭に判かる。全体にこの部分の遺存は良好である。炉壁の厚さは、鑪羽口が装着され、稼働後に高温の為色調変化を帯した部分から概略ながら判断される。つまり、炉の内側と炉壁中及び炉壁外に3分割され、黒茶褐色、灰青色、赤褐色を呈し、壁の厚さは1.1~2.7cmの厚さがあり、全体的には2cm前後のものが多い。胎土は、砂粒を多く含む粗いもので赤褐色のものが全部である。大泉遺跡出土鑪羽口(茶褐色)の胎土と異なる。

### 鉄 滓

鉄滓は、調査区全域から、特に落ち込みや黒茶褐色粘質土や最下層の黄茶灰色粘質土から多量に出土した。総重量は122.4kgの重量を測る。出土層位によってその形状・規模に相違差はなく、同類のものである。半載されたものや破損のしたものが多く、いわゆる椀形滓である。上面からみると長楕円形で、断面は、中央部が厚く端部になる程薄い三角形状である。上面は平坦で、表面には炭や木炭が混入しているものが多く、気泡も全体に認められる。鉄分の含有は分析によらなければならないが、大ききの割に軽重の差があり、その割合も多種に及ぶ。1個の鉄滓の重量は、3~4分類される。100~300g、400~600g、700g~1kg、1kg以上である。前2者が大半を占め、700g~1kgのものは10数点、1kgを越すものは2点のみであった。

### その他の遺物

埴輪は細片であるが、形象埴輪と円筒埴輪が出土した。恐らく5世紀代のものであろう。縄文時代から旧石器時代のサヌカイト石核及び剝片が出土した。これらの石器は、最近の田辺遺跡の調査による成果で製品(有舌尖頭器、国府型ナイフ、石鏃)が顕著に発見されており、風化の度合いからも同時代のものと考えて大過ないものと考えられる。

# まつ おか やま 古 墳 群

## 茶臼塚古墳 (84-2次調査)

- ・調査地区所在地 柏原市大字国分1655
- ・調査担当者 安村俊史
- ・調査期間 1984年12月17日～26日
- ・調査面積 10㎡

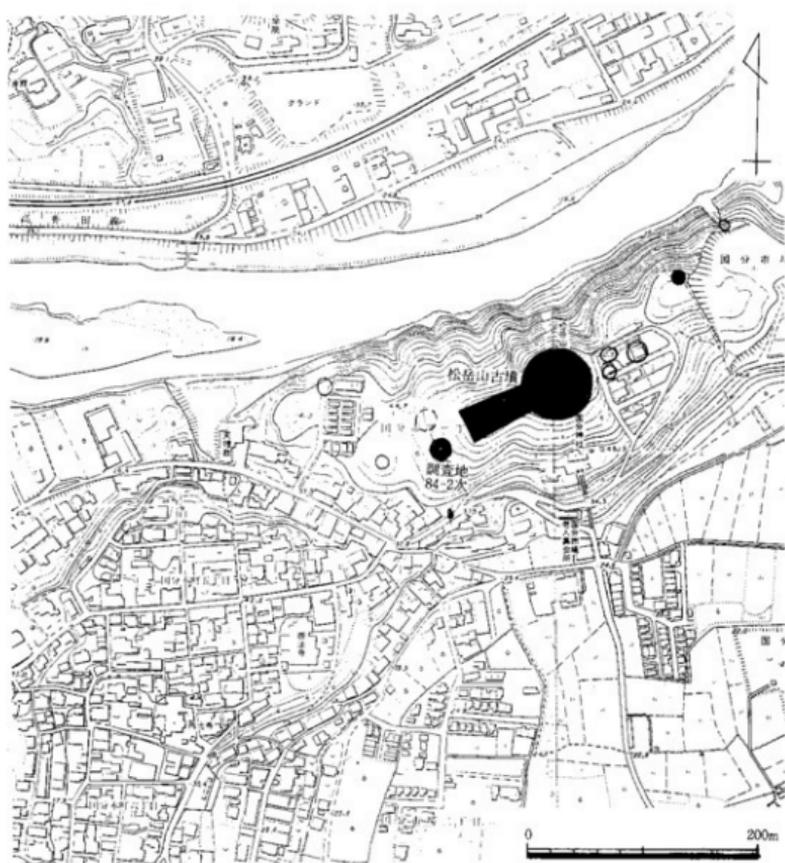
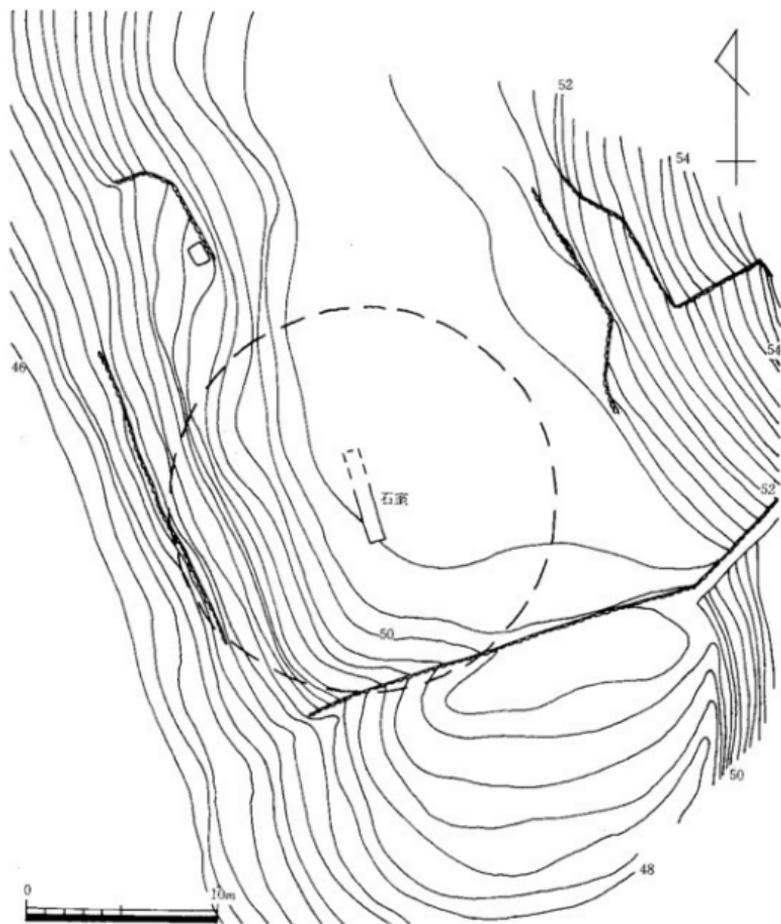


図-53 調査地位図

### 1. 調査に至る経過

柏原市国分市場の裏山弥太郎氏所有の果樹園にて、裏山氏らが貯水槽設置工事中に銅鏡、石製品などを発見し、国立飛鳥資料館に鑑定を依頼した。そして翌日、12月15日に大阪府教育委員会文化財保護課を経て柏原市教育委員会に連絡が入った。柏原市教育委員会では、現地視察を行い、遺物出土地点が堅穴式石室内であることを確認し、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもとに、12月17日から半壊状態の石室の調査を実施することにした。



図一54 地形測量図

## 2. 調査成果

堅穴式石室は遺物の出土状況から判断すると、貯水槽工事前に盗掘を受けていたとは考えられない。しかし、工事の際に壁面の石は大部分が崩壊し、原位置を留めていたのは南西隅のごく一部であった。石室の写真で側壁のように見える部分は、遺物発見者が再び積み上げたものである。工事に伴う掘削は東西約3m、南北約4mに及ぶが、石室の北側部分は破壊されずに残っている。今回の調査は、既に崩壊している部分を記録し留め、石室の規模、構造を明らかにするために実施したものであり、破壊されていない北側の調査は実施していない。

調査地は果樹園となっているため、古墳のマウンドは確認できない。しかし、地形測量の結果、直径20m前後の円墳と推定される。調査地北側も同様な地形を呈するので、北側にも円墳が存在すると推定される。

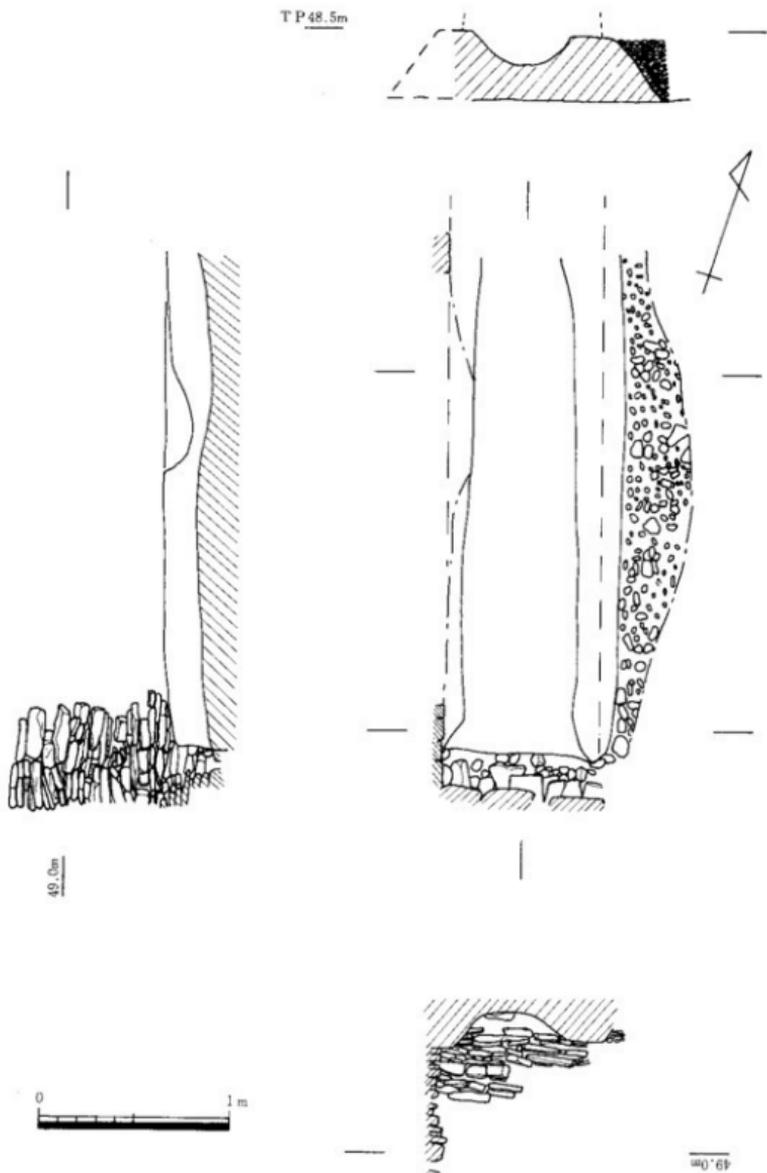
堅穴式石室は安山岩の割石を小口積みに構築したものである。安山岩は長辺30cm前後、短辺20cm前後、厚さ3～5cmのものが多い。石室内面には朱が塗布されている。控積みは5～10cmの自然石と少量の安山岩板石によって、ほとんど空隙なく積まれている。石室内法の長さは280cm以上、幅75cm、高さ150～160cmと復元できる。壁面は80°前後の傾斜を示し、天井石と確認できるものはなく、やや大きな石を使用していたのであろう。残存している石室北側部分も上半は石室内へ転落している。

粘土棺床も遺物発見の際に、やや損なわれている。粘土棺床は明黄褐色の粘土で造られ、上面が円弧状にくぼみ、部分的に朱が遺存している。割竹形木棺が安置されていたと推定されるが、割竹形木棺上部にも粘土が巻きつけられていたかどうかは不明である。粘土棺床が著しく破壊されていた部分で、粘土棺床を断ち割り、横断面を観察した。粘土棺床横断面は台形を呈し、上面の幅約90cm、下面の幅約140cm、高さ34cmである。粘土棺床の周囲には5cm前後の礫が粘土棺床上面までつめられている。粘土棺床南端は石室南端より約20cm北側で終わる。その間には、やはり礫がつめられているが、小口板の有無は不明である。粘土棺床は墓底に直接築かれており、その間に礫、板石等は認められない。また、粘土棺床上面に石英等の白色の小礫が多数敷かれていたようである。小礫は割竹形木棺下に敷かれていたものか、割竹形木棺内に敷かれていたものか不明であるが、松岳山古墳墳頂部に見られる白色礫と同質である。

石室西側に設定した小トレンチによって、墓底上面の幅を確認した。その結果、墓底上面の幅は約510cmと推定される。しかし、墓底の傾斜角、あるいは墓底底四周の排水溝の有無等は未確認である。

石室構築順序を復元すると、墓底掘削後、墓底底に直接粘土棺床を設置し、割竹形木棺を安置する。その後、粘土棺床の周囲に粘土棺床上面まで礫をつめ、粘土棺床上面から壁体をやや持ち送りに構築する。最後に、暗黄褐色の粘質土で覆って完成となる。

T P 48.5m



图—55 竪穴式石室実測图

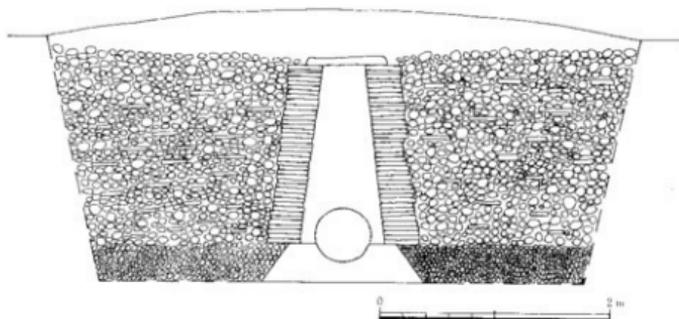


図-56 整穴式石室横断面模式図

副葬品は三角縁神獸鏡1面、碧玉製鐵形石3点以上、碧玉製車輪石3点、碧玉製石釧15点以上、鉄剣小片などが出土している。副葬品の配置は不明であるが、碧玉製腕飾類には朱の付着しているものが多く、発見者の談によると粘土棺床南端付近で鏡を発見、粘土棺床の東西両側に並ぶように碧玉製腕飾類が出土しているようである。いずれも棺内副葬であろう。

三角縁神獸鏡は仿製の獸文帯三神三獸鏡である。直径21.9cm。内区には6個の素乳を置き、素乳の間に各3個の神像と獸形を交互に配する。神像は左右対称の正面向き坐像である。獸形はいずれも向かって左を向き、2個は頸部を縦位にするが、1個は約45°傾けている。乳と鈕の間には6個の松種形を配し、鈕座は有節重弧文圈座である。鈕座は鋳治時に一部欠損する。内区外周には、内傾する幅の狭い鋸歯文がめぐる。

内区外周の文様帯には10個の素乳を置き、その間に10個の動物を配する。左まわりに、獸面十蛙(?)、双魚、龍、蛙十獸面、四足獸、龍、双魚、鳥、四足獸、龍となる。このうち、5番めの四足獸から9番めの四足獸までの動物形の左には、意味不明の記号状の文様がみられる。また、乳の下に重弧文を施した部分もある。獸文帯の外周には櫛歯文帯がめぐり、10個の小乳がみられる。小乳は獸文帯の乳のほぼ中間に位置するが、若干ずれたものや獸文帯にややかかるものがある。外区は鋸歯文帯、複線波文帯、鋸歯文帯と続く。

同範鏡は知られていないが、寺戸火塚古墳出土鏡によく似ている。獸文帯も最初と最後の蛙と龍が入れ替わっているのみであるが、双魚の一方が小さい等の相異点も多い。<sup>註</sup>



図-57 三角縁神獸鏡断面図

鍔形石は3点出土しており、他に板状部の破片等がある。(1)は環体の左側が直線状、右側が弧状を呈する。内孔はほぼ左右対称であるが、やはり左側がやや直線状になる。突起の突出は弱く、頭部も小さい。板状部は右側が弧状になり、左下が一部欠損する。淡緑色を呈し、軟質の凝灰岩製である。(2)はほぼ左右対称形となる。頭部や突起の突出は鋭く、内孔の周囲には縦方向の面取りが施される。(3)も(2)とよく似た形態であるが、突起が大きく、突起の中央に沈線がはしり、下端は内孔の下端に一致する。

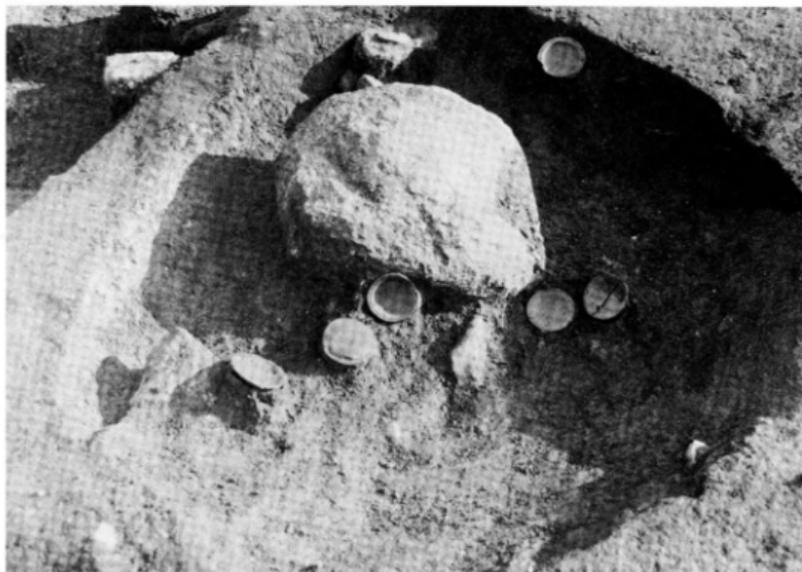
車輪石は3点出土している。(4)は両面に条線がみられる正円形のものである。1面には34条、他の1面には42条の条線がみられ、条線間は凹面に面取りされている。内径4.9cm。(5)・(6)は外形が下ぶくれの卵形となり、1面のみ条線がみられ、他の1面は平滑面となる。(5)は35条の条線をもち、内径5.6cm。一部欠損する。(6)は25条の条線をもち、内径4.6cm。共に軟質である。

石剣は15点出土しているが、欠損するものもあり、出土時の破損も著しい。また、他にも石剣の破片と思われるものが数点ある。石剣は多くのタイプのものがみられる。(7)は偏平で、両面に文様が施されている。やや傾斜の強い斜面にはほぼ四等分する位置に刻線が施され、その両側は凹面に面取りされる。その刻線の間には、密な刻線が施される。もう一方の面には、等間隔に刻線が施され、その間を車輪石のように凹面でうめている。内径5.8cm。(8)も偏平であるが1面のみ文様がみられ、他の1面は平滑面となる。文様は連続した山形を削り出し、その頂部と谷部に刻線を施す。内径6.0cm。(9)から(18)までは、刻線を施した斜面と凹面をなす垂直面とから成るが、垂直面下端部が斜面下端部より内側になるものから外方へ強く張り出すものまでみられる。また、大部分の刻線は密に施されるが、(10)のようにその間隔の広いものもある。斜面の文様が四等分に分割されるものに(16)と(17)があり、(17)は3本の刻線によって分割される。また、(18)は2破片から復元すると三等分に分割されていたようである。これらの石剣には、斜面と垂直面の間に1条の沈線がめぐるが、(11)のように刻線の下端部に後で施された沈線が重なっているものもある。内径は順に、4.5cm、5.4cm、5.8cm、5.9cm、5.9cm、5.6cm、6.0cm、5.3cm、5.5cm、5.2cmである。(19)と(20)は垂直面が2段の凹面をなし、斜面と垂直面の間の沈線はみられない。内径は6.0cmと5.9cmである。(21)は斜面と垂直面に刻線を施す。斜面と垂直面の間には沈線がめぐり、垂直面は凹面をなさない。内径5.5cm。

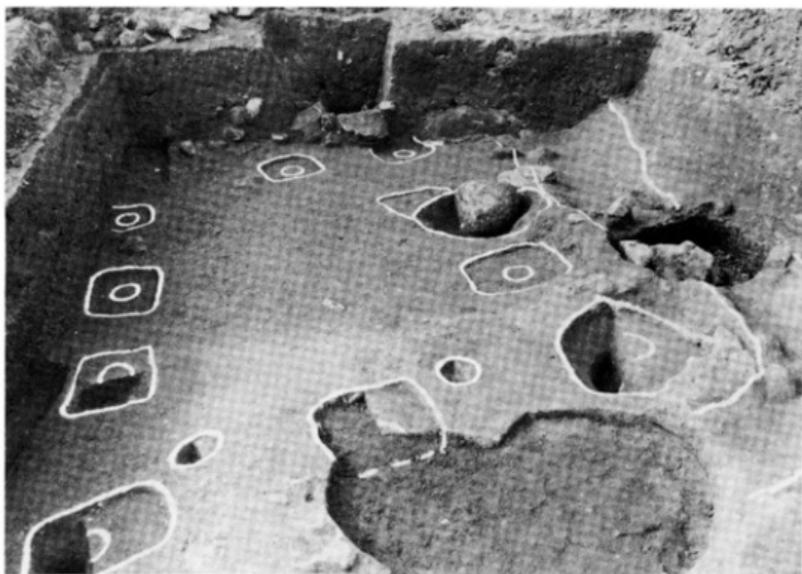
以上のような豊富な副葬品を有する茶臼塚古墳が小円墳である点が重視されねばならない。茶臼塚に前方部を接するように築造された松岳山古墳は、やや後出すると思われるが、全長約110mの前方後円墳であり、規模は隔絶したものである。

註、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター所長田中 琢氏の御教示によると、同范鏡が存在するようで

# 版 圖

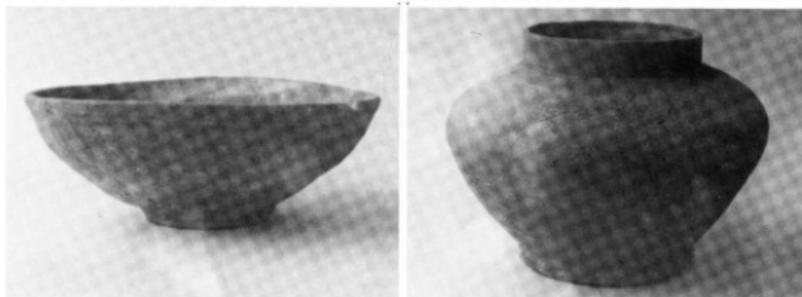
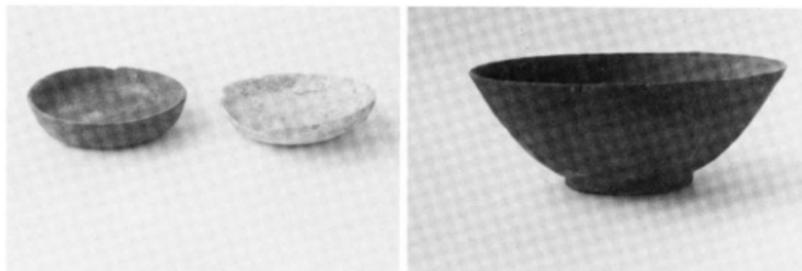


1. 土塚墓一1



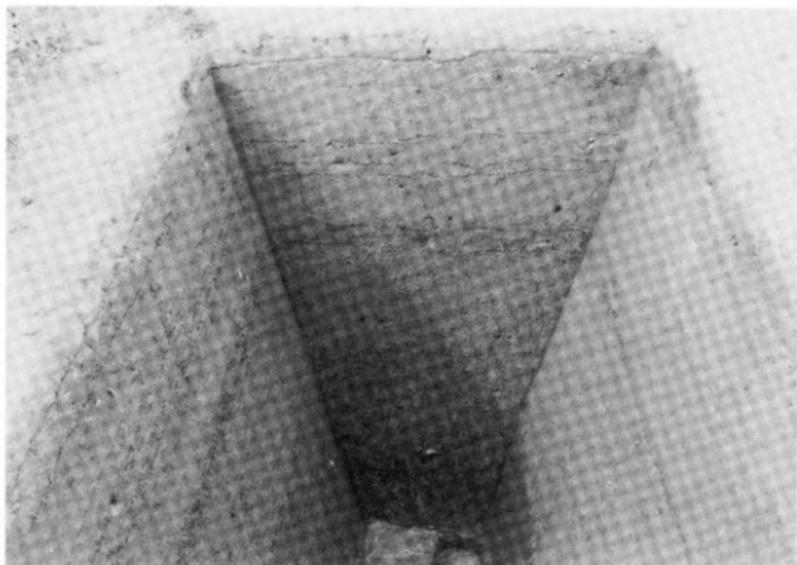
2. 建物一1

図版二 大泉遺跡





1. Aトレンチ谷状地形（南から）



2. Bトレンチ北壁（南から）



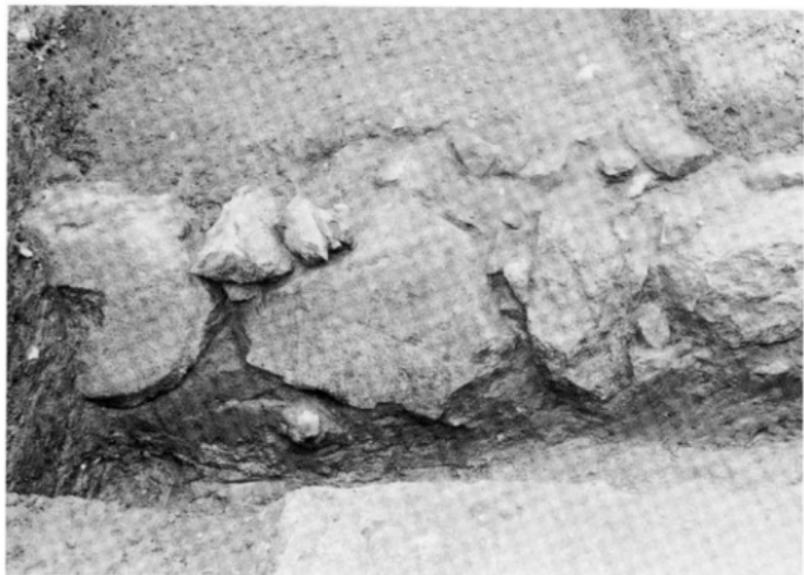
1. 調査地全景



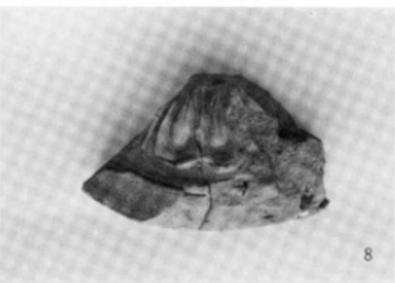
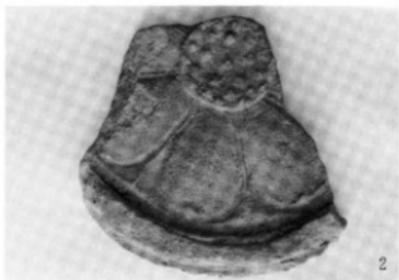
2. 屋瓦出土状況



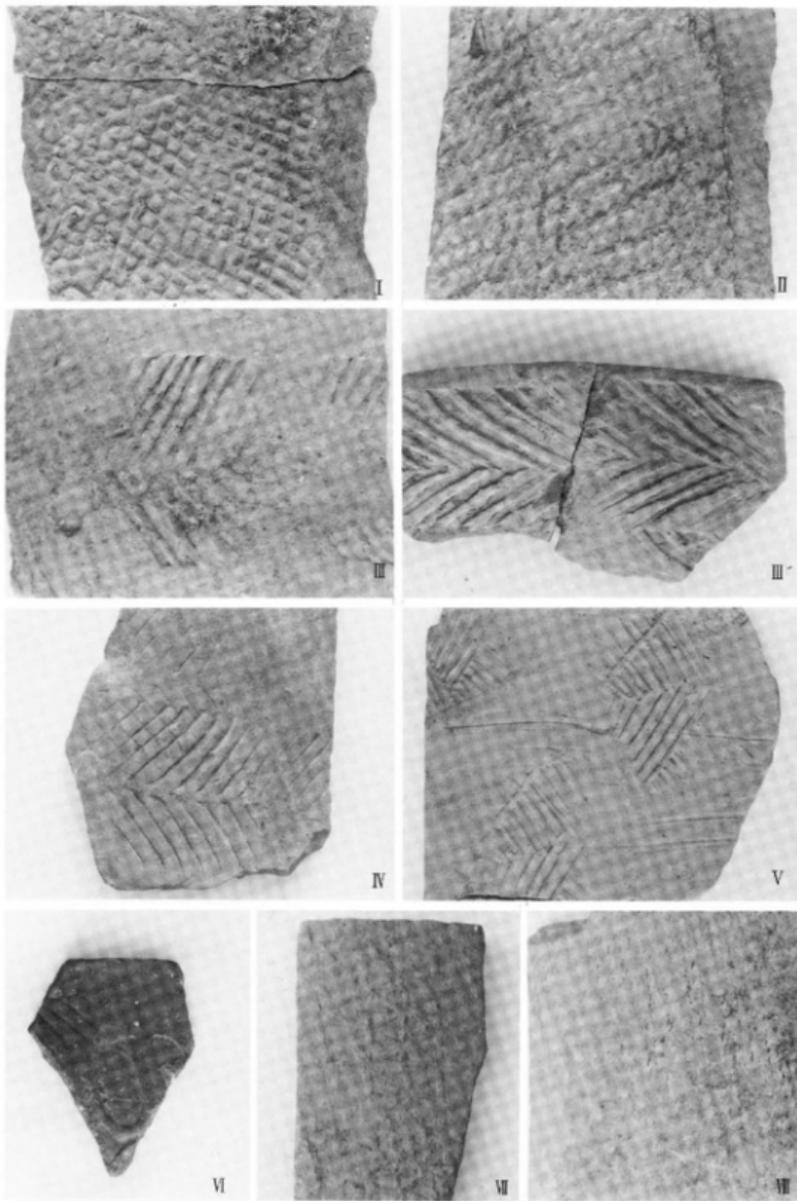
1. 石列（東から）

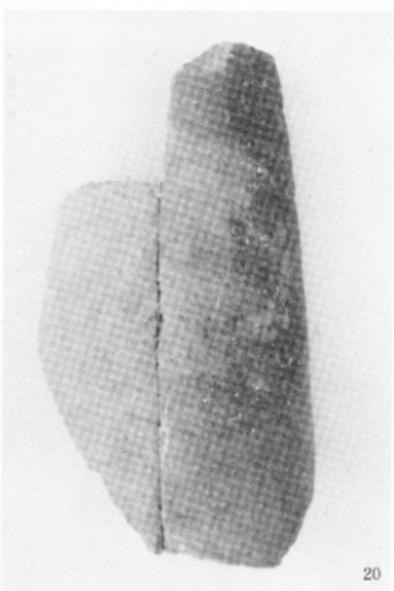
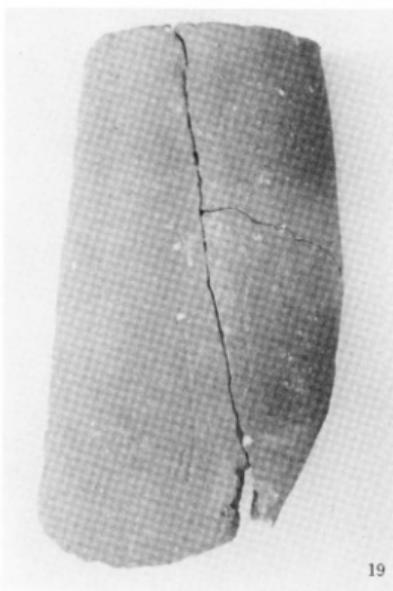
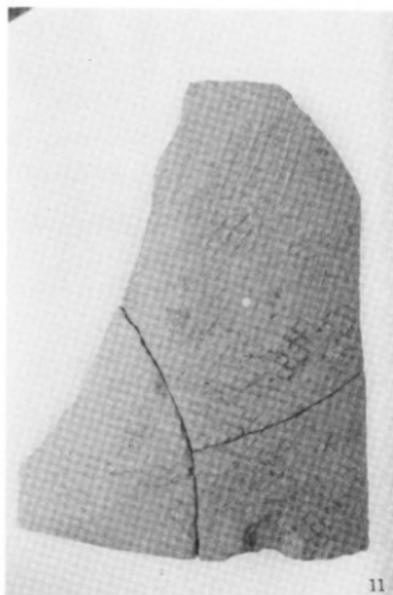


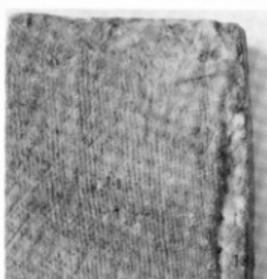
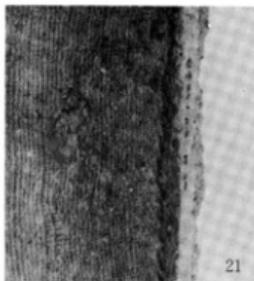
2. 石列（南から・左端は礎石の転用）



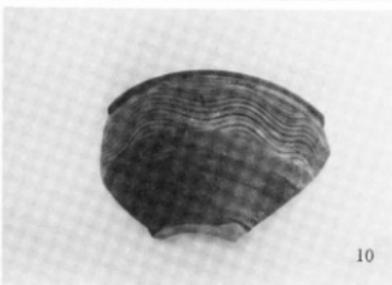
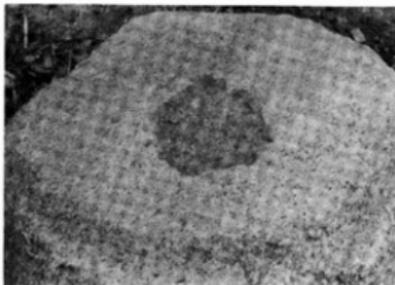
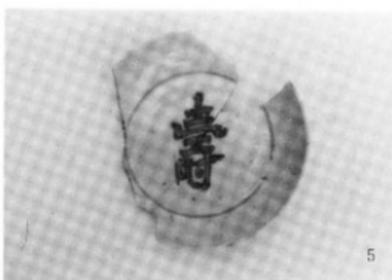
図版七 安堂遺跡







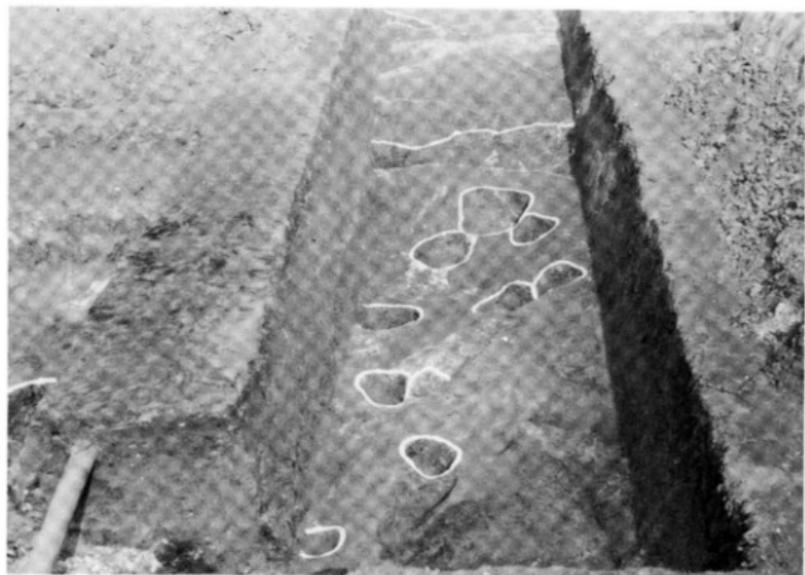
平瓦分割界線



土器



1. 調査地全景



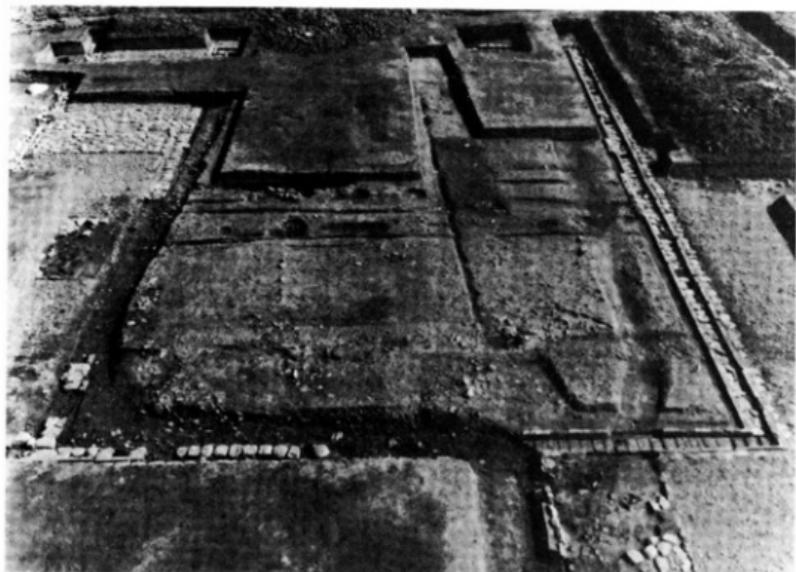
2. 遺構



調査区全体 (右が北)



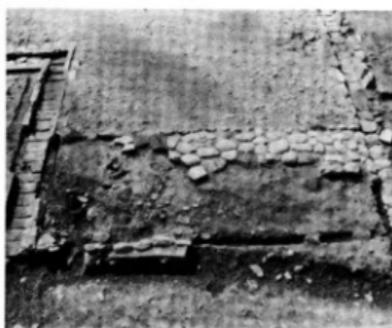
1. 建物1と西辺渡り廊下（南西より）



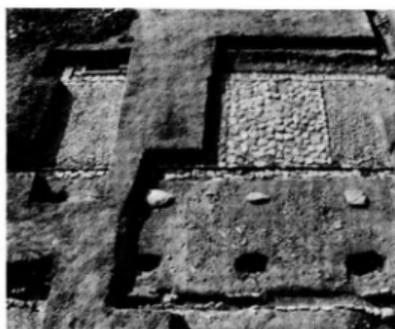
2. 建物1（西より）



1. 建物1北辺東渡り廊下(北より)



2. 建物1西辺渡り廊下(北より)



3. 建物2(回廊)(北より)



4. 建物2(回廊)(西より)



5. 溝2・3及び石列(築地)(東より)



6. 溝2・3及び石列(築地)(南より)



1. 溝5南端 (東より)



2. 溝5北端



3. 建物3 (北より)



4. 建物3 (北より)



5. 溝5・6・7 (東より)



6. 溝6張り出し部 (南より)



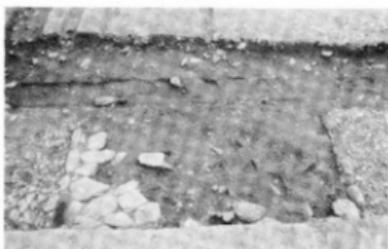
1. 建物1下層ピット列



2. 建物1凝灰岩地覆石



3. 建物1西側雨落溝(南より)



4. 渡り廊下、建物1北辺西(北より)



5. 建物2礎石(東より)



6. 建物2掘立柱(北より)



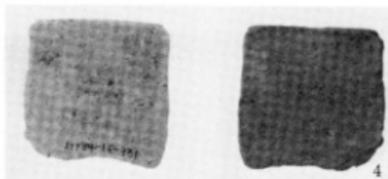
7. 溝5南端(南より)



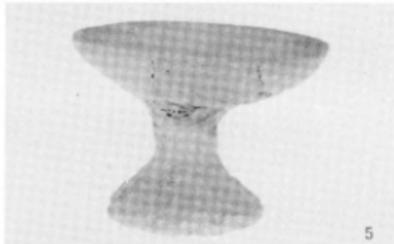
8. 溝5北端(東より)



1



4



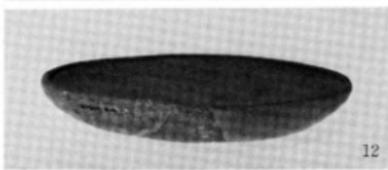
5



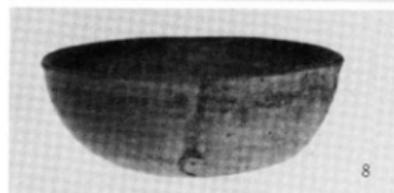
7



11



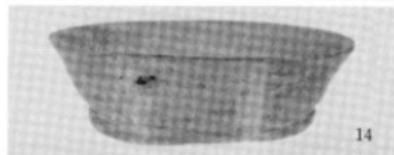
12



8



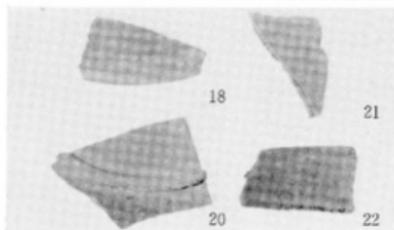
13



14



17



18

21

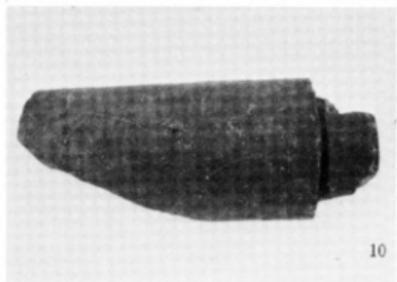
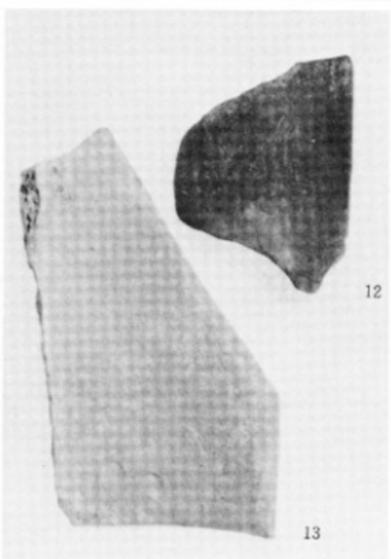
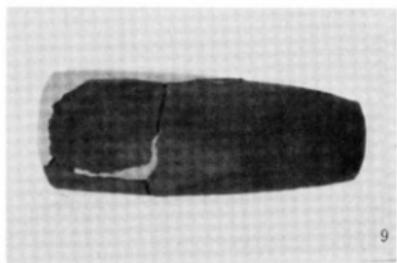
20

22

出土土器 (番号は図と同じ)



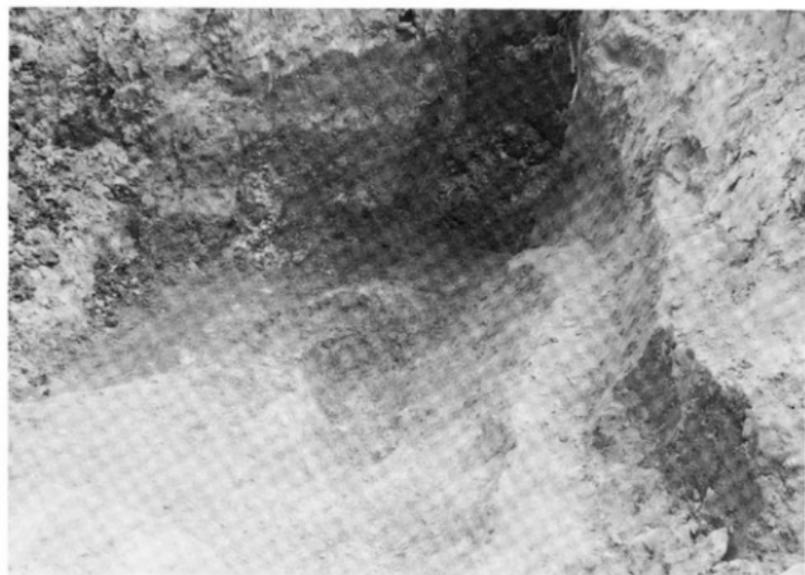
出土軒丸瓦・軒平瓦（番号は図と同じ）



各種出土瓦（番号は図と同じ）



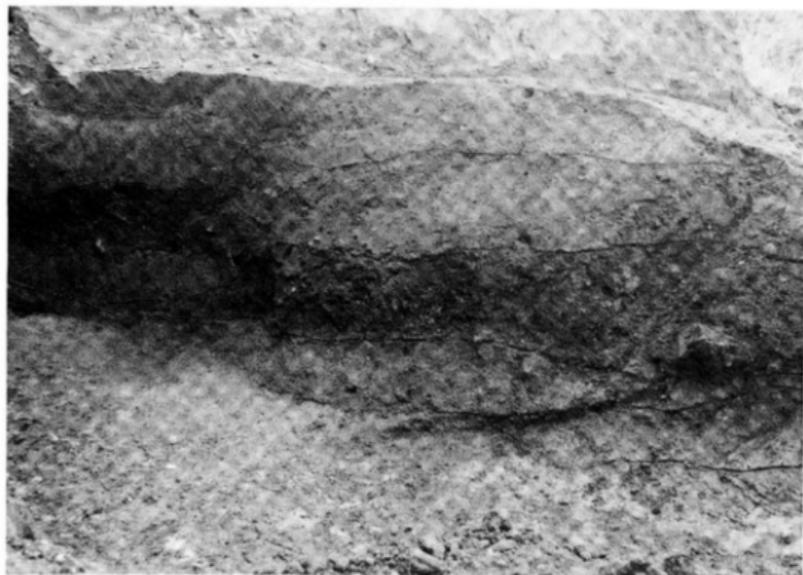
1. 調査前全景



2. 調査後全景



1. 北側断面



2. 南側断面

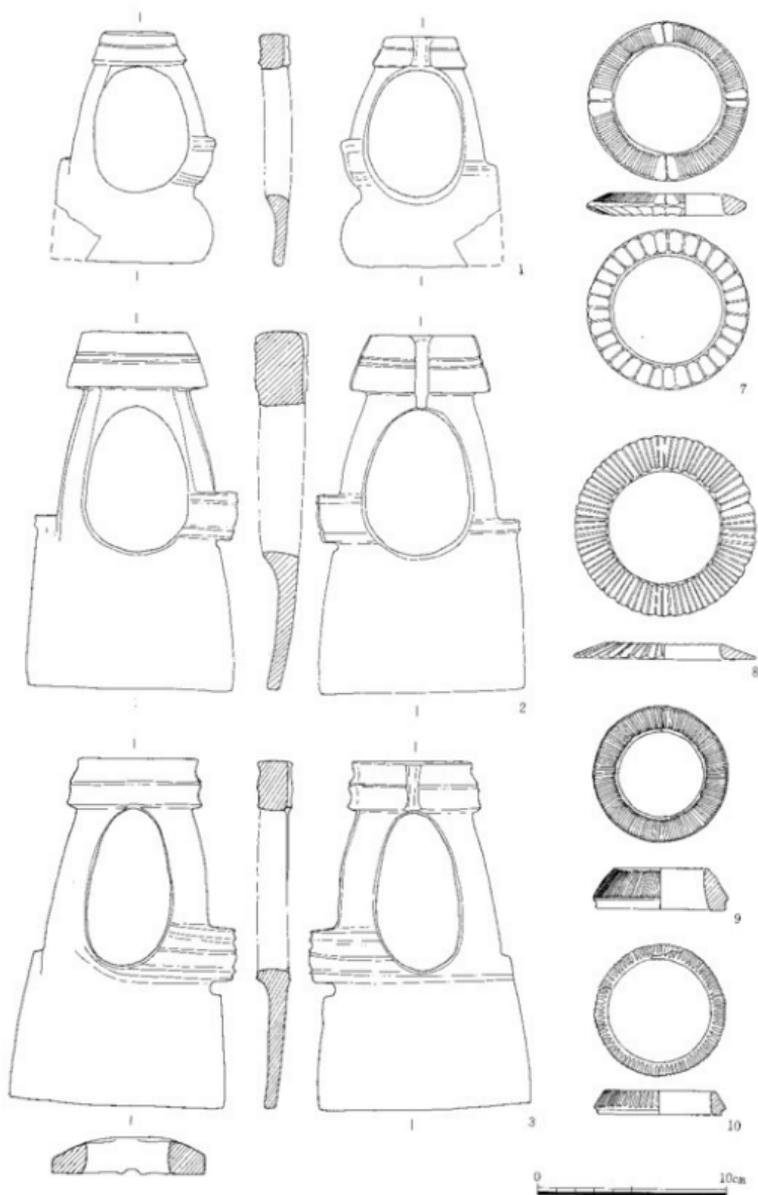


1. 桶羽口

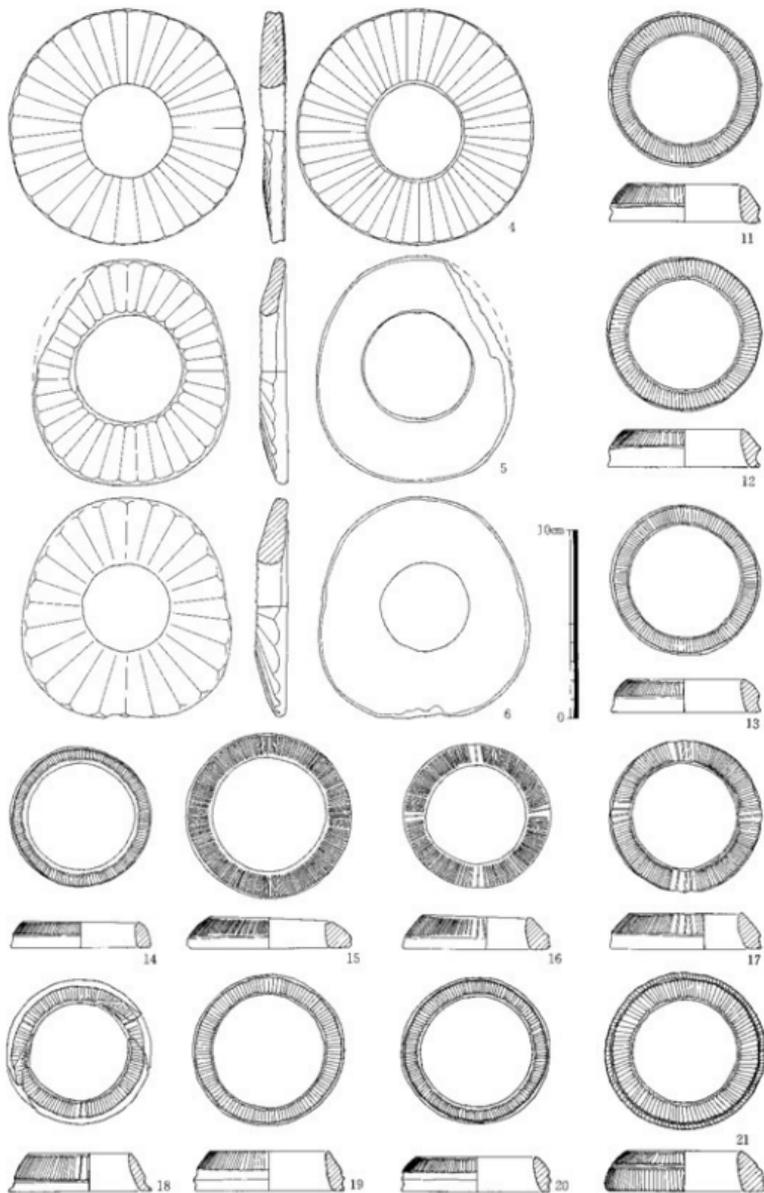


2. 鉄滓

図版三二 松岳山古墳群（茶臼塚古墳）碧玉製腕飾類(1)

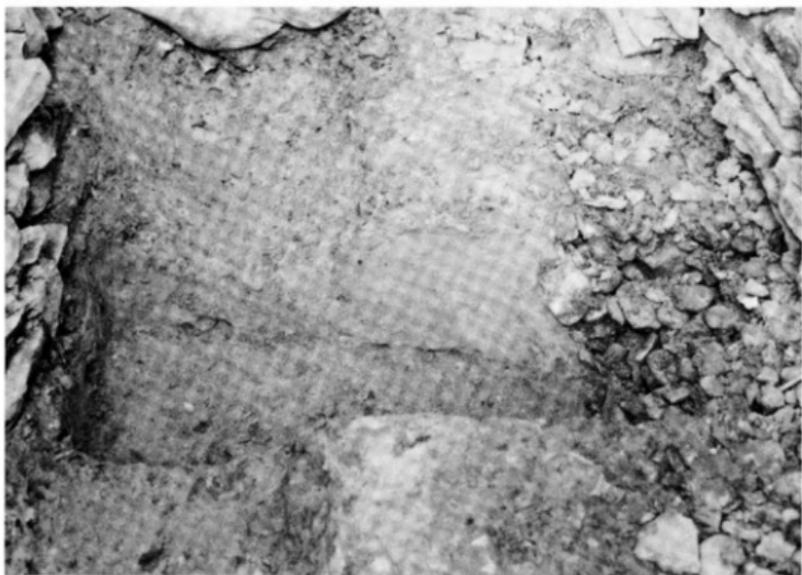


図版二三 松岳山古墳群（茶臼塚古墳）碧玉製腕飾類(2)

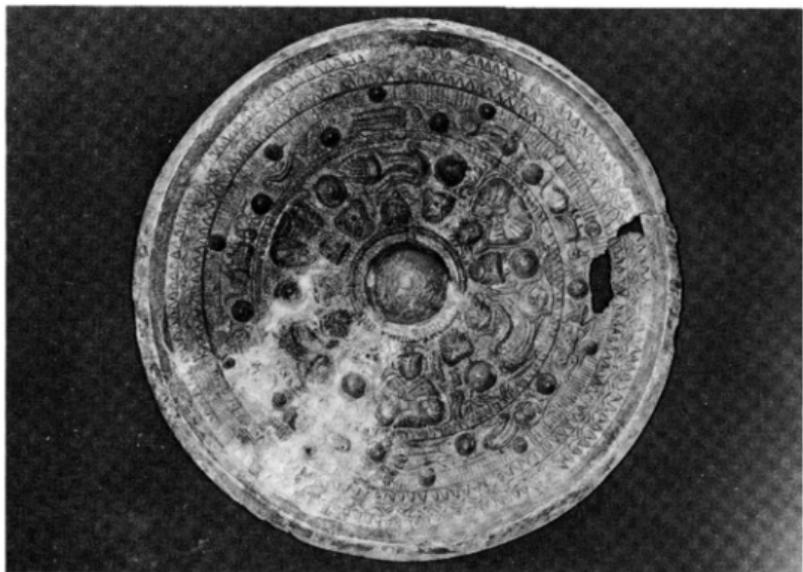




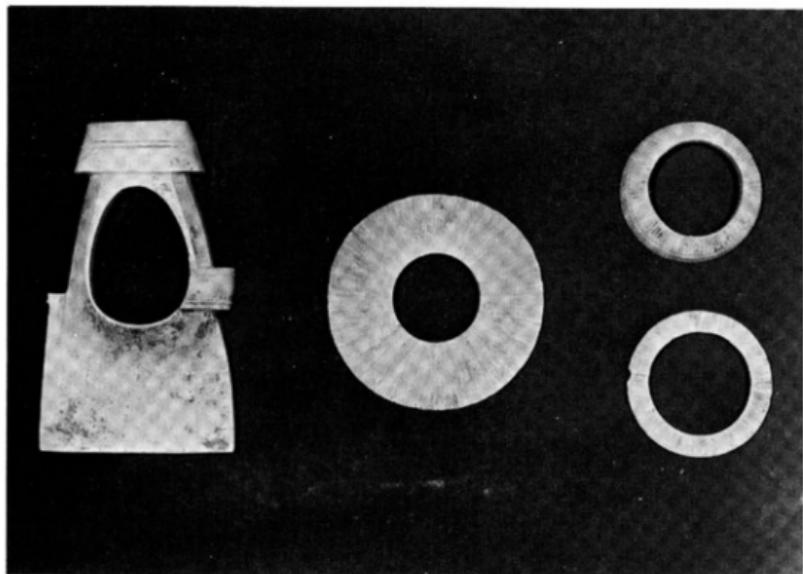
竈穴式石室（北から）



粘土棺床断面（南から）



三角縁神鏡



碧玉製腕飾類

柏原市埋藏文化財発掘調査概報  
1984年度

編集・発行 柏原市教育委員会

〒582 大阪府柏原市安堂町1番43号

電話 (0729) 72-1501 内716

発行年月日 昭和60年3月31日

印刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

